
境界線

薙月 桜華

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界線

【Nコード】

N4382E

【作者名】

薙月 桜華

【あらすじ】

遠くは無い未来。戦争によって人類の記憶のすべてが世界のある場所に保管された。しかし、その事実は時とともに人々の記憶から忘れ去られた。その「過去の記憶」を求めた人々がそれぞれの思いを胸に記憶が眠る場所へと向かう。

第一話 旅立ち

第一話 旅立ち

2230年 日本

青々と茂る森、鳥たちの鳴き声。風の音とともに、薄暗い森の中に2人の声が響く。

「セイちゃん待ってよ。」

少女は前を走る少年に頼みを乞う。もう無理かも、いやまだいけるかな。少女はそう思いながら追いかけた。熱を帯びた体に触れる空気が冷たい。

少年は振り返り、どんどん離れていく少女に少年は言った。

「マヤ！早くついて来い。」

「マヤ」と呼ばれた少女は懸命に少年の後を追いかける。

ただでさえ足場の悪い山道を、走って登るなんて間違ってる。マヤは走りながらそう思った。私は女よ。無理させないでよね。そうは思ったものの言葉にすることは止めて、代わりにこう言った。

「お願いだから、待ってよ。」

しかし、少年はお構いなしに登っていく。

頂上はもうすぐだ。

「ハア…ハア…セイちゃん、早いつてばあ。」

少々遅れて頂上に着いたマヤは息を弾ませながらいった。

「もう少し体力を付けることだな。」

そういつて、少年は町が見渡せる方角に座った。そして、マヤに隣に座るよう促した。

「……………」

マヤはむっとしつつも少年の隣に座った。

「……あ、それと俺はセイジだ。セイちゃんじゃない。」

セイジは小さくつぶやくように言った。

「知ってるよ。」

マヤの笑顔は可愛かった。

それからどれくらいたったのか。

「……………」

セイジは何も言わず前を向いたままである。

「ちよつと！何か言いなさいよ。」

マヤは軽くセイジの肩を押す。

「マヤ……………」

「ん？」

セイジの顔を覗き込む。

「このほしの過去を知ってるか？」

セイジの言葉は唐突だった。

「ふえ？」

何を言い出したのか、すぐには理解できず。マヤもまとまった言葉が出ない。

「知ってるか？」

少し悩んで、マヤは言った。

「うゝん、知ってるも何も、あの戦争以前の記録はないし……………」

「そう、そうなんだよ。」

セイジは何かさつきよりも元気良くなっている。

何を納得したのか。

「俺たちの知りえる記録はたった百年分。」

「正確にはもう少しあるけどね。」

マヤがそこに軽く突っ込みを入れる。

「まあ、それしかないわけだ。だがな。」

「だがな？」

最後の部分を繰り返し、マヤは彼の次の言葉を待った。

「それ以前の記録がまだこの世に存在するらしい。」

「えゝ？どこどこ？どこにあるの？」

マヤは立つて、あたりを見回す。

「お前、こっから見えるところにあると思っっているのか？」

セイジはあきれた様子だ。

「じゃあどこよ？」

マヤは早く答えを言つてと言わんばかりの顔をしてやった。

「ここにはない、西の方らしい。」

セイジはそう言つて、（多分）西の方角を見た。

「西？」

マヤも同じ方角を見る。

「ああ、海を渡つたずつと向こう。」

「それつて、かなり……。」

マヤの返答を無視して、セイジは続けた。

「百三十年前のあの時、過去の命は生きながらえたみたいだ。」

「命？」

「過去の記憶の塊らしい。」

「らしい？」

「そう、らしい。」

「……………」

しばしの沈黙。その場が凍りつく。

マヤはセイジの後頭部に豪快な突込みを。

「へい！」

いれた。

「イッタゝ。」

頭をさするセイジ。それを見てマヤはなぜかうれしそうだ。

「御洒落たこといつてるばあい？」

「うつ……いてえ、おれは亡くなつたじいさんから聞いたけど、じ

いさんの代じゃあよく知られた話らしい。見たって人も居るくらいだから。」

「きおくを？」

「ああ、だが過去のきおくは誰にも話してはならないらしい。」

「どうして？」

「知らん。全くわからん。だけど……。」

眉を細めながら続けた。

「過去を見たって人にあるとき酒を大量に飲ませて洗いざらいしゃべらせようとしたやつもいんだけど。無駄だったみたい。」

「どうして？」

「見た人が過去の話をしようとした瞬間。とんだよ、そいつの首が。」

「……………」

「外に漏れちゃ困るやつもいるらしい。一体何のためなんだろうかね。」

「……ってことは。」

マヤはあごに手を当てて考える。

「行って、自分の目で確かめるほかはないってこと。」

さらっとセイジは言った。いとも簡単に。

「……………行く気なの？」

「ああ、今年で十六だ……。」

「十六でもできるものとできないものがあるけどねえ。」

マヤは笑っていた。冷たい笑いだ。自分も同じだと思いつつも。

マヤは一人で生きていけるかに関心があつた。正直、彼は自炊できない。

「はあ……。」

セイジは気づいたらしい。

「しょうがないね、私がついてってあげるわよ。」

少々セイジは動揺した。

「足手まといはいらん。」

その言葉を聞いたマヤは勝ち誇った顔で言った。

「自炊できないほうがよっぽど足手まといよ。」

「ふぐつ！」

セイジの顔色がみるみる悪くなっていく。相当痛いところを突いたらしい。

「こういつとぎのために私がいるんでしょうが。」

マヤはセイジの顔をじっと見ている。にやにやしなから。

「無理だ。」

首を振るセイジ。

「無理はあなた。」

すかさず言った。

「女を連れて行けっのか」

危険な旅になるかも知れない。そんなことをセイジは思っていた。

「守って頂戴、私は自分を守るから。」

マヤは何か楽しいことを思いついたような顔だ。

「本気かよ！」

もう話に行くところまで行ってしまった。

「私はあなたのパートナー、これまでもこれからも。」

その言葉を聞いてセイジはついに観念した。

「…わかったよ二人で、探しに行こう。」

「探しにいこー！」

そんなこんなで、無理やり私がくつついていくこととなった。自炊できないやつが悪い。

正直この先どうなるのか今は何もわからない。だけど、ひとつだけいえること。それは、旅は始まったということ。

そういえばどのくらいかかるのだろう。

西の方といわれても、西のどこなのだろうか。

長い旅になるかもしれない。

私たちは当然のように親の反対を押し切って旅立った。

第二話 追記

第二話 追記

2236年 日本 夏

少年は黙々とペンを走らせていた。
見るからに多くを語らない紙をため息交じりに見ながら、年代順
に内容を別の紙に清書していった。

???

2100～2110年 全世界大戦（米英勝利）

戦争と温暖化により地形が変形。

この間、各国は報復をする国々と、自然への回帰を試みる国々に
分裂した。（我が国は後者に属する。）

2130年 資源（木以外）のほとんどがそこをつく。

米英を含むすべての国々が自然への回帰を試みるよ
うになる

電気、化石燃料を使うものをすべてを廃止

2190年 ヨーロッパ連合（EU）のすべての加盟国が合併し、ヨーロッパ連合王国となる。

「……………」

カイはペンを走らせることをやめた。

「ふう……………」

畳に寝転がる。畳のにおいが鼻をつく。

「あち……………」

寝たまま背伸びをする。

「あゝあ、なんでこれだけしかないんだろう。」

昨日、中央（京都）まで行ってこれだけしか発見できなかった。

カイはこの国の歴史について知らないし、それほど多くはないと思っていた。

案の定、出てきた事柄は極わずか。

「だけど2100年……………って、それ以前は一体何があったんだ？」

それに気になるのは「電気」「化石燃料」という言葉。

わからない、正直何もわからない。なので、ひとまず寝よう。頭を使うと眠くなる。

そう心の中で言って、目を閉じた。

「……………」

「やつほ……………」

突然少女がカイの寝ているところに進入する。少女はカイの額を軽くはたく。

「いったあ……………」

「なあ……………にかたいことやってんの……………」

「……………」

カイは少女を見つつも、なお無言である。

「へい、へい、へい、へい、へい！」

掛け声にあわせ、再度額をはたく。

「いつてゝなあ！」

たまらず起き上がったしまった。

「なにやってんの？」

そばに寄る。

「……………」

カイは何も言わない。

しばしの沈黙のあとカイは口を開いた。

「サヤ」

「ん？」

サヤと呼ばれた少女を少しみつめたあと、紙に視線を戻した。

「俺たちの知らない時代の人々は、今よりももっといい暮らし……してたのかもしれない。」

先ほど書き写した紙をサヤにわたす。

「これ見てみる、知らない見たこともない単語がある。」

「何これ……………」

サヤは手渡された紙を言葉を失っている。

「これは中央から手に入れた情報だ。」

やはり驚いているのかな。カイはそう思った。

「読めないじゃない」

「ふへ？」

サヤの唐突な答えにカイは素直に反応することが出来なかった。

「何かいてあるか、解読できないんですけど。」

暗号文を渡されても私には解読できませんってことですか。そうですか。

「ふん！」

サヤの手から自分が書いた紙を取り上げ、元の紙を渡した。

「どうだ」

「あんまりかわらない……………」

「……………」

言葉にならなかった。カイは心がくじけそうになる。

「うーん」

見て分かるものじゃない。しかし、サヤは目の前で精神的に攻撃を加えられたカイを少しかわいそうに思った。

「なんとか読んでくれ。」

懇願する状態。情けないと思う。

「はあ」

ため息とともにサヤは紙を投げる。先ほどから何とか解読しようとはしているが、無理らしい。

「そんなに俺の字は読めないか！」

「ええ、読めないですとも」

「じゃあ、俺が耳から脳に伝達してやろう。」

そういうとカイはサヤの耳元で囁いた。囁く必要は無かったけど。

「電気ってしってるか？」

「知らない。どう書くの？」

すぐにカイのほうを見て言った。

「書いても読めないだろ。」

先ほどのやり取りは何だったんだ。

「あ、そうか。」

サヤは理解したみたいだった。

「まあいい。おれたちは、大人にこの国のこと何か教えてもらったか。」

「風土はおそわったじゃん。」

「ちがう！過去だ」

カイの声が少し大きくなってしまった。

「これには2100年よりも前がない。」

カイは自分が書いた紙に目を落として言った。

「えーっと、ということとは。」

サヤは上に視線を向けながら計算しだした。

「2099年分はどこいった？」

サヤの計算時間が勿体無いのでカイが言ってしまう。

「そ、そう。どこいったのかな。」

「おそい！」

「でもあるが、戦争が過去にあったらしい。2100年だ。」

カイは紙を見ながら言った。サヤに読めないのだから仕方が無い。

「それ以前の記録なし。」

なにやらサヤは考え込む

「はあ、やっぱりこの情報あつてはならないものかもしれない。」

カイは畳に再度ねころがる。

「うゝん。なぞだね。」

サヤは寝転がるカイを見た。

「ああ、謎だ。」

天井を見上げてカイは考えた。

どうすればいいか。

「ふう、ここはひとつ爺さんにでもきいてみるか。」

一息つくと勢い良く起き上がりサヤに言った。

「あ、物知り爺さんかあ。」

サヤも理解したらしい。

彼に聞いてみるのがこの問題の解決策になるだろう。

「あついね。」

外に出ると太陽光が僕たちを狙撃する。

サヤはちゃっかり団扇持参のようだ。

「あ、あつい。」

「はいはい」

そついうとサヤはカイに団扇を仰いでくれた。

僕たちの住む日本は四季がある。他の国、特に海を渡った向こうの国は四季がなく。一年中暑いとか、寒いとからしい。ずっと暑いのはこまる。

そして僕たちの住んでいるところは海と山に挟まれたところである。

両方とはうれしいものだが、津波が悩みだ。

町は丁度山と海の間にある。

昼間は大人はいない。大人はみんな山や海、川に今夜の食をさがしに行く。

老人と子供だけだ。十八歳になると大人になってしまう。

ちなみに十八までに結婚しても大人になることはない。

子供のままでいたいのは本音だ。

いや、自由になりたいのかもしれない……。

二人は爺さん宅へと着いた。

「おい、じっちゃん。」

カイは、家の戸を開ける。

「ああ？」

中から一人の老人が出てきた。

「なんだあ？なんか用か」

老人は頭を掻くが、髪の毛は少ない。

「これみてほしいんだ。」

清書し直した紙を渡す。

「ん？」

ちらつと見たとたん。

「おお！珍しいの、まだのこつとったのか。」

「え？じっちゃん、知ってるの？」

カイは読めたこととともに知っていることに喜んだ。

「ああ、最近はいろいろあつてめつきり情報がなくなつてもうて。」
「いろいろ?」

そばで聞いていたサヤが話に入る。

「おうよ、歴史的なもの。つまり過去の出来事に関するすべてのものを消そうとする輩がいるらしい。」

「いったいなんのために」

そして、カイは老人からの答えを待つ。

「カイよ、そこがわからんのだよ。だが…」

少し伸びたひげを手でさすりながら続けた。

「だがな、まだ残っているところはある。しかもすべての情報がな。」

「ほ、本当?どこ?どこ?」

老人に詰め寄るカイ。

「ヨーロッパ連合王国の旧都ロンドンじゃ。」

「ヨ、ヨーロッパ…」

言葉がそこで止まる。

「と、遠いね…」

たまらずサヤは本音を漏らす。

誰もその点に関して、それ以上は絡まなかった。

「そこにはすべてのきおくがねむっているらしい。」

老人は二人を見ずに言った。

「ヨーロッパか。」

カイは距離の遠さに目がくらみそうになる。

「数年前、同じようなことを聞きにきた奴がおった。」

チラツとカイをみる。

「そいつはな、親の反対を押し切つて西の方に行った。」

「西の方?」

「ああ、そのころはまだきおくがロンドンにあるとは知られていなかった。それに知らなかった。」

爺さんはため息ひとつして。そばにあったキセルに干からびた草

をいれ火をつけた。

「それが三年前にその場所に行ってきた人間と会えてな、話をしてくれた。」

爺さんはキセルを吸い、白い煙を吐く。

「といつても、口ではなく紙にかいてだな。」

「え？なぜ口じゃないの？」

カイが質問する。

カイもサヤも頭の上に？がついていた。

「首がとぶんじゃよ。」

「首が？なぜ？」

い、意味がわからない……。

「……………」

隣ではサヤが蒼い顔をしている。

想像してみるとあまり良い光景ではない。

老人は話を続ける。

「過去をを消そうとするやからが、その過去を話そうとする人間を片っ端から殺しているらしい。」

「話した途端に首が飛ぶ、か。」

カイはそうなることまでは理解できた。

サヤはきよろきよろと周りを見ている。

「どうした？」

その姿にカイは声をかける。

「そうなら、どこかから見てるって事よね……。」

カイと老人を交互に見て言った。

「見に行ったやつらだけじゃがな。」

老人はそこでキセルを吸い、ゆっくり吐いて言った。

「で、話は戻るが。親の反対を押し切り西のほうへ行ったのだ相方とともにな。」

「ふん」

カイはその点にはそれほど興味を持たなかった。

先に誰かが行ったということだけだ。

「そいつがだれかわかるか？」

カイは首を振る。

わかるかい！そんなもの。

「おまえの義兄と姉だ。」

「え？え〜。」

カイは老人の言葉に驚く。なぜだ。

「……………」

予想外のことにびっくりしたのはサヤもだった。何も言わない。

「いや、そんなはずはないよ。母さんには二人は事故で死んだって。」

「

「遺体は見たのか？」

老人の問いにカイは首を横に振る。

「見てない、見させてもらえなかった。」

あの時、母さんに見ちゃ駄目だって言われたことを思い出した。年齢的に見てはいけないものだったのだろうと思っていた。

「さつきも言っただろう。親の反対を押し切ったと。お前の母さんは、おまえの義兄と姉を許せなかったのだろう。」

「そうか…姉さんはロンドンに。」

カイはそう言つて、老人の言葉を待つ。

「たぶんそうじゃろう。」

爺さんは天を見上げる。

「だが、いまだ帰つてこないのはおかしいの。」

老人は腕を組んで考える。

キセルは口の端に咥えている。

「ロンドンとは知らないからまよつてゐるんじゃない……………」

「片道二年もかかるん。」

カイの言葉に老人は即答する。

「だけどこんなに遅いんじゃない。」

カイは言つたあと色々と考える。

それを見た老人は言った。

「いろいろなところにいつているのじゃろう。それにあいつらには馬をあたえてある。だから……」

「僕も行きたい。」

老人の言葉を遮ってカイは言った。

「え？え？……？」

サヤはとなりで素つとん狂のような声をあげていた。

「姉さんたちが心配だから。それに自分でもそのきおくが見たいんだ。」

「え？どうしちゃったのよ。」

サヤは混乱し続けている。

「……………」

静かに爺さんはカイを見ていた。

「サヤ、一緒にいつてくれないかな。」

カイはサヤの目を見ながら言った。

さすがにそつばを向いてこんなことは言えない。

「う、うゝん。」

サヤは悩む。

「私たちはまだ若いし、何より場所が遠いじゃない。」

それだけ言つとサヤは黙ってしまった。

「告げたか……。」

そういつて老人は少しの間遠くを見る。

突然老人の目はカイたちに移動した。

そして言った。

「本当に行くのか？危険も多々あるぞ。」

「僕は行きます。」

カイはもう決心したようだ。

「……、お嬢ちゃんは？」

老人はサヤのほうを見て言った。

「力、カイが守ってくれるなら……。」

目的地までは簡単には行けないだろう。

それをサヤも知っている。

「お守りましょう。」

カイは決心した。もう戻れない。

「じゃ、じゃあ私も行く。」

「……………」

さつきから爺さん。無言が多い。

大きくため息をついて爺さんは言った。

「わかった、うらの小屋からよさそうな馬を二頭えらぶがよい。」

「はい」

カイとサヤは同時に老人に返事をした。

「この先、危険がいっぱいある。十分注意して向かいなさい。」

厳しい顔で喋っていた爺さんは、突然にやにやしだした。

「まずはじめは自分の親からだな。」

それから数日後の夜になる。

カイはサヤ宅へと来ていた。

第一の関門だ…………

「おねがいします。サヤさんをください。」

「いっしょになればいい……………訳ではない!」

サヤの父親は今にも暴れだしそうだ。

「ふん」

しかし、すぐに奥にひっこんでしまった。

「ちよつと、おとうさん!」

サヤの声にも耳を貸さない

「……………」

カイは何も言わずじっとしていた。

今度は母親が無言で出てきた。なんとなくわかった。あれは前座か。

「ねえ、ひとつ聞くけど。」

サヤの母親はカイを睨みながら言った。

「あなたに、サヤは守れるの？」

「守ります、全力で。」

「……………」

サヤの母親は無言になってしまった。

「サヤはこれで本当にいいの？」

サヤにたずねる。その目は現実を否定したいかのようなだった。

「うん、決めたことだから。」

はあくため息ひとつしてサヤの母親は言った。

「結婚もなにもしていないのに、二人がいつしよに外にでるのは、こちらとしても色々あるけど。いっしょになるって言うなら、自分たちで好きにしないさい。」

「やったあ！」

サヤは喜んでいた。

翌朝になり、二人は町の外れでサヤの両親と向かい合う。

「それじゃあお母さん、行ってくるね。」

「気をつけてね。サヤ。」

サヤの母親はサヤにそう言うと、カイのそばに来て、カイの耳元でこう言った。

「サヤにもしものことがあったら、ただで済むとは思わないことね。」

彼女の笑みはやけに怖かった。

第三話 おわりは、はじまり

第三話 おわりは、はじまり

2236年 ロンドン

二人の男女は船で、ヨーロッパ連合王国の旧都ロンドンへ向かっていた。

正直な話今にも沈んでしまうのではないかと思うほどの船に、二人とこぎ手が乗っていた。

こぎ手は二人を見て、

そして、遠く向こうの島を見て言った。

「まったく、変わった方々ですね。あんな島に行きたいなんて。」

同じく男も島を見て、

「ま、まあな。」

はるか遠くに見える島を見つめ、ため息混じりに言った。

「あの島にや、誰もいませんよ。」

「……………」

二人ともそれ以上は言わなかった。

数時間後船は島に着いた。

「さあ、着いたよ。」

漕ぎ手は船を降りられる位置まで移動させていった。

「降りるよ。セイジ。」

マヤはセイジを見て言う。

「んあ？マヤ？」

セイジは横になったまま言った。

セイジは少々船の上で寝ていたのだ。

セイジは眠い目を擦りながら体を起こすが、すぐにまた横になった。

「ほら起きなさいって」

セイジの体を揺らす。

「やだあゝ。」

駄々をこねるセイジ。

「が、餓鬼じゃないんだから……」

マヤの顔は引きつっていた。

「んゝ。」

なおも眠ろうとするセイジに。

「起きなさいって……」

マヤの中で何かがぎれた

「あゝ?」

セイジの反応にまたぎれた。

「言ってるでしょうゝ!!!!」

マヤはセイジに叫んでいた。

「ぶっ!!」

セイジの頬に何かが当たった。

マヤが我にかえった時セイジの頬には十数発の平手が打ち込まれていた。

マヤの平手はセイジの頬を何度も歪ませた。

セイジを起こして、二人は船から降りた。

が、セイジはまだ完全には起きていないようだ。船から降りたもののその場に座り込む。

こぎ手は不思議そうに言った。

「こんなところに何の用なんですか？地元の人間でさえこんなところ来ませんよ。」

「この島に、ちよつと用事があるの。」

マヤは思った。いちいち五月蠅いな、と。

「いいでしょ、もう。早くいつちやいなさいよ。」

マヤはそう言つと、船を足で押して島から遠ざけた。

「もう、知りませんからねえ！」

こぎ手が船の上から叫ぶ。

「知らなくていいわ！」

マヤはこぎ手へ叫ぶ

そして、島を見るマヤ

「なんなのよ、もう。」

一人怒るマヤ

振り返ると、セイジは島を見ていた。

何が見えているのだろうか。

「ここだったのか。」

「結構時間かかったね……。」

マヤはセイジのほうを見る。

「それは馬がいなくなったからだよ！」

セイジはマヤから視線を戻して言った。

「怒つても仕方ないじゃん。」

さすがに環境の変化に耐えられなかったのだろう。

大陸に渡つて数ヶ月で消えた。

「いろんなところ行つたし。」

「結局ここつてことか……。」

セイジは言つたあとため息をついた。西つて言つてもやっぱりかなりの西だったらしい。

「あ…………。」

マヤの口から声が漏れる。

じつと一点を見つめるマヤ。

「早くさがそう……？」

マヤが見る方向を見たセイジも気が付いた。

「女の子？」

セイジがマヤに聞く。

「みたい……。」

少女は約五十メートル先の瓦礫の傍から私たちをじつと見ていた。彼女はこちらが気が付いたことを確認して走っていった。

「追いかけてみよ。」

マヤはセイジの返答も待たず走り出した。

「え、えゝ？」

セイジは戸惑う。

「荷物あるってゝの！」

背後でセイジの声がした。

「眠気でも覚ましときなさい。」

マヤは一度こちらを振り返り言った。

「はあ？」

待っているってことなのか。

少女は待っていた。マヤが少女に近づこうとすると少女もまた走る。

「はあ……はあ……。」

何なの？おびき寄せてるのかも。

どのくらい走ったか、小さな扉の前で少女は立ち止まる。一度追いかけてくるマヤを確認し、扉の向こうに消えていった。

「まさかここが。」

驚くのもつかの間

「……。」

誰かに見られてる…ような。

あたりを見回してみる。誰もいない。

「…気のせいね。早くセイジに知らせなきゃ。」

「はあ、はあ。」扉を閉めた少女は勢いよく階段を駆け下りた。

「おとうさん。」

「ああ？」

少女の父親はいすに座りのんきにコーヒーを飲んでいた。

「また来たよ！人が。」

息を切らせながら続けた。

「はあ、はあ今度は…二人組…。」

「おお！でかしたぞミナ。」

父親はミナと呼ばれた少女を褒めた。

ミナは呼吸を整えて言った。

「はあ…、うわさは予想以上に広まってるみたい。」

「ほう。そうか…ところで…」

ミナの父親はミナに言おうとした。

重要な部分をまだ聞いていない。

「ああ、たぶん東洋人、この国の人とはちがうし。」

「東洋…。」

ミナの父親の目が変わった。

「これで、また一歩前進だね。」

ミナはうれしくなった。

「ああ。そうだな。」

ミナの父親もミナを見て言った。

「ここか。」

荷物を一度降ろして、セイジ言った。

地面から突き出た建物。

それは、何も無いはずのこの場所に存在するもの。

建物にはひとつの小さな扉が付いていた。

「うん、この向こうに消えていったから。」

扉とセイジを交互に見ながらマヤ言った。

「可能性大だな。行ってみよう。」

二人は扉の向こうに消えていった。

それから数時間が経った。

「来てくれて有難う。」

ミナの父親は深くお辞儀をした。

「いえ、お役に立てなくて。」

「じゃあ。」

「またきてねお姉ちゃん。」

遠ざかるマヤたちにミナは手を振った。

「じゃあね。」

マヤは応える。

二人は帰路へとついた。

セイジはマヤの隣を歩きながら言った。

「うん。無理だよなあ。」

セイジは悩んでいるようだ。

「まさか信じてるの？」

マヤはセイジのほうを見て言う。

「ま、まあな。」

セイジは信じているらしい。

「もし、本当でも私達には無理よ。」

マヤは地面へ視線を落とす。

「だよなあ。」

ため息をつくセイジ。

「けど…。」

マヤは歩みを止め、セイジを見て言った。

「けど？」

セイジは次の言葉を待った。

彼女は微笑んだ。

「それは、二人…ならね」

セイジは苦笑した。

「さあ、帰るか。」

「帰れないわよ。」

先ほどとは打って変わって、冷めた口調でマヤは言った。

「なぬ！」

セイジは驚く。単純に。

「帰りの船無いよ。」

「それってお前が悪いんじゃない。」

マヤの言葉にセイジは正論をぶつけてきた。

うつ…。

「だって、あの人がいちいち質問して来るから。その…。」

マヤは言葉に詰まる。

「子供じゃないんだよ。」

セイジはマヤの話を最後まで聞かずに歩き出した。

「悪かったわね、子供で！」

マヤはセイジの背中に言葉をぶつけた。

セイジは立ち止まって、

「お前がとは…」

セイジは振り返り、冷めた目でマヤを睨んだ。

「言ってるわい。」

「言ってるわよ！」

二人はにらみ合ってしまった。

「おい、そのたぶん東洋人。」
後ろから声がきこえた。

「ああ？」

セイジは振り向く。

そこには一人の男が立っていた。

第四話 自由のとき

第四話 自由のとき

2236年 ロンドン

私たちは施設を出たあと。一人の男に声をかけられた。

「あの施設に行っただろ？」

「だったら何。あんた誰？名前は？」

マヤがすかさず言い返す。

「…。レイスだ。名乗ったのだからお前たちも名乗れ。しかし、声は落とせ。」

理由はよく分からなかったがひとまず声を落として

「セイジだ。」

「私はマヤよ。」

それぞれが名前を言っていく。

この島の施設にミナを追いかけていったときに感じた視線ってこれだったのかもしれない。

「施設の記憶を見たんだな？」

彼はセイジとマヤに近づいて、小声で言った。

言い終わったあとときよろきよろき辺りを見ている。

そこで、今の状態を二人はを把握したが

「私たちって、もう尾行されてるのね。あんたに」

マヤは言っちゃった。

「ち、ちがうよ。俺じゃなくて。いや、俺もそうだけど。いや、…あぁ」

レイスは反論できなくなった。

ひとまずレイスも私たちを見ていた。それは確認できた。無言でレイスは歩き出した。周りに注意を向けながら。

セイジとマヤはひとまず付いていく。

「じゃあ、なんであんたは私たちを見てたのよ。」

歩くレイスへ言葉を投げかける。しかし、小さな声で。前を向いたまま。

「あんたらがあそこへ向かうのを見た。知らないのか？記憶を見たものには漏れなく尾行が付く事を」

「そうか。知っている。しかし、もう付いているのか。」

セイジは後ろを少し見てみる。何か居ることは感じたが何処にいるかまではわからなかった。

「そうだ。それと、お前たちはこのまま帰るのか？もしよかったら、俺たちとともに戦わないか。あの国と」

彼の「俺たち」に二人は反応した。

「俺たちってことはあんたの他にも居るのか。」

セイジは思わずルイスの方を向いて大声で言ってしまった。

ルイスはセイジのほうを驚いて見たが、すぐに前を向いて言った。

「ああ。みんなきおくを見た奴らだ。」

「二人は無理でもほかに居るのなら……。ねえ、セイジ。」

マヤはセイジを見る。

「そうだな。ひとまずあんたらの所に連れてってくれ。話が聞きたい。」

セイジがそういつているうちに海岸に着く。

しかし、私たちが来た時の船は当然無い。どうする。

ルイスは立ち止まらず海岸沿いに歩きながら言った。

「向こうに船がある。それで向こうの陸まで連れてってやる。」

小さな船に乗り島を離れて漕ぎ出す。

行きは漕がなくても済んだが、今回は漕ぐことでセイジは寝ることもできないだろう。

船には弓と矢が載せてあった。何に使うのだろうか。しかし、その

答えはすぐにわかった。

「来たな。尾行している奴だ。」

さつきから島のほうを見ていたルイスが言った。二人も漕ぎながら後ろを見る」

一定時間毎に何かが海面に上がってくる。人か？

「悪いが二人で漕いでくれ。俺が奴を仕留める。」

ルイスの言葉に二人は相手が尾行していた人間だとわかった。しかし、仕留められるのか？

「ゆっくり漕いでくれ。進んでいるか居ないかでもいい。形だ。」

ルイスはそういいながら船の後部に座り。船に乗せていた弓と矢をとり相手が近づいてくるのを待った。

相手はこちらがゆっくり漕ぎ出した所を確認してゆっくり泳ぎだした。

そして、再び潜ったところを目で確認すると、ルイスは素早く立つて弓を引いた。ルイスが船の上で立ったもののそれほどゆれることは無かった。慣れているのだろうか。

ルイスは相手が息継ぎのために頭を出すその瞬間を待っているようだ。

相手も気が付いたのかどうなのかなかなか上がってこない。

しかし、この海は透明とは言わないまでも海面近くは何か居ることだけは認識できる。

ルイスは相手を確認し、狙いを定める。

相手は海中を急いで泳いで船から離れるも息がもたなくなり海中に頭を出した。

その瞬間彼の頭に矢が命中する。

「あ、あんた何者？」

マヤはその瞬間を見て思わず声が出た。

「す、凄い。」

セイジも同じようだ。

「漕ぐのを止めてくれ」

ルイスは口ではそういつているが次の矢を構えていた。念のためにもう一本当てておくらしい。もう良くないか？
そしてもう一度放つ。

見事に命中する。二人はルイスの弓の腕に恐ろしさを感じた。

「悪いが近づきたい。手伝ってくれ。」

そういうとルイスは弓を置いて、船を漕ぎ出した。

仕留めた獲物を船にあげる。魚ならまだ良かったと思えた。

ルイスは刺さった矢を無理やり抜く。抜いた後から血が勢いよく噴出す。いいところに当たったらしい。それから、持ち物を調べた。しかし、特にこれといって持っていないかった。

「やはり何も無いか。」

ルイスはそういうと仕留めた獲物を海に落とそうとした。

「ちょ、ええ。」

セイジが反応する。

ルイスは捨てた後二人を見て言った。

「多分、俺が居なかったら代わりにお前たちが殺されて海に落とされてたかもな。」

ルイスは笑っている。なんて男だ。

「そうでなくともきおくをしゃべればその場で殺される。仲間が待つ場所へは奴は連れて行けないさ」

マヤは口を開こうとしたが、もう無意味なのでやめた。

「ひとまず、お前たちは自由になったそれでいいだろ？」

ルイスは二人に問いかける。

「そうだね。」

セイジは言った。マヤも頷く。

実際そうなのだから仕方が無い。

「さあ、漕ごう。まだまだ陸は遠いぞ。」

ルイスはそう言い。セイジとマヤも漕ぎ出した。

尾行開始初日に尾行終了日が来た。その点に関しては二人ともうれしい。

しかし、殺しておいて相手側に発覚しないのだろうか、何かしてこないのかなどと考えながらマヤは漕ぎ続けた。
空を見ると太陽が西へ傾き出していた。

第五話 始動

第五話 始動

2236年 大西洋上

大西洋上、彼らはヨーロッパ連合王国へ船を進めていた。

「カール大尉、こちらにいらしたのですか。探しました。」

カールと呼ばれた男は甲板で遠く見える島を見ていた。

「そろそろ、火薬ももつたいなくなってきたよなあ。なあテリー？」

カールと呼ばれる男はテリーと呼ばれる男に話を振った。

「そうですね、それにこれ以上施設の人間の行いに見てみぬふりはできません。」

彼は返答にがっかりした。

「そっちはいいの。火薬があればいいの。」

その返答にテリーもがっかりした。

本当にこの人は大丈夫なんだろうかと。

そして、テリーは言った。

「それはいけません。アレを見たものたちがこちらに何をしてくるか。」

カールはしばしの沈黙の後、彼の目を見て言った。

「大丈夫だって、彼らはひそかに尾行されている。」

「話した途端に……ですか。」

テリーの顔はにやにやしていた。

「わかった？」

カールは笑っていた。

少し笑ったあとカールは続けた。

「それにこれからは施設全部が僕たちの支配を直接つける、から

ねえ。」

カールはテリーの肩に手をおき、

「心配しないの。」

と能天気と言った。

「は、はい。」

テリーの声のトーンは低かった。

それで本当に大丈夫なのだろうか。

テリーはふと思った。

テリーははつとして、カールを見て言った。

「大尉、施設の運営に関してお話があります。」

カールはテリーを見た

「ん？何か問題でも？」

島の西側からカールたちは小型の船を使い上陸した。

この島には何も無い。ある一点を残しては。

「は、いい、みんな集合！」

すぐにカールは部下たちを集めた。

「いまからあ、あちらにご挨拶してくるからあ。ちょっとまってね。」

この雰囲気に一応みなは慣れてはいる。その点が救いだ。

テリーはそんなことを思いながらカールの話す言葉を彼の後方から聞いていた。

施設内から外へと続く階段の近くにミナは居た。また誰かが来るのではないかと考えていた。

その時、扉の開く音をミナは聴いた。

「あつ、誰か来た。来たよおとうさん！」

誰かが来たことを確認したミナは、慌てて父親を呼びにいく

とする。

「その必要はありませんよお。お嬢さん。」

カールはそう言つてゆつくりと階段を下りてくる。

ミナの足は止まっていた。

「え？」

ミナは階段のほうを見る。

カールは階段の途中からミナを見た。

「あなた……だれ？」

ミナは何がなんだかわからなかった。

カールはそのまま無表情で階段をおりてきた。

「どうした？だれか来たのか？」

ミナの父親はのんきに二人の間に入ってきた。

ちようどミナの父親の来る位置からは相手がどんな人かは見えない。

「お父さん……あのひと。」

ミナは近づいてくる父親を見て視線を来た人へ向ける。声から緊張していることがわかった。

「ん？」

ミナの父親はミナのしているほうを見て目を見開いた。

「お、おまえは。」

ミナの父親はそれ以上は何も言えなかった。

この場に居るはずの無い、居て欲しくない人間が目の前に居るのだから。

階段を降り終えたカールは二人に一礼する。

「どうも、お久しぶりです。」

ミナの父親は固まってしまった。

「え？お父さん。お知り合い？」

ミナは状況をまだ理解していない。

ミナの父親は質問に答える代わりにカールに言った。

「なぜ、お前が……。何しに来た。」

扉の開く音がした。

誰かが階段をゆつくりと下りてくる。

「んゝ。率直に言っと…。」

カールは階段のほうを見た。

そして階段を下りてきた誰かが二人に言った。

「もうあなた方は要りません。」

そこに現れたのはテリーだった。

カールはミナたちのほうを向き直り、言い放った。

「そう、用済み。もういらない。」

凄くうれしそうにそう言った。

「な、なんだと！おまえたちここを…。」

ミナの父親の言葉は数人の兵士たちの登場と包囲により中断された。

彼らは各々剣を向けている。

カールは微笑した。

テリーは言った。

「今からこの施設は私たちのモノ。そしてあなた方はここから去っていただきます。」

カールは二人を見て言った。

「ちよつと待て！我々はどこで…」

ミナの父親は言うものの。

「だから、用済みだって言ったでしょ…黙ってな！」

途中でカールの言葉に遮られる。

カールはミナの父親を睨み付けた。

そしてカールは続けた。

「んゝ？この二人はどうしようかねえ？」

カールは首を少し傾けながらミナの父親を見る。

ミナの父親はカールを凝視している。

「大尉、その点で」

テリーはカールにそつと耳打ちした。

「ん？」

聞き終わった後、少しの間カールは視線はそのまま考えた。そして、口を開いた。

「そうかぁ。それはいい。お前たちは生かしておく。」

カールは微笑しながらミナたちを見続けた。

カールは兵士たちに言った。

「この二人を本土に連れてっちゃて。」

数人の兵士が二人を連れて階段を上っていく。

彼らはこのまま本土へと連れて行かれる。

「最後の役目を果たしてもらおうか。」

扉が開かれそして閉じられた。

カールは彼らが出て行ったことを確認すると。

「尾行させる。奴らも同じだ。」

後ろに付くテリーに言った。

「は、分かりました。」

テリーは素早く階段を上っていく。ある場所に向かうために。

カールとテリーは海を挟む本土を眺めていた。

「プレゼントかぁ……、考えたなぁテリー。」

後ろにいるテリーに言った。視線はそのまま。

「ここに置いていても使えない二人ですからね。」

テリーは思ったことを言った。

多分カールも同じことを考えているだろうと思いつながら。

「もう少し歳いつてればな。ありんだけどな。」

カールの目は視界以外のものを映していた。

「女ですか……。」

テリーはカールの考えていることが理解できた。

「ああ。」

カールはテリーの質問に即答した。

「……………」

テリーはなにも言えなかった。

「せいぜい、楽しませてくれよう！」

カールは本土へ向かって叫んだ。

そして、カールは施設へと戻る道を歩き出す。

カールは立ち止まり、目を瞑ってひとしきり笑ったあとゆっくり目を開けた。

さあ、始まりだ。

第六話 集団

第六話 集団

2236年

陸へと着いたセイジとマヤはルイスの後ろを歩いていった。
海の向こうには施設がある島が見える。

この一帯は静かな場所のようだ。

いや、それは夜だからなのだろう。明かりひとつ無い。しかし、
これまでの旅で二人はこういう状況を何度も見てきた。

「どこにあんたらの仲間はあるんだい？」

セイジは前を歩くルイスに言った。

ルイスは振り向き、

「もうみんな寝ている。ひとまずみんなが居るところへ行こう。
今日はそこで寝るといい。」

と二人を見て言った。その直後転んだ。

拳ほどの石に足をとられてルイスは転ぶ。

「だ、大丈夫ですか。」

昼間のあの強さと格好よさはどこへ行ったのか。マヤはそう思
いながら言った。

「いてて。格好悪いなあ。はは」

転んだときに汚れた部分を手で叩いて綺麗にしながらルイスは
言った。

「さっさと行こう。眠くなってきたよ。」

セイジはその光景には何も言わずに言った。

「もう少しだよ。」

ルイスはそう言いながら再び歩き出した。

しばし歩いたところにその建物はあった。

建物の色は暗くて正確にはわからなかった。

マヤはそう思いつつも、その点に気にすることもないとそのあと
と思った。

ルイスが扉を開く。

中は真っ暗だった。

ルイスは手探りで何かを探していた。

「何を捜しているんですか。」

マヤは聞いてみる。

「梯子を……あった。これをそこに立てかけて」

ルイスに言われたとおりにセイジは梯子を立てかける。

「上ったところに二人は寝てよ。そこは誰も使ってないから。」

ルイスは言った。

二人は梯子を上って言われたところに座る。

しかし、上に手を伸ばすとすぐに天井がある。ここは二階ではなく一階の中の二階らしかった。

「あ、それとこの梯子はそっちに上げておいてね。」

ルイスはそう言って梯子を上げてくる。

セイジとマヤはそれを受け取り。空いた場所に梯子を置いた。

「念のためね。それじゃあお休み。落ちないようにね。」

そう言つとルイスは扉を閉める。

「おやすみ。」

「おやすみなさい。」

二人はルイスに返事をするとその場に横になる。

マヤは目を閉じると、疲れていたのかすぐに眠りについてしまった。

マヤは下の騒がしさに目が覚めた。

「んん。」

目を軽く擦って頭を起こそうとする。

「お、起きたみたいだぜ。」

下に居た男が言った。

ルイスの知り合いだろうか。

ひとまずマヤはセイジの体を揺すり起こす。

「ん。ああ、おはよう。」

セイジは意外とすんなり起きてきた。

昨日船の中で休んでいたためだろうか。

いや、それとも私が疲れていただけか。

そうマヤは考えていた。

「二人とも起きたみたいだな。ルイスから話は聞いている。そこで話をするのもなんだから降りて来いよ。」

ルイスを知る男に言われ、二人は梯子を降ろして降りる。

彼は筋肉の付いた、いかにも己の力で生きてきたという感じの男だ。

そこには、もう一人細身の男がいた。

が、そちらの男は黙ったままだ。何も言わない。

「そこに座りな。それにしても、男女の二人組みってのは珍しいな。」

その男はそういうと思い出したように、

「ああ、そうだ。名前を言っただけだ。俺はレイだ。隣で黙ってるのはケイトだ。」

とレイはセイジとマヤに言う。

「よ、よろしく。」

ケイトと呼ばれた男は聞こえるか聞こえないかの声で挨拶した。レイの声との音量差はかなりある。いや、レイの声が大きいのか。

「こいつは無口だが、武器を持つと人が変わる。」
レイはケイトを見ながら言った。

「ルイスなら、船に弓を忘れたらしく。取りに行ったよ。周りを見回ってから戻ってくるとか言ってたな。」

「あの、あなた方もきおくを見た人たちなんですね。」

マヤは控えめにレイに言う。

「そうだ。こいつも同じだ。ここには他にも居るんだが上で寝てるやつとか、食料を調達しに行ったやつとか。」

レイはそこまで言っで、思い出したというふうに続けた。

「そうだ。あんたらもここに居るんなら食料を調達する係が回ってくるぞ。注意しとけ。」

そうレイは言った。

「はい。」

セイジは答える。

そして、四人が一息入れた時、扉が勢い良く開いた。

開けたのはルイスらしかった。

セイジは何かを言おうとしたようだったが、ルイスの言葉に口が動かなくなった。

「施設の親子が海岸にいる。尾行も付いているようだ。」

「なんだって。」

なんとかセイジはそれだけを言った。

あのあと何かが起きたことはわかった。

「俺が見つからないように尾行している奴を仕留める。」

ルイスはレイを見て続けた。

「レイ。お前はあの親子を連れてこの辺りを歩いていてくれ。」

「わかった。」

レイは立ち上がり。扉の外へ出て行く。

「悪いがケイト、あとセイジさんとマヤさんはここに居てくれ。」

ルイスはそう言うのと近くに置いてあった矢を矢筒に入れて出て行った。

「大丈夫かな。」

ふとマヤはつぶやく。

それに気が付いたケイトはマヤを見て、

「大丈夫ですよ。すぐ戻ってきます。」

ケイトはさつきとは違ってすらすらと言った。

ケイトの言う通りだった。

それから間もなく二人は施設の親子、つまりミナとミナの父親を連れて戻ってきた。

「もどったよ。いやあ、尾行している奴が二人も居るなんて予想外だったよ。なあ、レイ？」

ルイスは扉を閉めながら言った。

レイは先に建物に入って親子を椅子に座らせている。

「ああ、何時か俺たちと合流すると考えていたのかもな。」

そう言っただけレイは親子を見る。

「ウィリアムさん。施設で何があったんですか。」

ルイスはミナの父親に言った。

そういえばミナの父親というだけで名前を知らない。

ウィリアムという名前だったのか。

「施設が奴らの手に落ちたんだ。」

ミナの父親ウィリアムは言った。

「じゃあ今あそこに居るのは。」

レイがウィリアムに言う。

「ああ、あいつらだ。」

ウィリアムは答えた。

マヤも分かった。施設で親子が教えてくれたことを思い出す。

それは米アメリカと呼ばれる国だ。

「なぜ今突然二人を追いついたんだ。」

レイはそういいながら考え込んだ。

誰かが階段を下りてくる音がした。ミナとウィリアムが反応す

る。

「気にするな。仲間だ。」

ルイスは親子に言った。

「済まない。気にしないで続けてくれ。」

階段を下りてきた男はそう言った。

「レイ。私は多分奴らが再び力を付けようと考えているのだと思う。」

ウィリアムは考え込んでいるレイに言った。

「まさか、二人をこちらによこしたのは施設の情報を与えるためなのかもしれない。」

レイはルイスを見て言った。

「そうかもな。」

ルイスは答える。

そしてルイスはレイたちの話を聞いていた仲間たちに言った。

「ウィリアムさんが来たんだ。俺たちの記憶と合わせてやつらから再び施設を取り戻すことを考えよう」

「そうだな。」

ウィリアムは言う。

「よし、人間も材料も集められるだけ集めよう。今のままでは少なすぎる。」

レイが立ち上がりみんなに言う。

ルイス、レイ、セイジ、マヤ、ミナとその父親ウィリアム以外はみなそれぞれどこかに行ってしまった。

残った人間は施設を取り返す方法を考えていた。

「施設へ出入りする船を襲撃するっていうこともしたほうがいいかもな」

レイはその場に居る五人に言う。

「やっぱりそういうことからか。」

セイジがつぶやく。

「今のところ面と向かつては無理よね。」

マヤは言いつつ思った。

今日会った人間の数では難しい、と。

「そうだな。施設周辺の偵察。そこに出入りする船への襲撃が可能ならしたい。まあ、今のところは戦に備えて道具を作って訓練しなければいけないだろうが」

ルイスはマヤやみなを見ながら言う。

「今は船の襲撃か。うまくいけば情報も資源も手に入るな。」

レイがルイスを見て言う。

「それほどうまく行くかどうかは分からない。しかし、今はそれほど力も技術もないんだ。」

ルイスはレイに答えつつみんなを見て言う。

「わかった。やろう」

レイは答えてセイジたちミナやウィリアムを見た。

それぞれがうなづく。

「施設の記憶は取り出せても、その場所からきおくが無くなるわけではない」

ウィリアムが口を開いて言った。

そして続ける。

「急ぐ必要が無いわけじゃないが今は仕方が無いと思う。」

「そうだな。」

ルイスが答える。

マヤは何か大変なことが起こる気がしてきた。

だからこれからは、こう思っ て行動することにした。

絶対に取り返さなければいけないんだと。

第七話 海を越えて

第七話 海を越えて

2236年 日本 夏の終わり

眼前に広がる海

大陸から最も近い船着場にカイたちはたどり着いた。

「わあゝ、着いたあ。意外と早くついたね」

サヤが両腕を天に伸ばし背伸びをする。

「大陸に渡ってからが長いぞ。広大だからな。」

つくまでにどのくらいかかるのか。」

サヤはこちらを向いてそしていった

「それでも行くんですよ。知るために、すべてを…」

そしてサヤは目の前の大きな海に視線を向ける。

「おお、おふたりさん。どうしたんだい？」

それを見ていた漁師らしき人が話しかけてきた。

「あの。向こうの大陸に渡りたいんです。」

「

カイは漁師らしき人と海の向こうを見ながら言った。

「大陸のほうか。向こうにも揚げているから乗せて行ってやってもいいぞ

漁師らしき人は僕たちにそう言った。

「本当ですか。ありがとうございます」

カイは礼を言う。

カイもサヤも大陸への手段が出来たことで喜んだ。

「で、何時行つて貰えるんですか？」

まさかすぐだったりして

「今すぐ向こうに行くんだ。今乗らなければ明日だぞ。」

今すぐらしい。話が早い。

しかし、明日までここで待つのも勿体無い。

「今すぐ行きます。乗せて行ってください」

カイは思った。こうなったら、すぐいったほうがいい。

カイたちは船に乗り大陸へと向かっていた。

船に乗る前に話していた漁師らしき人は、実際に漁師で自分の船を持つ船長だったようだ。

「これが日本海さ。」

船長は両腕を一杯に広げてカイたちに言った。

「まあ、船酔いはするけど」

カイの言葉にサヤはカイの顔色を見て言った。

「大丈夫？実際に渡るっていうのも大変みたいね」

サヤは心配そうにしている。

「それもそうだが、この海には魔物が住んでいるらしい。よく船が難破するから」

船長はカイとサヤにそう言った。

サヤはきよろきよると船を見回して言った。

「それは、この船が・・・」

とつさにカイはサヤの口を塞ぐ。

「んっ！」

口を押さえられたサヤの口からは言葉にならない音が漏れる。

「ああ？」

船長は不思議そうにカイたちを見た。

「な、なんでも無いです」

サヤの口を押さえながらカイは言った。

分かりきったことだと思う。船がボロボロだ。

この船で本当に渡れるのだろうか。

これなら簡単に難破してしまうかもしれない。

「……」

船長は無言で行ってしまった。

カイがサヤの口が手を離す。

「ぷはぁ。何すんのよ」

サヤは困ったといった顔だ。

実際に困っているのはこっちなのに。

「おいおい、本当のことを言ったら俺たち海に落とされるぞ」

「他にいい船無かったの？」

「無かったよ。他の船に行つて聞いてみたけど、向こうの大陸に行く船はこの船だけらしい」

カイは本当に困ったといった顔をして言ってみる。

「陸に着いたら、その後は陸路を進んでいくんだね。」

サヤはカイに当たり前ともいえる言葉を言う。

「海路のみであそこまで行く方法なんてないよ。必ず陸路は必要になる」

カイは馬を見る。船長に無理を言つて乗せてもらったのだ。馬無しだとこれからが大変になる。

「遠いからね。仕方がないけど」

サヤは背伸びをしながら言った。

そして続けた。

「だけど……」

「だけど？」

カイも言葉の部分を繰り返し、その後の言葉を待つ。

「それって、この船がボロいことと全く関係ないよね。」

また船がボロであることに話を戻そうとするのか。

サヤの言葉を聞きながらカイはそう思った。

そして、サヤに言った。

「仕方ないだろ。ただで乗せてもらえたんだから。」

「まあね、だけどボロすぎよ!」

サヤは不満たつぷりに言った。

実際ボロいが仕方が無いんだ。俺たちにはどうすることも出来ない部分だ。

「あまり大きい声だと、陸まで泳いで行くことになるぞ」

カイはサヤへ言葉の攻撃を試みる。

「そ、それは勘弁してよ」

カイの言葉はサヤに命中したらしい。

「おとなしくしていよう」

カイはそう言っただけで西に沈む夕日を見つめた。

夜

カイとサヤは毛布に包まり木箱の上に寝ていた。ここは大陸へ運ぶものを入れていく部屋。船長は二人一緒に寝るならここしかない二人に言っていた。

「ううん。」

カイは寝返りを打つ。

ね、眠れない。しかも、寝ている間も船は揺れている。酔って気持ち悪い。

カイは体を起こす。

一息ついてサヤを見た。すやすやと寝ている。

サヤのその神経。俺も欲しい。

カイはそう思って再び横になる。

深夜

カイは波の音に目が覚めた。

「ふえ……はあ？」

そして気が付いた。部屋の中が水浸しだ。

それに木の板を割る音が、外から入ってくる風の音とともにかすかに聞こえる。

「おい、起きろ、起きろよ。」

カイはサヤを起こしにかかる。何かがおかしい。

「ふぁ？おはよう」

サヤは寝ぼけているらしい。

「おはようじゃねえ。なんかおかしいんだよ。」

カイはそういいながらサヤの体を揺する。

サヤはカイの言葉を理解した途端。カイを見て言った。

「え、ええ。」

そのままサヤは、

「ひとまず出てみようよ。」

そう言つて木箱から降りる。

「きゃ！海水？」

降りた途端足が液体の中に入った。液体といってもこの場合海水以外に考えられないけど。

カイも木箱から降りる。海水の冷たい感触が足から脳に伝達される。

足首まで浸かっていた。おかしくないか。

「ひとまず外に出よう。」

カイはサヤの手を取つて外への扉へ向かう。

多くは無い荷物を背負つて。

そこで扉は誰かの手によつて開かれた。

それは船長だった。

「お前たち大丈夫か。」

船長の声が部屋の中に聞こえてきた。

「はい。なんとか。」

答えながら二人は船長とともに外にでる。

海を見ても別に荒れているわけではなく、風が少し吹いている程度だった。

「何が起きたんだ。」

カイは現状がよく分かっていない。サヤも同様に。

「船の底に穴が開いたんだ。早く予備の船へ」

船長の声は焦っていた。沈没まで時間がないということか。

「待って、馬が。」

サヤは馬が居るほうに目を向けた。

馬は今は海水に浸った船尾に繋がれていた。

カイはサヤのほうを見て言う。

「今はそんなのかまって…」

その瞬間馬は巨大な魚の群れに押しつぶされた。

「なっ、なんだありゃあ！」

カイは叫んでいた。馬に食らい付く巨大な魚は今まで見たことの無い大きさだった。

自分の身長半分ぐらいはあるんじゃないだろうか。

馬の叫び声と何かが碎かれる音がする。惨劇だ。

「早くするんだ！」

カイは船長の声で現実に取り戻される。

呆然とするサヤの手を取って予備の船に乗り込む。船長は最後に乗り込んで言った。

「奴らが船に穴を開けたんだ。」

奴らのせいなのか。

既に乗組員の何人かは乗っていた。

しかし、昼間会った人数よりも少ない。

まさか。

カイは恐怖を感じた。

予備の船は本体から離れていく。

「死ぬ気で漕ぐんだ。漕ぎ続けろ！」

船長は叫んだ。

止まったら殺される。確実に。

俺たちを含め、みんなで必死に漕いだ。

遠くに明かりが見える。港の光だ。

「頑張れ。港に入るまでだ。」

船長は叫ぶ。本気で。

「うおおー。」

乗組員の一人が叫んだ。

はじめは船長の呼びかけに乗組員が反応したと思っていた。しかし、違った。

顔面に奴がかぶり付いたのだ。

「大丈夫か！」

船長が叫ぶ。

いや、大丈夫じゃないだろ。

その乗組員は絶叫したまま海に落ちていった。

「いつ、いやあゝゝゝ。」

サヤは泣きながら叫んでいた。

「く、くそお！」

カイは何も出来ずにやつらのえさにされていくことが悔しかった。

漕ぐんだ。今は漕ぎ続けるしかない！

「はあはあ……」

「つ、ついたあ。」

カイもサヤも疲れきっていた。

なんとか港に着いた。今は砂浜に寝転がっていた。

もう日の出が見えそうな明るさになっている。

船に乗っていた人間の三分の一は奴らのえさになってしまった。

「悪いな。こんなことに巻き込みまつて」

船長が来て、寝転がって休んでいる二人に言った。

二人は起き上がる。

「いえ」

カイが言うが、力が無い。

「かわいそうです。海に落とされていった人たち」
サヤも力無い。

二人とも本当に疲れていた。

「まあな」

船長はそう言つて海を見る。

今日のことですでに仲間を失ったか。

カイたちはなんとも言えなかった。

船長はその場に座つて言った。

「あの魚は日本を挟んで反対側から来たらしい。どうやって来たかは分からないが、十年近く前からこういうことが起るようになったんだ。」

そして、カイたちを見て船長は続けた。

「それと、これから先、あんな奴らが一杯出てくるって話だ。」

「……」

カイたちは何も言えない。

今日以上の生物がこれからどんどん出てくるというのか。

「気をつけろよ」

船長は二人に言った。

「わかりました。ありがとうございます」

カイは船長に礼を言う。

ここからは陸路だ。馬も無い。

それでもここまで来たんだ。

「行こう。サヤ」

カイはサヤのほうを見ていった。

「うん」

覚悟は出来たようだ。

もう簡単には戻れない。

二人は港を出て西に続く道を歩いていった。

第八話 おくりもの

第八話 おくりもの

2236年 ロンドン

夜になり、辺りは月の光に照らされている。

カールは海岸に向かって歩いていった。

「ふ。ふん。」

うれしそうに鼻歌を歌っている。

海岸に着いたとき、カールは先客を発見する。

相手は足音に気がついてこちらを向いた。

「おつ。テリーか。」

カールはテリーであることに気がついた。

「大尉、こんな夜遅くにどうしたんですか」

テリーは不思議そうにカールを見上げる。

「まあ、勉強終わりに海でも見て寝ようかなって思ったんだよ。」

「

カールはテリーの隣に座り彼に言った。

「きおくを見ていたのですか。」

テリーは勉強の意味を理解したようだ。

「そうだよ。奴らにはおくりものをしたんだ。俺たちはその上

を行かないとね。」

そしてカールはテリーを見て

「あとはあ、面白そうだから。」

笑顔で言った。

あの内容は笑顔で見られる内容とそうではないものがある。

しかし、それ以上にそこへの好奇心がある。

「そうですね。」

テリーはそう答えて目の前の海を見る。

しかし、テリーはすぐに何かを思い出したかのようにカールを見て言った。

「大尉、ご報告いたします。」

「ん？」

カールはテリーを見る。

テリーは言った。

「明日、こちらに拠点を築くための人材が船にて運ばれてきます。」

「そうか、わかった。俺は帰る。眠い」

カールはテリーに告げてその場を離れようとする。

「大尉、あと一つお話が。」

テリーはカールを引き止めて言う。

「なんだあ。早く済ませろよ。」

そういつてテリーの隣に座りなおす。

「私は大尉に彼ら親子をおくりものとして送るよう進言しました。」

「それがどうしたんだ？」

カールは不思議そうにテリーを見る。

「しかし、未だに彼らに付いた者から連絡がありません。」

テリーは心配そうに言った。

「ああ、それが。多分殺されただろうな。他に連絡が途絶えている奴は多い。」

カールはさらっと言う。

すかさずテリーはカールに言う。

「それでいいんですか。力を付けることになりますよ。」

それを聞いたカールは笑い出した。

そしてカールは言った。

「それでいいんだ。あのおくりものは餌だ。奴らがのこのここに来れば心配事が消える。」

「逆らう者への餌ってことですか。」

テリーはカールに言う。

カールはテリーの言葉に頷きつつ口を開く。

「まあそうだ。釣れるかどうかはわからないけど。無理におびき寄せる必要は無いよ。奴らの目的は施設の奪還だろう。」

そして海を見て続けた。

「ここを守っておけばいい。あえて向こうに出向く必要も無い。」

「

カールはテリーのほうを向いて告げる。

「念のため、警備はしっかりするように。明日からこの島に船が出入りするんだ。船のほうもしっかりしないと。」

「はい、分かりました。」

テリーは返事をする。

「それとだ。この島に居る兵士はまだまだ少ない。明日の追加分で足りないと思ったら追加は必須だ。」

「はい。しかし、かなりの人数を載せているのです。」

カールの言葉によってテリーの言葉はそこで遮られる。

「だからあ、見てみないとだめでしょ。途中で脱落者が出ているかもしれないし。」

テリーはカールの言いたいことが理解できた。

あの海を越えてくるのだ。注意したほうがいい。

カールは思った。

「わかりました。明日船が到着した後、人数を確認して報告します。」

「よろしくたのむ」

カールはテリーに答えるとその場を去ろうとする。

その背中にテリーは言う。

「はい。しかし、奴らはこの国に牙を向くのでしょうか」

「わからないよ。剥かないに越したことはない」

カールは振り返ってテリーに言った。

そして、遠く彼らが居るであろう方角を見て言った。

「目的は奴らの殲滅じゃないんだから。」

「きおくをわが国におくりものとして送る。」

テリーも海の向こうを眺めて言った。

「それが目的だ」

カールはそう言って帰る道を歩き出していた。

「今はその時じゃないんだ。」

カールは空を見上げて言った。

テリーでは無く自分に言った言葉

テリーはカールを見ている気配はしたがかわらず歩き続けた。

しばらく歩いたとき、ふと今は見えなくなった海の方角を見てカールは言った。

「奴らは別の者にやらせればいいか」

そう言うときカールは来た道に戻っていった。

我々はそれほど暇ではないんだ。

第九話 深き森の

第九話 深き森の

2236年 秋 東南アジア

湿った空気が肌に触れる。

僕とサヤは森の中にいた。

近くの村の人の話ではこの森を抜けないと西へはいけならしい。

今は南下して西へ方角を変えようとしていた。

船を降りた場所から西へそのまま向かうことも考えた。

しかし、その先にある村は少なく、何より高地を通らなければなら
ない。それに緑の無い砂漠らしい。これから先は砂漠の場所が多い

と聞いた。今は植物に触れていたい。

それに馬が無いんだ。難しいと思う。

猿が僕たちの前を通り過ぎる。

僕たちの住んでいる場所の近くにも猿は居る。

だけど、そこに居る猿とは何かちよつと違う。

種類の違いだろうか、考えても分からない。

それ以外には鳥が居る。

名は分からないが、それほど大きい鳥ではない。薄い藍色の体をし
た鳥はこちらを見て、そして飛び立っていった。

空を見上げても高い木々で覆われていて空は見えない。

人間の作った通り道など無く。ただ木々が乱立しているばかり。
人間がそれほど入っていないということか。

しかし、この森を抜けなければ西へは向かえない。

この先にある村とさっきの村は交流が全く無いのか。

しかし、なぜだ。

僕は空の見えない木々の天井を見て考えた。

近くの村を出ようとしたときの人々の視線。
みんな僕たちを見ていた。

この森に入ることが珍しいのか。
実際のところ森に入ってすぐの場所には村人が何かを採取していた。
しかし、ある程度森の奥に入ったかどうかこの地点には僕たち以外誰も見えない。

「どうしたの。」

サヤが心配そうに僕を見た。

ずっと見えない空を見ていたからだろうか。

「いや、何でもない。」

僕はそう言ってまた歩き出す。

横目でサヤを見ると、サヤがずっと僕を見ている。

心配そうだ。

そう思っていると、前方に出口らしき場所が見える。

もうすぐこの森も抜けられるのか。

太陽が当たるその場所に僕たちは出た。

「やっと森を抜けたあ。」

僕の隣にいたサヤは一足早く抜けて空に向かって言った。

しかし、二言目は、

「あれ……。」

その時点で僕も森を抜けていた。

そして気が付いた。森は抜けた。

しかし、目の前にはまだ森がある。

ここは森と森の間らしい。

前後を森、左右を山に囲まれている場所。

「まだみたいだ。さっさと行こう。」

僕はサヤに言って歩き出す。

僕は今度こそ森を抜けるために、再び森に入ろうとしていた
森に再び入る直前、動物たちが騒ぎ出した。

視界に入る動物たちはみな森の奥に消えていく。何か嫌な予感がし

た。

それはすぐに確信に変わった。
遠くで獣の咆哮が聞こえる。

「な、なんかまずいぞ。」

僕はそう言ってサヤを見る。

彼女は後ずさりはじめていた。

凄く危ない予感がした。

「ひ、ひとまず引き返そう。森に入ってからそんなに経っていないから。」

僕はサヤの手を引っ張ってもと来た方向に走り出す。

再び咆哮が聞こえる。今度は近い。

僕たちはかまわず走り続ける。

そのとき何か重いものが地面に落ちたような振動を感じて体がよろめく。

「きゃ。」

サヤはその場に手について堪える。

僕は振り返ると大きな猿がこちらを見ていた。

さつき見た猿をもつとがつちりさせて大きくしたようなやつだ。僕の身長は軽く越えているだろう。

その体は青白い毛で覆われている。

その瞬間僕は耳をふさいだ。

大猿は僕たちへ向けて至近距離で咆哮したのだ。

耳を手で塞いでも音は耳に侵入をする。

耳を塞ぐことによって行動が止められる。

咆哮止むと、すぐに地面に倒れこんでいるサヤの手を掴んで立たせる。

そして、来た道を全力で走り出した。

「な、なんなんだあいつは。」

僕は走りながら奴を見て言った。

「知らないわよお。」

サヤは僕の手を振り払って自分で走り出す。

振り払われたよ。

しかし、今はそんなところにへこんでいる暇なんてない。

奴は追いかけて来ている。

僕とサヤはそれぞれ木々の間を縫ってなるべく真っ直ぐ走らないようにした。

サヤは叫んでいる。叫んだら疲れるだろうに。

止まったらかなり危ない。いや、食われるかもしれない。

木々が乱立しているこの森の中ではこっちのほうが有利らしい。

いや、奴が最初にいた地点よりも今の地点のほうが木々が多い。

しかも、村に向かうほど木々が多くなっていることに気がついた。おかげで立ち止まることなく走り続けることで奴との差は広がっていく。

近くの村の人を発見した。彼はサヤの叫び声に気がつく。

その後方にいる大猿を見ると、叫びながら村があるであろう方向へと走っていった。村人が居るということはもう少しで森を抜けられるということだ。

そう思っていると遠くに森の終わりが見えた。

今度こそ森を抜けられる。

結果戻ってきてしまったけど。

走りながら後ろを見ると大猿も目の前の森が見えたようだ。

このまま森を抜けて追いかけてくるのだろうか。

いや、それは無かった。

奴はその場で止まった。

僕も立ち止まってやつを見る。

サヤは僕が止まるのを見て止まる。

「わっ。」

急に止まったためにその場に倒れこむ。

大猿は一度大きな咆哮をすると森の奥に戻っていった。

「追いかけてこないの。」

サヤは座り込んだままでそう言った。

お互い息が荒くなっている。

僕はサヤの手を掴んで立たせると森の出口へ向かって歩き出した。

カイは歩きながら考えた。

この森を抜ける方法を考えなければならない。

それにはあの大猿をどうにかしなければ先には進めないだろう。

森を抜けると一人の男が僕たちを待っていた。

僕たちは、森に入る前に話しかけてきた男たちの一人だとなんとなくわかった。

僕は、彼やその周りの人間が「森を通り抜けられる」とか「抜けられない」と言っていたことを思い出した。

「生きて戻ってこれたんだな。」

彼は下を向いて微かに笑った。

「付いて来い。」

彼はそう言つと村に向かって歩き出す。

僕たちはひとまず村に行かないとどうしようもないのでついて行くことにした。

第十話　ぼくらと

第十話　ぼくらと

2236年　秋　東南アジア

そこで待っていたのは人々の嘲笑だった。

あの森を抜けられなかったということ。

そのことで笑っているのだろう。

気がつけばサヤが僕の腕を掴んでいる。

しかし、彼らを村の奥では見ていない。

よって、彼らに笑われる筋合いは無いのだ。

前を歩く男は同じように笑っているのだろうか。僕はそう思った。

しかし、違った。

彼は振り向くと、

「奴らはあの森の奥に入ったことのない奴らだ。だから、気にするな。」

彼はそう言った。その顔は笑いのひとつも無い。

森を出たときの微かな笑いはなんだったのだろうか。

そう思っているうちにその場所に着いた。

ここは森に入る前に、僕たちに彼らの議論を聞かせた場所。

「抜けられる」とか「抜けられない」とか。

その言葉を言い合っていた人間がやはりそこにいた。

「ははは、やっぱり逃げてきたか。」

一人の男は言う。やっぱりだという顔はもういい。十分だ。

「まあ、待て。それだけ本気であの森を越えようとしたってことだろ。」

僕たちをここにつれてきた男はそう言った。

「まあそうだけどさ。いけるかもって思ったんだけどなあ。」

また別の男が言う。

僕たちを連れてきた男が僕たちを見て言った。

「そつだ。俺の名前を言つてなかった。」

そつだ。僕を含め誰が誰なのか全く分からない。

彼はそのまま続けた。

「俺の名前はシェイ。森で狩りをしている。お前たちを笑わない奴らはみんなあの森の奥へ行ったことのある奴だ。」

彼は周りを見渡すことで行ったことのないであろう人々はみな下を向く。

「僕はカイって言います。」

「私はサヤ。」

相手の自己紹介は行われたので、それぞれが名前を言っていく。そついえば、森で狩りとはどういうことだろう。

「狩りなんてそんなに狩るような動物は……。」

僕は言おうとしたがすぐにシェイに遮られる。

「奥のほうに行くと森と森の間があるだろう。その先の森に色々な動物が居る。」

実際、あの大猿はその森から現れた。奴らのほかにも色々とう居るということか。

「戻ってきたつていうことは奴らに見つかったつてことか。」

誰かが言う。誰だかよく分からないのでその他大勢の人たちのうちの一人となる。

「奴らつて、あの青白いばけもののこと。」

先ほどまで黙っていたサヤが口を開く。

その人はうなづく。

「青白い大猿。あの森では一番のやつらだ。」

シェイは目だけこちらに向けて言った。

「あいつらがあの森の一番。」

僕はその言葉を口にしてしまい。恐怖が僕の体に侵入する。しかし、すぐさま侵入は止まる。シェイが言った言葉からだ。

「奴らを倒すことは難しいことではない。問題はその他大勢が一緒に襲ってきたときが本当の恐怖だ。」

まるでその状況に陥ったかのような発言。

いや、実際に味わったことがあるのだろうか。

一体ならまだなんとかなるということか。

しかし、僕が見た限りでは危ない生物に変わりはない。

再び恐怖が僕を満たそうとする。

そんな僕の状態を感じたのか否か。シェイは僕たちに言った。

「だったら、あの森を越えられるようにすればいいんだ。森に入る前には言わなかったが……」

そこで一息を入れて続けた。

「お前たちの装備じゃあ。森を抜けることは難しいさ。」

「だったら、なぜ言わないのよ。」

サヤがすかさず言い返す。

「あの森を越えようという覚悟はあったからな。言いづらくて。」

シェイは難しい顔をする。

そして、空を見上げたまましばらくそのままになった。

そして彼は一言言った。

「お前たちがあの森を越えられるようにしてやろう。」

「え。」

僕はそれ以上何もいえない。どうやってするんだろう。

まさか、森を抜けるところまで連れて行ってくれるとか。

しかし、そんな思いも直後のシェイの言葉で消滅する。

「二人とも森で俺と一緒に動物を狩るんだ。」

「ええ。」

僕よりもサヤが驚いていた。

「あの森を通り抜けさせることは簡単だ。」

俺の仲間と一緒に行けばいい。」

さらっとシェイは言う。

「しかしだ。今後と同じことが出来るということは稀だ。この先も

色々と居るらしいからな。」

シェイはなお続ける。

「いい機会だ。俺がお前たちをこの森を越えられる程度にはしてやる。」

「それってつまり。」

僕は何となく予想できた。

そしてそのとおり彼は言った。

「自分たちだけであの青白い大猿を倒せるようにしろってことだ。」
「なんということだろう。正直海のこととついさっきの大猿のことでもういやいや状態だ。」

サヤもあまりいい顔はしていない。

「今後のためだ。なんと言おうと俺たちは今のお前たちを森の向こうへ連れて行くことは出来ない。」

ようは彼の元で修行しろってことか。

今後色々居る。そんなことを海で出会ったあの船長からも言われたな。

だったら、あの大猿を倒せるくらいにはなってやる。

僕は決心してサヤに言う。

「どうやっても越えられないんだ。今は自分たちで越えられるようにしよう。」

僕の言い方が真剣だったのかどうなのか。

サヤは静かにうなずいてくれた。

シェイは僕たちを自分の住む家に招きいれてくれた。

そこで彼にこれから扱う武器を選ばされる。

さてどうしよう。

今ここにはそれらしいものはない。

ということとは、何でもいいのか。

ふと部屋の中を見渡すと大きな剣が立てかけられていた。

僕は近寄ってよく見る。

「これは。」

「俺の使っている剣だ。大きいだろ。一撃の威力はあるぞ。」

僕の質問にシェイは答えてくれた。彼は大きな剣を使っているらしい。

「これいいなあ。」

ちよつと一撃大打撃っていうのはいい。やっぱり男だったらそうだろう。

そんな気持ちを察したのかシェイは言う。

「君はその大剣が いいのかな。」

「そうですね。いいと思います。」

僕はシェイへの返答を返した。

「じゃあカイクンはその大剣ね。それでサヤさんのほうは。」

シェイはサヤへと尋ねる。

「あんなに大きいのはちよつと。」

シェイはサヤに聞いてみるものの。

サヤにはあの大きさは面倒だろう。

さて、どうする。

「うゝん。じゃあ片手剣あたりかな。片手だけあつて軽いから女の子にも大丈夫だと思うけど。」

シェイは部屋の片隅に置かれていた小さな剣を見せる。

「片手で扱える剣なら軽そうね。」

シェイの言葉にサヤはそう言うと言つて実際に持つてみる。

「うん。これなら大丈夫そう。これにする。」

サヤも決定したようだ。

さてと、決まったところで今度はやはり…。

「扱う武器が決まったんだ。早速明日狩りに行くか。」

決まったからつて、早過ぎないか。

まだ全然扱い方なんて知らないし。

まさか、習うより慣れるですか。そうですか。

シエイは立ち上がり、

「ちよつとここに居てくれ。」

それだけ言つと家を出て行こうとする。

いや、ちよつとまった。

「僕たちはこの格好で行けつて事ですか。それと僕が扱う大剣つていうのは……。」

僕はそこまで言つとシエイは言つた。

「心配するな。俺がいつも身に着けているほどのものじゃないが、お前らに着せる奴は用意する。武器もな。」

「そうですか。」

「心配するな。それとこれからしばらくここに居なければいけないからな。俺の家の空いている所に陣取つてかまわない。」

シエイはそれだけ言つと家を出て行つた。

何処に行くのだらう。僕たちの物を調達しに行くのだろうか。

何処へいくことも出来ないので僕たちはその場で待った。

次の日からシエイとともに森へ行く。

奥側の森へ入ると様々な動物が居た。

何時またあの大猿が現れるか分からない。

しかし、今この三人でなら大丈夫だらう。

あとは二人でも大丈夫な状態にするとこまで行かないと。

ここで立ち止まることは予想外だった。

しかし、これが後になって良かったと思えるように今は頑張るしかない。

明日も、明後日も森は僕らを待っている。

第十一話 新手

第十一話 新手

2236年 秋の終わり 某所

私は眼前に見える陸を見ている。

ここは船の上だ。施設がある島を見ているわけでも邪魔者を探しているわけでもない。

背後に誰かが近づく気配がする。

振り返れば乗組員の一人が立っていた。

「カール大尉、こんなところに来てどうするのですか。」

乗組員の一人が私に言う。

分らないのも仕方が無い。テリーすら知らない場所にお前たちを連れて行くのだから。

私はまた同じ姿勢に直ると皆に言う。

「陸に着いたら、私と数人以外は船に残って欲しい。」

あの場所に大勢で押しかけても面白くは無い。

我々に付く人々がこの先に居る。正確にはわが国から離れて勢力を拡大する試みをした者たちというほうが正しいだろう。

私は彼らとつながりがある。国としてではなく一個人として。

国は彼らの行動には全く関心が無い。

彼らの規模が小さいからだ。

テリーは施設に置いてきた。

これは我々が本当にすべきこととは違う。

「さてと、行こうか。」

「ふざけるな。」

大男がテーブルを勢いよく叩く。

私についてきた何人かが微かに体を動かす。

いや、動かすなよ。

今日の前にいるこの大男が私と面識のある男だ。

名前は確かグランとか言ったか。

彼の部下からは頭と呼ばれているから忘れてしまいそうだな。

「俺は自分の国を出たんだ。いまさらその国に頼られたくは無いな。」

「

グランの言葉はもっともだ。

「国ではなく私の力になってほしい。」

私の言葉にグランは考えている。それをただ私は待っている。

しばらく考えた後、グランの口が開く。

「何をするんだ。」

のってきた。

「ある集団が私を殺そうとしている。」

少し間違っているような気もするが、彼を使うためだ。

「そうか、お前を。」

グランは考えている。さあ、どうする。

「だからその集団が私を殺す前に殺して欲しいんだよ。」

成功すればうれしいものだ。

「どこにいるんだ。」

彼の言葉に内心笑いが止まらないよ。

僕らは昔とは違うんだ。

私は一度目をつむり、一呼吸する。

私は彼を見て言った。

「ロンドンのある島の対岸一帯のどこかに居るよ。」

「正確な場所は分からないんだな。」

グランの言葉通り彼らの場所は私にも分からない。

しかし、それでもいいんだ。

「彼らの中には父親と娘の親子がいる。それが目印だ。」

おくりものが目印になる。これいい考えだね。

「部下に探させてみよう。見つかり次第殺せばいいのか。」

「そうだよ。私は別にすることがあるんだよ。」

これで面倒なことが消えればいい。

あとはグランの答えだけだ。

私は彼の目を見た。

彼は私の目を見て言った。

「わかったよ。任せてくれ。」

完全に私の仲間になったみたいだ。

さてと、頑張ってもらおうかな。

「それと、自分でも気をつけろよ。」

私はグランの言葉に礼を言って、連れてきた部下とともにその場を離れた。

彼らにも、そして自分の部下にも気づかれないように闇の中で笑った。

施設に戻る途中ずっとまだ見ぬ敵の集団がグランたちに始末される
ところを想像する。

奴ならやってくれるだろう。

そういえばテリーが居ないためか、誰も話しかけてこないな。

本当につまらない。

私は沈んでいく太陽を見ながらはため息をついた。

そういえば、私の居ない施設のほうは大丈夫なのだろうか。ちょっと
とまずかったか。

「カール大尉。輸送船が彼らに襲撃されました。」

施設に戻るとテリーは慌てた様子で私に言った。

私の予想は悲しくも当たってしまったようだ。

あの集団が船を襲ったのか。まるで海賊だな。

「大尉。申し訳ありません。」

「船のほうもしっかりしておけと……。」

私はため息を付く。

私の心は曇っているよ。このまま雨が降ってしまいそうだよ。

「申し訳ありません。」

テリーのほうは既に雨模様かな。

「もういい。もっと強化をしておけ。彼らは私の知る者に始末させるようにしてきた。」

そういうと今は陸すら見えないグランの居るであろう方向を見る。

私の言葉にテリーは少しは落ち着いたのか。

「では、彼らを追わないのですね。」

私は顔をテリーの顔に近づけてみる。

「だからあ。私が知っている奴に頼んであるって。それに面と向かって潜伏場所すらわからない彼らをどうやって始末しにいけないの。」

私はテリーから顔を離すと、その場をぐるぐると歩き回り始める。

「そうですね。わかりました。船の警備を強化しておきます。」

私はその場をぐるぐる歩き回りながらもテリーを見て言った。

「頼むよ。私が居ないときに限って何か悪いことが起きてちゃ使い物にならないよ。」

「はい。以後気をつけます。」

テリーの言葉に私は立ち止まり。

「よろしい。以上だ。」

私は言うことを言っただけでその場を離れた。

失敗したのなら、成功することによって責任をとってもらおうか。

第十二話 小さな手

第十二話 小さな手

2236年 秋の終わり 海上

私たちは海の上に居た。

波は静かみたい。

隣でセイジは座って海面をずっと見ている。

これから久しぶりの戦いが始まる。

私たちは施設のある島から離れた海上に留まっていた。

施設のある島から出て来る船を襲うため。

あまり良い方法ではないと思う。

しかし、今はこれが抵抗できる方法だと。

私はそう思うことにした。

船を襲うにあたって、私たちはすべきことをした。

行きかう船にその場に居てもおかしくは無い船であると認識させること。

これには時間がかかった。

この行為は海上での食料調達を含めて一石二鳥なのでいいとは思っけど。

それもすべてこのときのため。

出来るだけ簡単に船に乗り込めれば、あとはどうにかなると思う。

ルイスの弓の腕も期待できそう。

それにしても、あの腕はどこで身につけたんだろう。気になる。

セイジは自分の武器を手入れしている。

もちろん外からそんな行為が見えないようにしている。

彼が使っているのは両手で持つ剣だけど、腰に挿せる程度の大きさのもの。

彼は重すぎる剣は使い勝手が悪いだろうと考えたみたい。

力任せに片手で振り回すことも出来るので面白いと本人は言っている。

ちなみに私は片手で持てる短剣を両手にそれぞれ持った形。

セイジの武器よりは動きやすいし、何より手数と速さで勝負。

そういえば、仲間の中には斧や斧の持つ部分を長くしたような武器を持っている人もいる。

片手で振るなり、両手で振り回すなりそれぞれである。

レイはごつごつした棒を一本持っている。

棍棒というらしい。

棒の先端は球形で無数の刺が付いている。

あの棒で相手を殴るということなのだろう。

想像するだけで痛そう。

ケイトを含め何人かは、今回の作戦に参加していない。

ルイスやレイの話ではケイトは単独行動のほうが得意らしい。

それを二人は理解している。

一体彼は何者なのだろうか、凄く気になる。

ちなみに、今回参加している人間が持っている武器の一部はきおくに載っていたものを真似て作ったものらしい。

しかし、自分たちの記憶を頼りに創ったため、元の武器とは少し違うかもしれない。

使えるならそれでいい話だけど。

今は食料を得るために釣りをしている人間もいくらかいる。

海にもぐって貝類を探している人も何人かいる。

そうしながらも、私たちは行きかう船を見ている。

既に、施設のある島には船がある。

その船が何時島を離れて国に戻っていくか。

ひとまず、そのときがくるまで今は待とう。

その時は突然に来了。

見張りに立っていた男が騒がしい音を立てて私たちがいるところに来た。

彼が来る前に私はその物音で起きたけど。

「船が出たぞ。」

男の声で一斉に起きだす。

セイジはまだ寝ている。

ひとまずびんたを何回かする。

そしたら不機嫌ながらも起きた。

その気持ち別のところに向けといてよ。

私たちは用意を済ませて、自分たちの船を島から離れた相手の船へ近づけていく。

相手の船は私たちの船の数倍はある大きさ。

あの中になにかがあるのか気になるところ。

ルイスは弓を持ったままずっと相手の船を見ている。

見張りを撃とうということらしい。

船は相手の船尾に近づいていく。

一人が見張りをしているところが見えた。

ルイスはすかさず弓を引いて放った。

相手はこちらに気が付いたが直後に矢が当たって倒れた。

少し時間を置いて、ルイスはみんなに言った。

「大丈夫そうだ。行こう。」

さすがに大声を出すのはまずいので、それぞれ頷く。

何人かが縄の先端に大きな針を付けたものを振り回して船に投げ込む。

針が引っかかったことを確認するとそれぞれ上りだす。

私もセイジも相手の船に入る。

船には二、三人残り周りを見張っている。

私とセイジが相手の船に侵入すると、既に事が始まっていた。

ルイスは船内から出て襲ってくる相手を矢で射抜いたり、近づいて

きた敵を短剣で切りつけていたりしている。
やはり弓だけでなく短剣は必要なんだろう。

いや、そんなことはあとで考えればいいこと。

「うりゃあ。」

ルイスは叫びながら船上で棍棒を振り回している。

棍棒棒に当たった相手が吹っ飛んでいる。

私たちもその中に加わる。

私の両手に持つ短剣が、セイジの剣が月明かりに光る。

思ったよりも簡単に済んでしまった。

武装していた人間は十人にも満たない。

ほかには船を動かす人間たちも居たけど、無抵抗者確定。

私たちは占領した船を施設がある島から見えない位置に進めさせる。
自分たちの船もそのあとをついていく。

船を止めると、今回運んでいたものを船外に運び出す。

とは言っても大量の紙が入った木箱と乗組員の食料だけらしい。

「この船で施設のある島にそのまま戻りな。じゃなきゃここで死んでもらう。」

ルイスは残りの乗組員にそう告げる。

彼らは逃げるように島へ戻っていった。

もし、彼らがここで荷物を奪われたと報告したとしても私たちが居るアジトまでは到達出来ない。

施設のある島へと戻っていく船を全員が見ていた。

「さて、戦利品を持ち帰ろうか。」

レイがみなに言う。

私たちは手分けして大量の紙の入った木箱と奪った食料を自分たちの船に乗せてアジトへと戻る。

アジトに到着すると残っていた人間が出迎えてくれる…なんてことは無かった。

既に残っていた人間はみんな寝ていた。

ケイトは居ないようだ。どこかに行っているのだろう。

木箱と食料を部屋の中に置くと、疲れたのか私たちはすぐに寝てしまった。

次の日の朝早くにケイトは帰ってきた。

「彼ら慌ててたよ。うまくいったんだね。」

施設のある島に偵察に行っていたらしい。

単独行動とはこの事だったんだ。

ケイトは疲れているらしく。そのまま寝てしまった。

私たちは昨日手に入れた木箱の中の紙を調べてみる。

大量の紙はきおくを書き写した一部らしい。

しかも、ほとんどが武器や戦術といったものだった。

「戦争始める気かよ。」

同じく大量の紙を見ていたセイジが言い出す。

これほど内容に偏ったものを運んでいたのだ。

戦争を始めると言い出しても不思議じゃない。

しかし、あの国が何処に戦争をするのだろうか。

まだ良くわからない。

彼らは一度船を襲われたんだ。

今度からはもっと警備を厳しくするだろう。

次の船は襲えるだろうか。

いや難しいかもしれない。

今はこの大量の紙を読んで、施設を取り戻す方法を考えよう。

第十三話 大猿

第十三話 大猿

2236年 冬の始まり 東南アジア

シェイの家の中に僕らは居る。

シェイの目の前で僕とサヤは身支度をする。

今は二人ともシェイが用意してくれた防具に身を包んでいる。
なんか、見るからに高そうなものだ。

僕たちが使っているのだろうか。

そんな僕の気持ちを察したのか、

「おいおい、その防具は貸してんだからな。やらねえぞ。」

そう言うのと、出入り口のほうを一度見て言った。

「本当に、楽しみだよ。」

シェイは楽しみのようだ。

少し前は背を向けて逃げていた相手に、今度は立ち向かっていくのだから。

僕は太剣を背負うとシェイに言った。

「大猿の毛皮を持ってくればいいんですね。」

「一応倒した証拠が欲しいからな、持ってきたら何か報酬をやるよ。」

「シェイは何か楽しそうだ。試されているということか。」

今の実力を発揮するまでさ。

サヤも用意が出来たらしい。

「森の入り口まで一緒に行つてやる。なんとなくだ。」

森の入り口で帰りを待っているということか。

「行こうよ。カイ。」

僕はサヤの言葉に頷いて、シェイの家を出る。

日差しが強い。

僕は手を太陽にかざす。

思えば今頃日本では涼しかったり寒かったりする時期だと思う。暑いのは嫌いじゃないけど。これから続くと思うとなんともいいない。

「お前らがあいつを倒せるわけねえだろお。」

どこからかそういった声が何度か聞こえてくる。

シェイはその都度気にするなと言った。

結果を見せれば良いんだ。

「俺はお前たちの力を信じている。」

シェイはそれだけ言うとな森の入り口まで何も言わなかった。

僕たちも何も言わずにシェイとともに入り口まで行く。

シェイと一緒に森に入っている間は、大猿は僕たちの前に現れていない。

シェイは、私を恐れて出てこないのだろうと言っていた。

なら、僕たちだけのときなら現れるだろう。

現れたときが勝負だ。

そう思っている間に森の入り口につく。

「さあ、行つてこいよ。待ってるぜ。」

シェイの言葉に僕たちは頷いて、深き森の中へ進んでいく。

僕たちは森と森の間に足を踏み入れた。

そこまでは特に変わりない。

鳥の鳴き声が聞こえてくる森の中を抜けてきた。

眼前に見える奥の森を見る。

前回はここであの大猿が目の前に落ちてきた。

いや、降りてきた。

空を見上げれば青く雲はない。

ひとまず奥の森に入ろう。

「行こう。」

僕はサヤに言うのと再び森に入った。
村のほうの森とは違う。

森に入ると、猪をもっと大きくして一本の角を生やしたような動物
や蜂を大きくしたような昆虫がそこには居た。
ぼくらはそれぞれ一角猪と大蜂と呼んでいる。
名前なんて人間が勝手に決めた記号なんだ。

その程度のことである。

そう思っている間に一角猪がこちらに気が付く。

一角猪は勢いをつけて突進してくる。

本番前の準備運動ですか。

ぼくとサヤはそれぞれ左右に避ける。

避けたらすぐに横を通り過ぎていく一角猪を追いかける。

突進を終えて止まった一角猪の背中に僕の大剣が振り下ろされる。

攻撃を受けた猪は衝撃でよろめく。

素早く剣をしまつて離れる。

大蜂も僕たちに近づいてくる。

僕の大剣では、大蜂をうまく倒すことが出来ない。

だからサヤの片手剣にお任せしている。

「たあ。」

サヤが近づいてきた大蜂を真つ二つにしている。

真つ二つにされた体の中から液体が飛び出す。

サヤの顔面にその液体がかかる。

サヤはそれを手でぬぐってこちらに来る。

再び一角猪がこちらに向かって突進してくる。

僕たちは左右に避けて、止まった猪の背中に剣を振り下ろそうとする。

しかし、その前に猪は反転して僕のほうに突っ込んできた。

「うおお。」

僕は鋭い角で胸を突かれて後方に飛ばされた。

防具がしつかりしていなければ今の攻撃だけで行動不能になりかねない。

今回はシェイがいい防具を用意してくれたためか、体内への衝撃はそれほどなかった。

サヤがその隙に後ろから猪の頭に剣を突き立てる。

一角猪の悲鳴の音が森に響く。

僕は立ち上がった、剣が突きたてられた猪の頭に大剣を振り下ろした

刃は猪の首のあたりに深く食い込む。

猪は一度大きく叫ぶと横になって動かなくなった。

サヤが猪から剣を抜こうとする。

無理やり抜くと血が噴出してきた。

僕も外に出したままの剣を収める。

「ふう。」

一息ついて周りを見渡すと、サヤはまた現れた大蜂の駆除に対応している。

他の動物に攻撃しているときにあの針で刺されるといいことは無い。

シェイの話では、あの針からは毒が出るらしい。

大猿との戦いに参戦されてもいいことは全く無い。

なのでサヤに駆除を頼むとして、僕はこっちに向かってきた新しい獣を狩りしよう。

近くで咆哮が聞こえてくる。

聞こえた方向を見ると、奴が上から降ってきた。

大猿は大きな音をたてて着地する。

そして、一度大きく咆哮をする。

「来たか。」

やっと本命の登場だ。

しかし、大蜂はサヤのおかげで居なくなっただが、一角猪がまだ一頭

近くに居る。

ちょうど大猿と一角猪の間に僕らはいる。

だったら片方に寄せよう。

勢いをつけて突進してくる一角猪を僕らは避ける。

突進する先には大猿がいる。

そのまま一角猪は止まらずに大猿に突進していった。

角が大猿の体に突き刺さる。

次の瞬間、大猿は右前足を振り上げて一角猪へ振り下ろす。

見事に一角猪の体の側面に当たって、猪は悲鳴を上げながら飛んでいく。

着地した先で動かなくなる。

一撃ですか、そうですね。

この深き森の中で、ぼくらと大猿は対峙する。

僕らはそれぞれ自分の剣に手をかける。

さあ、はじめようか。

大猿がこちらに向かって突進してくる。

大猿は図体が大きい割に動きが素早いことがすぐ分かった。

僕は避けようとしたが、体の一部がぶつかって飛ばされる。

「うおつ。」

一瞬空中に浮かんだあとに、冷えた地面に叩きつけられる。

ごろごろと転がって勢いは止まった。

「だ、大丈夫。」

サヤは大猿のほうに注意を向けながらこちらに近づこうとする。

「来るな。それこそ危険だ。」

すぐ傍に大猿はいる。

そして、大猿はこちらを向こうとする。

ここって凄く危険地帯。

「せやつ。」

大猿がこちらを向き終わるかいなかのときにサヤは大猿の体に切りつける。

大猿はちいさく悲鳴をあげる。

その間に僕はその場を離れた。

そばに居たらさっきの一角猪のように一撃で殺されかねない。

赤い血が青白い毛を赤く染める。ほんの少しだけど。

大猿は向き直ってその場から飛ぶ。

左右前後の足を一杯に広げて僕らの上に落ちてこようとした。

僕とサヤは左右にそれぞれ避ける。

落ちてきた大猿の背中に大剣を振り下ろす。

大猿は衝撃でよろめく。

込めた力のためか切れ味のためか分からないが、大猿の体に深めの傷をつける。

僕は剣をしまつて一度離れる。

その間にサヤは片手剣で何度も切りつける。

大猿がぐるぐるとサヤを捕捉しようすると、サヤはそれにあわせでぐるぐると大猿と一緒に回る。

そして、立ち止まって前足を振り上げたときに切りつける。

いいな、片手剣って。

僕はそう思いながらも、前足を振り上げる大猿の体到大剣を振り下ろす。

青白い毛がどんどん赤く染まっていく。

これなら簡単に勝てるんじゃないか。

僕は思ったが、その気持ちは大猿の咆哮によって吹き飛ばされる。

これまでとは桁違いの大きな咆哮を至近距離で受けた。

耳を塞いでも容赦なく侵入してくる。

頭がくらくらする。そんな音だ。

奴は本気で怒つたらしい。

手で耳を押さえながら何とか動く。

大猿との戦いでは、咆哮で足元がふらついても絶対に立ち止まるな。

シェイが前にそう言っていたことを思い出す。

直後に大猿が突進してくる。

僕じゃなくてサヤのほうに。

サヤは耳を押さえながらも動きは早く、大猿の突進を避けていた。なんで、あんなに早く動けるんだ。

あの音は大きかったよ。大きかったよな。

僕は猿に近づきながらサヤをみた。

そして気が付いた。

サヤと僕とは耳の抑え方が違っていた。

サヤは布の上から耳を押さえていた。

僕は猿に切りつけたあとに頭の防具に触れてみる。

すると音を遮っているように感じる。

再び大猿は大きく咆哮をする。

今度は両手で布を挟んで押さえると、思ったよりも音が耳に侵入してこない。

これだったら布を挟んで押さえればよかった。

サヤは偶然分かったのだろうか。

この際どっちでもいいか。

そう考えつつ、隙の出来た大猿の背中に大剣を振り下ろす。

サヤは咆哮が止んだ直後の隙を使って切りつけている。

大猿がよろよろと動くようになっていた。

もう大猿の体は真っ赤だ。

僕はよろよろと動く大猿の背中に力を込めて大剣を振り下ろす。

一度大きな悲鳴を発するとその場に倒れて動かなくなった。

「た、倒したのね。」

サヤが僕に近づいてくる。

「終わった。」

大きく深呼吸をする。

ちよっと前までは追いかけていた大猿を、今は追い詰めて倒していた。

「さてと、皮を持ち帰ろうか。」

僕はそう言つと腰に挿していた短い剣を出して大猿の肌につきたてる。

この剣は武器には使えないが何かを切り取つたりといったことに使える。

いびつだけど皮は取れた。

大猿の皮を折畳んで、持ってきた袋に入れる。

「帰ろうか。」

「うん。」

サヤは僕の言葉に返事をして歩き出す。

先に歩き出したサヤの後ろを、僕は周りを注意しながら歩いていった。

「おかえり。」

森を出るとシェイが待っていた。

シェイは怖い顔をしている。

結果を言うのもちよつと怖いくらいだ。

「約束どおり皮を持ってきましたよ。」

僕は袋から出した大猿の皮をシェイに見せる。

シェイは大猿の皮を受け取ると、じつと見つめている。

一度頷いて僕らに言った。

「これで森を越えられるな。」

シェイは笑顔になっていた。

シェイは大猿の皮を自分の持つている袋に入れる。

「約束どおり報酬はやるが、明日の朝にやる。今日は泊まってけ。」

シェイはそう言いながら村のほうに歩いていく。

僕らもその後を付いていく事に。

この状況は大猿に追いかけて、逃げてきたときと同じようだと思うた。

あの日からどのくらい経ったのだろうか。

シェイは村につくと真っ先にあの場所へ行く。

初めて僕らがこの村に来たとき、僕たちに彼らの議論を聞かせた場所だ。

そこには今日も彼らが居た。

シェイは彼らに近づくと、袋から僕らが狩った大猿の皮を出して見せた。

議論を交わしていた数人がみな驚く。

シェイは僕たちを見て笑顔になる。

議論を交わしていた彼らも僕らを見た。

「お、お前らが。あ、あの大猿を。」

その中の一人が口を開くもそれ以上は言わない。

いや、言えないのか。

「抜けられる」とか「抜けられない」とか言う話をしていたこと自体が懐かしく感じてしまう。

この村での時間が長く長く感じた。

これで、この村ともお別れなのかと。

隣ではサヤがあの大猿の登場とか、どうやって狩ったといった事を自慢そうに話していた。

サヤには多々助けられたので、何も口出しは言わないようにした。

シェイの家に戻ってこの村での最後の夜を過ごす。

僕たちは大猿との戦いのためか、すぐに眠りに付いた。

金属が擦れる音で僕は目を開ける。

目を擦りながら起き上がるとシェイが大剣を背負って家を出て行くところが見えた。

この時間帯に狩りをするのだろうか。

僕は急いで外に出られる服に着替える。
サヤは隣ですやすやと寝ている。
起こすと悪いから止めといた。
家を出てシェイを追いかける。

「シェイさん。」

僕はシェイが森に入る前に捕まえた。

「なんだい。こんな時間に。大猿との戦いも疲れтарう。早く寝た
ほうがいいぞ。」

いや、こんな時間っていうのはこっちの言いたいことだと思っけど。
「なぜこんな遅くに森に。」

僕はシェイに言う。

シェイは森を見ながら言った。

「昼間に活動する動物と夜間に活動する動物は違う。」

シェイは僕を見て続けた。

「お前たちが倒した大猿はな。昼間の森では一番だが。一日を通し
た森の中では一番じゃないんだ。」

「え。」

僕はなんとかそれだけ言うことが出来た。

森の奥から微かに咆哮が聞こえてくる。

僕は、咆哮の聞こえてくる方向を素早く見る。

あの大猿よりも強敵が今この森の中をうろつくと動き回っていると
いうことなのか。

「村の人間は知らないさ。俺が動物から取った素材に触れる人間以
外はな。」

「僕らが寝ている間、何時も夜の森に。」

僕はシェイを見て言う。

彼の顔は月明かりに照らされている。

「そうだ。」

彼は首だけをこちらに向けて言う。

「気が付かなかったです。」

僕は下を向く。なぜ教えてくれなかったのだろうか。

「気が付かないようにしていたからな。」

そしてシェイは笑いながら続けた。

「今日、お前たちが大猿を倒してきたからな。俺も負けられないって気持ちがあつたんだろうな。」

そこでシェイは一息つく。

「それじゃあ、行つて来る。お前は早く寝ろ。」

そして、シェイは森を見つめながら続けた。

「ここからは俺の仕事だ。」

言い終わるとそのまま森の中へ入っていった。

僕はその後姿が見えなくなるまでその場に立っていた。

僕らが知らないことは、僕らが思っている以上に多いんだって思った。

第十四話　ひととき

第十四話　ひととき

2236年　冬　東南アジア

鳥の鳴く声に目が覚めて、ゆっくりと体を起こす。
隣ではサヤがすやすやと寝ている。

あれから僕はシェイの家に戻って寝てしまった。

あの咆哮を発したのはどんな動物だったのだろうか。

シェイに聞けば教えてくれるかもしれないが、聞いた所で何か始まるかというとも始まらない。

僕らのすべきことはあの森を抜けること。

辺りを見渡すと、シェイの姿は無かった。

朝からどこかに行っているのか。

それとも、あれから帰ってきていないのか。

どちらかは分からないが家には居ないんだ。

ひとまず、僕より寝ているサヤを起こしてみよう。

それに、寝ているサヤを置いていくのはどうかと思う。

サヤの体を揺らす。

「ん、んあ。おはよう」

サヤは目を擦りながら体を起こす。

「おはよう。着替えて外に出てみようよ。もうこの村とはお別れなんだから。」

僕の言葉に頷きもせず立ち上がって背伸びをする。

「そうだね。いこつか。」

僕らは着替えて家を出た。

そこで待っていたものは、あの日の人々の嘲笑ではなく尊敬にも似た眼差しだった。

村の中をぐるぐると回っていると。

「あんた、あの猿を倒したんだって。」

一人の男が話しかけてきた。

振り向くと小さな店の中にその男は居た。

多分店主なんだろう。

なんのお店かはわからないけど。

「ええ。そうです。」

僕は答えた。

「すごいでしょ。」

サヤもうれしそうに答えた。

僕は、この店を見て言った。

「ここは何のお店なんですか。」

「まあ、素材屋っていうのかな。シェイさんが取ってきたものを買い取って他に売ったりするんだよ。」

僕の質問にその店主は答えてくれた。

ふと店の奥を見ると何の動物のものかは分からないが、様々な色の皮や鋭い爪が置かれていた。

その中に青白い皮があった。

その店主は僕がその皮を見ていることが分かったのか。

「ああ、あれはあんたらが取ってきたものだよ。」

そう言うとその皮を手にとって僕らの前に置く。

「シェイさん。これ買い取ってくれて言ってきたさ。お金もらったらあっちの鍛冶屋のほうに行ったよ。」

「そ、そうですか。ありがとうございます。」

僕らは、礼を言うと素材屋の店主が指差す方向へ向かう。

しばらく歩くと煙突から煙が上がっている建物があった。これが鍛冶屋らしい。

そこにはシェイが居た。

「おはようさん。」

シェイがこちらに気が付いて挨拶する。

「おはようございます。」

「おはよう。シェイさん。」

僕とサヤはそれぞれ挨拶をする。

「あの大猿の皮をお金に変えて何してるんですか。」

ひとまず僕はシェイに質問してみた。

「ああ、あれね。お前らの防具をもっといいやつにして貰っているんだ。」

なんかおかしいと思った。

「僕らが何時も使っている武器と防具はシェイさんの家にありますよ。」

自分たちの武器や防具が無いなら、着替えている途中に気が付くはずだ。

「いやそつちじゃなくて、昨日お前たちに貸してやった防具のほうだよ。出来上がったらお前らにやる。」

「え。」

僕は驚いた。サヤも驚いている。

だって、あの防具は貸しているからって。

僕らの反応なんてお構いなしにシェイは続けた。

「ああ、それとお前たちの武器を取って来い。ここで鍛えなおしてもらった。つまり、報酬は鍛えなおされた武器と防具だ。」

僕らは昨日着たものよりも良い防具をもらえるらしい。

それに、今の武器を鍛えなおしてもらえる。

「刃こぼれさせたまま森を抜けられても困るからな。とっとと持って来いよ。」

シェイの言葉に僕らは一度家に戻ってそれぞれの武器を持って鍛冶屋に戻った。

シェイは僕らの武器を鍛冶屋の店主に渡す。

そして、シェイは店主と少し話をしたあと。

「付いて来い。」

シェイはそう言うのと、僕らを連れて歩き出した。鍛えなおすと言っても時間がかかるのだろう。その間何かするのだろうか。

着いたところは、酒場だった。

いや、昼間からお酒はまずいでしょ。

それに僕ら今から森を抜けるんだよ。

「店主、あれを三つ。」

シェイはそれだけ言うのと僕らを奥の席に導いた。

ほどなくよく分からない液体の入った器が僕らの前に出される。嗅いでみると甘い匂いがする。

「これはこちらで取れる果物を使った飲み物だよ。」

シェイは説明してくれた。だから甘い匂いがするのか。

「いや、だったらなぜここに居る間に教えてくれなかったんですか。こんなおいしいそうな飲み物なのに。」

僕は不思議に思った。それなりの期間ここに居たのに一度もこんなものがあるとは教えてくれなかった。

「材料のためか、店主もそんなに作ってくれないからさ。教えられなかったんだよ。ひとまず飲んでみなよ二人とも。」

「いただきます。」

僕らはそう言つて、それぞれ目の前に出された甘い香りのする液体を口にする。

全体的に甘いけど、酸味もあつてただ甘いだけの飲み物じゃなかった。

「凄くおいしいです。」

サヤが隣で感想を口にしていた。

「酸味があつておいしいです。」

僕もそのあとに感想を言う。

「お前らが猿を倒すつてことで、店主に頼んでおいたのさ。三人分ね。」

シェイも液体を口に含む。

「もう、お前らはここを離れるからな。最後にこいつを飲んでおいでも悪くないと思ってさ。」

少し間をおいて、シェイは僕らに言った。

「お前たちはあの森を抜けて何処に行くつもりなんだ。」

「もっと西のほう。ヨーロッパのほうまで。」

僕は答えた。特に場所を言ってもいいと思ったから。

「そうか、あの国まで行くのか。だったら、森を抜けたら西へ向かうんだ。大きな川がある。そこから西に真っ直ぐ進め。南には行くなよ。距離も時間もかかるから。」

「そうですか。ありがとうございます。」

僕はシェイの言葉に礼言った。

なんで、そこまで知っているのかについては追求しないようにした。そのあとは、ここでのこれまでのことをシェイとサヤと僕の三人で話していた。

太陽が高く上っていく。武器と防具が出来上がるそのときまで僕は話し続けた。

第十五話 深き森を抜けて

第十五話 深き森を抜けて

2236年 冬 東南アジア

金属の擦れる音が響く。

僕らは出来上がった武器と防具を鍛冶屋で受け取るとシェイの家で早速身に着けていた。

防具は昨日使った時の傷は無く綺麗になっていた。

武器のほうも綺麗になっているが、どちらもどう変わったのか僕は分からない。

サヤも同様だった。

「なんか、見た目あまり変わってないね。」

「うん。そうだね。」

サヤの意見に反応しつつ僕らは支度を済ませる。

もうここには戻ってこないのだから。

シェイは家の外で僕らの支度が終わるのを待っている。

荷物を持って外に出るとシェイが腕を組んで待っている。

「森の入り口まで送っていくよ。」

シェイはそう言うと森へ向かって歩き出した。

僕らもシェイのあとを歩いてついていく。

立ち止まって村のほうを見ると、僕らを見ている人たちが居る。

あの日僕らを笑った人たちだった。

みんな手を振っている。

立ち止まった僕に気がついたサヤやシェイも村のほうを見る。

僕らは手を振った。最後は良い終わり方になったんじゃないかな。そう思っていると、いよいよ森の入り口に着く。

シェイは僕らを見て言った。

「あの日の君たちが懐かしく思うよ。」

そして森のほうを見る。

「今度は戻ってくるなよ。」

「今日まで本当にありがとうございました。」

僕はシェイに礼を言った。

「シェイさん。本当にありがとう。」

サヤも続けて礼を言った。

シェイは僕らを見て最後に言った。

「さあ、行くんのだ。」

僕らはシェイに一礼すると、深き森の中へ入っていった。

森に入っても特に普段と違うことは無い。

鳥の鳴き声が聞こえてくる。

猿も居た。僕らを見てどこかへ消える。

森の中は湿った空気に満たされていた。

だけど、それも森の終わりまで。

僕らは森と森の間に出る。

僕らはそのまま奥の森に入る。

初めて入ったときはここであの猿に阻まれたことを思い出す。

しかし、今はもう怖くない。逃げることもない。

奥の森では一角猪、大蜂やその他の動物が僕らを迎えてくれた。全

然うれしくないけど。

大猿を倒した僕らにはなんてこともなかった。

これから先にあの猿以上のやつが出なければいいんだけど。

そう思っていると。昨日僕らがやつと戦った場所にたどり着く。

そこには昨日のままあの猿は動かず転がっている。

近づいて何かすることも無いので、横目で見つつその場を離れた。

今日は凄く静かだ。

僕は木々の間から漏れる光を見る。

村から大分離れたためなのか、この辺りは木々が密集していない。そういえば、森を抜けた所に村はあるのだろうか。

そんなことを考えながら僕は歩き続けた。

その隣をきよきよと辺りを見ながらサヤは付いてくる。

また動物が出てきるので警戒しているのだろう。

僕は地面を見ながら歩く。

シェイが言ったとおり昼間はあの大猿以上は居ないと思うけど。

まあ、シェイ自身がすべてを知っているとも限らないけど。

そう思ったあとに顔を上げると目の前に何かがある。

「え。」

先に反応していたのはサヤだった。

目の前には真つ黒な塊がある。

しかし、岩といったものではないことは理解できる。

それは、触れてみると明らかに岩とは違うざらざらした感触がするからだ。

ところどころに赤黒い部分があつて、黒い部分が多い中でそこだけが目立って見える。

元がどういう形だったのかはこの状況からは分からないが、生きていたころは動き回っていた動物であることは分かった。

「ねえ、これって大猿よりも危ない動物じゃない。」

サヤは一応分かったようだ。僕に意見を求めてくる。その声は少し震えていた。

大きさは目の前にある塊だけでも、大猿よりも大きい。

しかし、サヤはシェイから大猿がこの森の一番と言われたままだ。

この現状を完全に理解することは出来ていないと思う。

「そうだと思うよ。」

僕はサヤを昨日のことを話した。

「昨日の夜にシェイさんが狩りに行くところを見て森の前まで付いていったんだ。そしたら、昼の一番はあの大猿だけど夜にはもっと危ないやつがいるってシェイさんが言ったんだ。」

そして、僕は黒い塊を見て触りながら思った。

彼が狩ったのだろうか。

「これを狩ったのって。まさか。」

サヤも同じことを考えたらしい。

可能性があるとしたら一人。

シェイが昨日の夜に狩ったやつか。

「シェイさんが狩ったのかもな。」

僕は一応口に出して言った。

サヤは何も言わない。

ただ目の前の塊を見てる。

あの大猿を倒したことによって僕は一瞬でもシェイと同じところまで来たと思った。

サヤも少なからずそう思ったんだと思う。

僕は昨日真実を聞かされていたからこの状況を理解できたけど。サヤはここに来て突然突きつけられた真実だ。仕方ないのかもしれない。

「行こう。早く森を抜けないと。」

僕はサヤの手を取って歩き出す。

サヤは素直に付いて来てくれた。今のところ振り払われることもない。うん。これは進歩ですよ。

僕は空を見上げて思った。

まだまだ上が居るんだ。思いあがっても良いことはない。もっと色々なことを僕らは知るべきなんだ。知らないことが多すぎる。

そして、僕はふと思った。

シェイはこれから僕らが行く場所からこっちに移動してきたんじゃないかと。

大きな川があると言っていたし。そこから西に行けと言ってた。

彼は一度行ったことがあるのかもしれない。

なぜあの時、聞かなかったんだろう。

聞けば何か話が聞けたかも知れないのに。

ひとまず、行き方を教えてくれたのはありがたい。無駄に時間は使いたくないから。

そう思っていると遠くに光が見える。

本当の森の終わりだと思う。

さすがにここでもうひとつ森が目の前にありますとかだったら凄く困る。森が多いことはいいけど。

そう思っている間に僕は森を抜けた。

森を抜ける瞬間、サヤは僕の手をしっかりと握り返した。

森を抜けると海が見えた。

「わぁ海だ。やっと森を抜けたね。」

サヤは僕の手を離して海に向かって走って行ってしまった。

そりゃあ久しぶりの海だから気持ちいわかるけど。

僕はサヤの手を握っていたほうの手を見て思った。

森から抜けたときに切り替えたのかな。

周りを見てみるとちよつと遠いが村らしきものが見える。

しばらく海水に触れたあと、僕らはそこへ向かうことにした。

第十六話 争いのあと

第十六話 争いのあと

2236年 冬 東南アジア

海岸に僕は居た。砂浜の上に座っている。

サヤは一人で海の中に入って、海水に触れている。

防具は脱いでいる。重いし、水に濡らすことは避けたほうがいいとシェイが言っていた。

「カイもこっち来なよ。気持ちいいよ。」

サヤは楽しそうに僕に言った。

サヤは本当に楽しそうだ。

僕も海水の冷たさを感じようか。

ここはひとつサヤへ海水をかけてみようか。

しかし、僕は砂浜に腰を下ろしたまま動かなかった。

何故か海に入りたいという気持ち、今は起こらなかった。

相変わらずサヤは海に入って海水の冷たさを感じているらしい。

小さいころはよくサヤと海に入って海水をかけ合っていたことを僕は思い出す。

サヤとは幼馴染のようなものだ。住んでいた家が近いこともあってよく一緒に遊んでいた。

だから、海と一緒にいって二人で海水をかけ合ったりとよくしていた。

海は危ないという親の認識からどちらかの親が僕らをずっと見ていたけど。

また、近くに山もあって山の中で遊んだり頂上に登ったりした。

頂上からは僕らが住んでいる町が一望できた。

僕はそこでサヤと色々話をしたことを覚えている。

日常のくだらない話から僕らが住んでいる町の話、僕らの両親の話、僕らの遊びの話や僕らの未来の話をしたと思う。

僕らの未来の話とはいっても、大人になるとはどういうことなのかということ話を話し合っていたと思う。

決して、恋愛とか結婚とかといった話では無かったと僕は思っている。

サヤが僕と同じように思っているかは本人に聞いてみないと分からない。

その前に教えてくれるかも分からない。

そういえば、サヤの両親とうちの両親は仲が良かった。あの家を飛び出したあとは、うちの両親とサヤの両親の仲がどうなったかは分からない。

僕は今十六歳だ。サヤはそのいつこ下で十五歳である。

ちなみに、僕は姉さんとは六歳ほど離れている。

もし、姉さんが生きているのなら、今は二十二歳だろう。

義兄も同じく二十二歳になっているはずだ。

二十二歳になった姉さんや義兄さんは今頃どこでどうしているのだろうか。

僕はそう思いながら、何時の間にか空を見ていたらしい。

ふと、サヤが居るほうを見ると砂で何か作っていた。

お砂遊びというものを始めたらしい。

いや、さすがにその歳で砂で何かを作り出そうとするのはどうかと思った。

だけど、それは自分の勝手な考えだとすぐにわかる。

これは大多数の人間が勝手に決めた決まりゴトのひとつなのだと思う。

みんながこうしているから自分もこうしなければいけない。
そのように思うことは大きな間違いである。

それを決めたのは大多数の意見であり、それがあたかもすべての人間の考えであるかのように彼らが決定付けているだけのことである。大人が砂遊びをして何が悪い。

自分はまだ大人ではないが、その点は気にしないことにする。
だから、僕はあえて自分からサヤの元に行って一緒に砂遊びを始めた。

僕らは海から離れた近くの村へ向かっていた。

海水に触れた肌がひりひりする。

僕はサヤとの砂遊びのあと、そのままサヤと一緒に海に入ってしまった。
った。

砂遊びまででやめておけばよかったものの、海に入ってしまったためにこんな状況である。

しかし、僕はこの結果に後悔はしていない。

自分も少し変わったような気がした。

僕らは村に着いた。

目に見える範囲には人影は見当たらない。

ひとまず村の中心のほうまで行ってみることにした。

歩きながら左右にある建物を見ていくも誰も居ない。

僕らが外から来た人間だから、警戒して外に出てこないのか。

僕はそう思った。

「なんか、誰も居なくて怖いね。」

サヤの言葉に納得する。

僕は立ち止まって周りを見渡す。

この村には誰も居ないのか、それとも僕らのことを警戒して誰も出

てこないのか。

さすがに、村の人間が警戒しているのなら小さい子が勝手に飛び出してきたりして、あわてて親が奥に引き戻すといった状況を見ることになるかもしれない。

小さい子は何を考え出すかわからない。

本当に自由ということなんだろうと思う。

「どうしたの。大丈夫。」

その場で周りを見回す僕をサヤは心配して話しかけてくれた。

「大丈夫だよ。村の中心に向かおう。」

僕はそういつて先を急いだ。

僕らだけしか居ないことはいいんだけど。

誰かが居るべき場所に誰も居ないのは本当に怖い。

僕らは村の中心に辿り着く。

そして、僕らはやっと理解した。

彼らはこの村に初めて来た僕らを警戒していたわけではないことを。

サヤは僕の手を握ってくる。

彼らは死体となって、村の中心に集められていたのだ。

よく見るとほとんどが男性で、子供も含まれている。

みんな何も着ていない。裸だ。

サヤはこの光景を見た後、一度も言葉を発していない。

僕も同様にこの状況に何も言えなかった。

なぜこのようなことが起こったのか、理由はわからない。今は語る

ことの出来る人間が居ないようだから。

ここに居る死体が男性のものばかりなら…。

僕は周りを見回す。

この村を襲ったやつらが今はどこに居るのか、どんな集団なのかはわからない。

だけど、少なくとも僕は彼らに憎しみを感じた。

「酷いよな。本当に。」

自然と口から出た。僕は本心からそう思っているらしい。

「うん。なんでこんなことをするんだろ。」

サヤが僕の言葉に続ける。

その声は低く。サヤ自身が今にも消えてしまいそうに思えた。

僕らは彼らに手を合わせると、その村をあとにした。

僕らは、何も出来ないことがこんなにも辛いことだとは思わなかった。

第十七話 時をこえて

第十七話 時をこえて

2237年 春 ロンドン

私は外への階段を上っていた。

扉を開けると、私の元で働く沢山の兵士たちが忙しそうに行き交っていた。

ある者は敬礼をする余裕を持ち、またある者は敬礼する暇すら無いほど忙しそうに動いている。

施設の周りには今や複数の建物が建てられていた。

それは自分たちが住む場所、施設から取り出したきおくを整理してまとめる場所や会議をする場所である。

ほかにも色々と建物はあるが、あえて言う必要の無いものばかりである。

私が今出てきた施設から何人か兵士が紙を持って出てくる。

彼らは施設のきおくを運搬する役目を持つ兵士たちだ。

施設内にきおくを書き留める係、書き留めたきおくを整理する係やきおくが書かれた紙を運ぶ係が居る。

紙を運ぶ係がこの島に来る我が国の船にきおくの書かれた紙を載せる。

あとはその船がきおくをわが国に運んでいってくれる。

私は腕を組んで、扉の傍で兵士たちが行き交う姿を私は見ていた。

「カール大尉。ここに居たのですか。」

声がする方向へ振り向けばテリーが居た。

そういえば前もこういう事をテリー言われなかったか。

私がどこにいるかわからないということか。

「それで何か用か。」

私はテリーを見ずに言った。

そのあとすぐにテリーを見た。

「大尉、教えてほしいことが沢山あります。特にこの施設について。」

「テリーはそういうと施設の扉を見た。」

「テリーの気持ちはわかる。ここに居る大多数。いや、私以外の人間はこの施設のことについて殆ど知らないだろう。」

「きおくさえ運んでいればお前たちは良いんだ。」

「だが、テリーに教えてもいいだろう。」

「付いて来いテリー。この施設について教えてやる。」

「はい。」

私はそう言うつと施設の中へ入っていった。

「テリーも返事をして、その後を付いて来る。」

「階段を降りきると、私はきおくがある部屋へ何も言わずに歩いていった。テリーも何も言わずに付いて来る。」

「中ではきおくを書き留める係が慌しく作業をしている。」

「ここは実際にきおくがある部屋だ。」

「部屋の一面に巨大な画面が付いており、その下に人の手形のマークが付いた台がある。」

「きおくを書き留める係が今はその台に自分の手を置いてきおくを画面に出している。」

「台に手を置いた人間の见たいものが画面に表示される。」

「それは、ひとつではなく複数の画面に分割して同時に表示することが可能である。」

「私が試した限りでは、画面を九分割まで出来ることがわかってる。また、このきおくの中にはこの施設自体のことも書かれていた。」

「このきおくを取り出す装置を含む施設自体は永久機関と呼ばれるものらしい。」

「ようは、永久に動き続けるということだ。」

「昔の人の技術は凄いものだと思う。」

故に過去のすべてのきおくは永久に残り続けることとなる。
とは言っても、あの戦争以前のきおくしか無いようだ。

今のことを記録する方法はきおくにはかかれて居なかった。無理なのかもしれない。

ここまでテリーに話すと私は部屋の隅にある小さな扉を自分の持っている鍵で開けた。

テリーは私の言葉を聞き逃さないように黙っている。

小さな扉を開けた私とテリーは螺旋階段を下りていく。

しばらく階段を下りるとそこには大きな扉があった。

この扉も私が持っている鍵で開ける。

この鍵はあの親子が持っていたものだ。

これが施設を守る人間が持つ鍵。今では私の手の中にある。

部屋に入ると中心には球体の玉とそれを囲む輪があった。それらは回っている。

「これがこの施設の心臓だ。」

私はテリーに言うと、施設についての説明を続けた。

きおくにはこの玉を割ると施設が停止することが書かれている。

しかし、その方法は書かれていない。

また、玉と輪の外側には透明で弾力のある膜が覆っている。私が試しに剣で突いてみたが、その程度では破れなかった。

この施設は過去に複数あったらしい。

それは記録ではあの戦争に参加しなかった国とイギリスだ。

しかし、今ではこの島にある施設のみとなってしまった。

誰かがほかの施設を壊したのか、壊したとするのならこの膜を突破したということなのだろう。

きおくにその方法が無い以上この施設は我々では壊せない。我々に壊せたとしても、壊すときはいつかだ。今じゃない。

なぜ、この場所にきおくがあるのか。

そして、なぜこの島は何も無い島だと思われているのか。

答えはこうだ。

あの戦争が始まる前にそれまでのすべての記録をこの島の施設を含むそれぞれの施設にきおくとして収めた。

中立国のみに作る予定だったが、ひそかにイギリスに施設を作らせた。

自分たちの国に作ったら、外国の国が何か言い出しかねない。

それぞれが力を持つとうとするんだから仕方ない。

我が国は戦争が終結後の混乱に乗じてイギリスに爆弾を落としたらしい。

ようは最後は仲間を裏切ったということだ。

施設自体が地下にあったことと、あっさりこの島を瓦礫だけにすることができたため。

施設への影響は無かった。

これでこの施設を知るものは居なくなつた。

もし居たとしても、島に爆弾を落としたのだから、その中で施設が残っているとは考えていないだろう。

すべてが終わつたあとに、施設を見張る人間を配置した。

何時か再び争いが起きたときに、どの国よりも強くあるために。

そして、きおくを私たちだけのものにするために。

そして今まできたんだ。

しかし、色々とあつた。

あの親子の不審な動き。その回数が増えるにつれて我々も不安になつた。

我々の行動に対して彼らなりに抵抗したらしい。

だから、私たちが直接この施設を占拠してきおくを引き出すことにした。

我々に歯向かう人間が居るのなら、消すまでだ。

テリーにはこの国を裏切ったことは言わなかった。

戦争時に敵国からの侵攻でこのようになったと言つた。

我々が一緒に戦つた国の人間たちを殺したことは事実だ。

しかし、それはテリーたちには言えない。

絶対に。

私たちはもう戻れないんだ。

第十八話　大きな川

第十八話　大きな川

2237年　春　南アジア

動く人間が居なかったあの村から僕らは西へと進んでいる。

今は左側は海岸、右側は山に挟まれた道を進んでいる。

隣を見ると、サヤが背伸びをしている。

長いこと歩き続けているからだろう。

この辺りで休もうか。

「この辺りで一度休憩しよう。」

僕はサヤにそういうと近くに荷物を置いて自分も背伸びをする。

僕らは座った。海からの風が頬をかすめる。

空を見上げれば太陽が雲の間から顔を出している。

雲が多い。雨が降るかもしれない。

休憩したあと。僕らは西へ再び歩き出す。

「あ、村だ。」

先に気が付いたのはサヤだった。

遠くに村を発見したのだ。

前のように誰も居ませんでしたという事になっていないように、今

は祈りつつその村へ僕らは向かった。

僕は歩きながら、ふとその村のもっと奥を見た。

それを見た僕は立ち止まる。

サヤがどうしたのかと聞いてくる。

そこには大きな川があった。

大きいのはかまわない、かまわないのだが。

「あれを渡るのか。」

僕は無意識のうちに口に出していた。

僕が見ているものを確認すると。

「そうみたいね。」

サヤは僕に言った。

大きな川はこれまでの旅で何度か見てきたと思う。

しかし、最近ずっと森の中に居た僕には。

少なくとも僕には驚きがあった。

久しぶりの川だからだろうか。

そういえば、シェイが言っていた大きな川とはこの川のことなのだろうか。

ならばこの川を渡ったら、西へそのまま進めばいいんだろう。

僕はサヤのほうを見る。

「村へ向かおう。あの川を渡る方法を調べないと。」

僕はサヤにそう言つと川の近くにある村へ歩き出した。

村へ入ると人々が騒がしく村の中を行き交っていた。

それほど住んでいる人間は多くはなさそうだが、それでも人が居るだけ良かったと思うことにした。

村に入ると、やっぱり村人はよそ者を見る目で見てくる。

まあ、仕方ないさ。よそ者なんだもの。

僕らは村の中を歩いていると、魚を扱っている店を発見する。

近づいて見てみると色々と見たことの無い魚が多い。

「おう、兄ちゃん姉ちゃん。この辺じゃあ見かけないね。どっから来たんだい。」

店主らしい男が僕らに話しかけてくる。

何時もこういう感じで客に対応するのだろうか。

「はい。東のほうから。」

僕は店主に答える。

「へえ、そうなんだ。どこかへ行く途中かい。」

「西のヨーロッパ連合王国のほうへ。」

サヤが僕の代わりに答えた。

「ほお、そうかそうか。そこへ行く旅の途中ってわけだな。」

僕は頷く。

「なら、あの川を渡るんだな。」

店主はそう言つて、何やら何度も頷いている。

「そうそう、この店にある魚つてのはな。あの川で獲れたやつなんだ。うまいぞ。」

最後は店の宣伝らしい。適当に聞いてその場を離れた。

なんかじめじめする。湿気が多いのか。

この地域はこれまでもじめつとしていたため、特に気にはしなかった。

何気なく空を見上げれば怪しい雲が空を覆つて来ている。

「雨が降り出すかもしれないな。」

僕はふと言つてみた。

そして、気が付いた。雨が降つたら川を渡ることが出来ないんじゃないかと。

「急いで川へ向かおう。」

僕はサヤに言つと。サヤの手を取つて川のほうへ走り出す。

川を渡るための船があるだろうと思つた。

実際あつたが、その船に近づいたとき雨が降り出してしまった。

船を動かす人たちに、僕らを乗せて向こう岸まで連れて行って欲しいと言つてみた。

「連れて行つてやつてもいいが、この雨がやんでからだな。村へ戻つたほうがいいぞ。」

僕らはその船の持ち主らしい人からそう言われた。

その人は僕らがさっきまで居た村の人らしく、名前を教えてもらつ

た。雨が止んだらもう一度ここに来るように言われた。雨が降っているこの状況でこれ以上進むことが出来ないと分かったので、僕は村に戻ることにした。

村に戻っても行くあては特に無い。

途方にくれていると、魚を扱っていた店の店主が、僕らの前にやってくる。

「おいおい、こんな雨の中であの川渡ろうとしたんじゃないよな。無茶だぜそれは。」

店主が言った。

魚を扱っている人間だ。しかも川の魚を扱っている以上川のことは良く分かっているんだろう。

「二人とも今日の泊まるところ決まってるだろ。うちに来な。」

店主はそう言う僕らを自分の店の奥の住居に招き入れた。

奥では女性が忙しそうに何か作っている。

「あいつはうちの女房だ。」

店主は頭を掻きながら言った。

店主の奥さんはこちらに気が付くと笑顔で応えてくれた。

「この辺りの雨は二、三日降るってこともある。雨が止むまでここに居るといい。」

食事を終えた僕らに店主は言った。

「そんな、ありがとうございます。」

サヤが店主の言葉に応える。

店主の奥さんが作ってくれた料理はすごく美味しかった。

知らない魚も美味しく料理すれば、元がどんな魚でもいいと思えた。さすがに、毒があったり食べると良くない魚は除くけど。

「そつえば、お二人はどちらへ。」

店主の奥さんが僕らに聞いてきた。

「西のヨーロッパのほうへ。」

サヤが応える。まあ女同士のほうが会話はいいんだろうな。

そこで店主が口を開く。

「そうか、西に行くのか。だったらあの川を渡ったらそのまま西を通って行ったほうがいいな。」

「ええ、そうですね。」

僕は店主の言葉に礼を言いつつ考えた。

やっぱり、シェイはこの辺りのことを知ってるということか。

だったら彼はその先の何処へ…。

考えはその辺りで終わりにした。

今更知ってどうなるかという、どうにもならないからだ。

「そうそう、川を渡って西のほうにしばらく行くと町がある。川の傍にある町さ。」

店主が僕らに言った。そして続ける。

「お前たちは東のほうから来たんだろ。だったら、その町を通っていくのも悪くないぞ。」

「なんとという名前の町なんですか。」

僕は店主の話に質問をする。

「えーっとなんだったっけかな。」

店主は頭を掻いて仕切りにうんうん言っている。

何か言わないとこのまま続くと思った。

「わからないならいいですよ。」

だから、僕はそう言った。

「済まない。名前は忘れちゃった。だけどその町の傍を流れている川は聖なる河って呼ばれているんだ。」

店主はそれだけを言った。

「聖なる河か。」

僕はその名前を口にして、サヤを見る。

「面白そう。その河を見に行きましょうよ。」

サヤは行く気があるらしい。

西へ向かう途中にある町なのだから、行ってみてもいいだろう。
そのあとは僕らと店主と店主の奥さんの四人で色々と話していた。

三日後に雨は止んだ。

約束通り川へ向かうと三日前に話をした人が待っていてくれた。
僕らはその人たちが動かす船でこの大きな川を渡った。

第十九話 成果

第十九話 成果

2237年 春 南アジア

あの大きな川を渡ってから僕らは西へ向かっていた。

川を渡ってしばらく歩くと村を発見した。

とは言っても、遠くに見える程度だけ。

ひとまずその村へ行ってみることにした。

相変わらず左を見れば海、右を見れば森である。

このまま西へ行つたとして、聖なる河へ辿り着けるのだろうか。

辿り着かなければいけないわけではないが、行ってみたいと思った。

これから行く村の人に聞いてみよう。

僕らは目の前に見える村へ向かった。

僕らはしばらくして村に辿り着く。

村には沢山の人間が居た。

みんな歩いて村の中を行き来している。

しかし、みんなぐったりしているように見える。

一人の老人が僕らに話しかけてくる。

「た、たべものを。たべものをくれえ。」

両手を僕らに向けた老人は、そう言つて僕らにしがみついて来る。

それを見た若い女性が近づいてきて僕らから老人を引き剥がした。

「やめなさいって。ここに来た人がみんな食べ物を持っているわけ

じゃないでしょう。」

その女性は、なおも僕らにしがみ付こうとする老人を無理やり引き剥がして僕らから遠ざけていく。

老人は僕らに何か叫んでいたが、何とっているのか聞き取れなかった。

遠ざかる老人を横目に村全体の状況を再度確認する。

みんなぐったりとしてはいるものの立って歩いている人ばかりだ。座って建物に寄りかかっている人も何人が居る。

「食べ物……」

僕は口に出してみて考えた。

食べ物が無いということは何故だろう。

海と森に囲まれた場所だ。

同じような環境である僕らの住んでいる場所ならどちらからも食料が手に入る。

僕らの住む場所とは何が違うのだろうか。

「みんなおながが空いているのかな。」

サヤの言葉を聞いて、自分で考えることをやめる。

「そうかもな、けどなんでだろう。周りには海も森あるのに。」

僕は口に出して言った。

「どちらも食料が取れないのよ。」

声がしたほうを見ると、先ほど僕らから老人を引き剥がした女性が立っていた。

「さつきはごめんなさいね。食べ物があれば彼もあんな風にはならないのに。」

そう言つて、先ほど老人を連れて行つたほうを見る。

そして、僕らのほうを向いて言った。

「私はサティ。この村に住んでいる一人よ。」

彼女の自己紹介を聞く。

「僕はカイです。」

「私はサヤ。」

僕らもそれぞれ名前を言っていく。

サティはぐるりと僕らの周りを回り始めた。

「へえ、あなた大きな剣を持っているのね。こんな大きな剣を何に

使うの。」

サティは僕にそう言った。

「今のところは動物を狩る時に使います。サヤの持っている武器もそうです。」

「へえ。」

僕の答えにサティはサヤのほうの武器を見て、ぐるりと僕らを一周して元の位置に戻った。

「そういえば、何故食料が取れないのですか。」

僕はすぐに質問を返す。何故なのか知りたかった。

海なら魚が釣れるだろうし、森なら食べられる動物が居ると思う。

実際に居るかどうかは分からないけど。

「それはね。海には人を食う魚が居るからよ。船の底に穴を開けて沈没させるの。」

あれ、前にそういう魚を見なかったつけ。

「こつちの大陸に渡るときに私たちも襲われました。」

サヤが言っていた。顔色は良くない。

あれはこの旅で初めて生死に関わったときだ。

あの魚と同じ種類の魚が居るといふのなら海に船を使って出るのは危ないな。

「そう。だから、陸から一本釣りをするしかないの。」

「なら、森のほうはどうなんです。森なら食べられる動物が少しぐらいは居るのでは。」

サティの言葉に僕は返した。海がだめなら森だ。さすがに、森の入り口の辺りにはそれほど厄介な動物は居ないだろう。

いや、僕はそう思いたい。

「前も今も食料にしている動物は森の入り口近くに居るの。だけど最近凶暴なやつが森の入り口に現れるようになってね。海のほうと合わさってお手上げ状態なのよ。」

「そうですか。しかし、魚と森に居る動物の肉だけでこの村は大丈夫なんですか。」

僕はサティの言葉への疑問を投げかける。

「こつちへ来て。」

サティはそう言うと言われ場所を連れて行った。

そこは田んぼらしい。お米を育てているのだ。

ほかにも野菜を育てているらしい。

「お米や野菜は育てているの。だけど、それだけじゃ足りないのよ。」

サティは僕らを見て言った。

確かにお米や野菜はある程度の安定した食料を供給してくれる。

しかし、それは長期的な計画によってもたらされるものだ。

「だから、あなたたちに森の入り口に居る凶暴な動物を狩って欲しいの。」

サティは僕らを交互に見ながら続ける。

「見たところ、それなりに狩りをしてきたように見えるから。」

「それなりか。」

僕はサティの言葉にふとシェイのことを思い出す。

あの森で僕らはシェイと一緒に狩っていた。

その先に待っているもののために。

これもその一つなのかもしれない。

僕はそう思うことにした。

「仕方ないな。」

僕はサヤのほうを見ながら続ける。

「サヤ。手伝おう。手伝わないとここでは飯が食べないかもしれない。」

サヤが僕のほうを見る。

黙って前を向く。考えているようだ。

サヤは再び僕を見ると。

「そうね。手伝いましょう。」

そう僕に言った。

サヤも同意してくれたようだ。

「手伝います。」

僕はサティに言った。

人が困っているんだ。助けたほうがいいだろう。

森の入り口に居る動物がなんなのか分からない。

あの大猿よりも強いやつかも知れない。

それでも、これでいいんだ。

助けられないで、辛い思いをするよりは良いんだ。

第二十話 収穫

第二十話 収穫

2237年 春 南アジア

今僕らは森の前に居る。

僕らが彼らの言う凶暴な動物とやらを退治することを約束した後、何人かはそれぞれ動物を狩る道具を持って僕らに付いてきた。

村が出る前に、サティは僕らが狩る動物について教えてくれた。

その動物を見た人間の話では、熊らしい。

ふと、村人たちの顔を見るとやる気満々のようだ。

だったら村人たちだけで大丈夫じゃないのか。

いや、大丈夫なら僕らに頼まないよな。

彼らに見えているのは、僕らが凶暴な動物を倒した後に残る動物たちだろう。

僕は手のひらを見る。その手を握るとその場に居る全員に言った。

「今から僕らが、あなた方の言う動物を狩ってきます。それまでここに居てください。」

正直村人がいたところで邪魔になるだろう。

相手が強いならなおさらだ。下手に死なれても困る。

僕らはそれだけ言っと、森の中へ入った。

森の中は静かだった。辺りを見回せば豚に似た動物がうつついている。この動物が村での食料なのかもしれない。

どこかで草木の擦れる音が聞こえる。

僕らは周りを見ながら剣に手をかける。

奴が僕らに気が付いたのかもしれない。

さてと、どこだ。どこに居るんだ。

僕は耳を澄ます。近づいているのなら音で分かるはずだ。

サヤは僕の行動を理解したのか、音を立てないように周りを見ている。

その時、何かが地面に落ちた音が背後から聞こえる。

素早く後ろを向くと、奴が居た。

その姿は熊と言えば理解しやすいが、熊より機動性に優れた動物だとすぐにわかった。

なぜなら、奴の手足が異様に長い。

手長熊という名前が合うだろう。

さっきの着地らしき音から、手長熊は木の上に居たようだ。既に熊じゃないんじゃないか。

そんなことを僕が考えていても相手が行動を停止するはずも無い。

手長熊は一度吼えると僕らに飛びつこうとしてきた。

僕らは素早く両側に避ける。

手長熊は跳べるらしい。身軽な奴だ。

僕らはそれぞれ奴から距離を取る。

「どこが熊なのよ。」

サヤが叫ぶ。その気持ち察するよ。

誰なんだ。こいつを熊だと言った奴は。

しかも手長熊はこっちに向かって突進してきた。

この状況で奴に攻撃を加える方法があるなら。

これしかない。

僕は武器に手をかけると、突進してくる手長猿に自ら突進していった。

お互いがぶつかる直前に、僕は右側に避けながら剣を振り下ろす。

手長熊はそのまま僕の剣に突進する形になった。

手長熊の体には僕の剣の痕が刻まれていく。

手長熊は悲鳴を上げる。それは低く大きい悲鳴だった。

僕の剣が手長熊から離れたあと、今度はサヤが剣で斬りつけ始めた。

手長熊の振り下ろす前足を避けながら胴体と後ろ足への攻撃を加えている。

僕は、サヤの攻撃でよろめいた手長熊へ大剣を振り下ろした。奴は大きく悲鳴を上げる。

僕は素早くその場から離れる。

手長熊はよろめいていた。

これなら大猿よりも早く終わりそうだ。

再び奴に攻撃を加えるべく、サヤが斬りつけ続けている手長熊のところへ向かう。

そして、剣を大きく振り上げながら僕は言った。

「これで終わりだ。」

しかし、それは叶わなかった。

振り下ろすよりも早く。奴は空高く跳び上がって木につかまった。

「えっ。」

サヤは一瞬何が起きたのか分からなかったようだ。

上を見上げて、やっと理解できたらしい。

忘れていた。奴は木の上から落ちてきたんだ。

危なくなったら木の上に戻ればいいだけのことが。

僕らは剣をしまった。

「さてと、どうする気なんだ。」

木につかまった手長熊を見ながら僕は言った。

こういう時に弓を扱える奴が居れば助かるんだけどな。

奴が降りてくるまで待つか。

僕がそう思ったとき。奴の体に弓矢が刺さった。

手長熊が木から落ちてくる。

落ちたところへ向かいつつ、矢が放たれたであろう方向を見る。

そこにはサティが弓を持って立っていた。

彼女は手長熊に近づきながら矢を打っていた。

その顔は怖さを押し殺しているようだった。

僕らも木から落ちた手長熊に剣を振り下ろす。

悲鳴を上げながら暴れだす手長熊。

僕とサヤは振り下ろされた前足に当たって飛ばされる。

「きゃ。」

サヤは小さく悲鳴を上げる。

そんな手長熊へ遠距離から攻撃を加え続けるサティ。

手長熊は、今度はサティに攻撃を加えようとして近づいていく。

サティは矢を打ちながら下がっていく。

僕とサヤは立ち上がると、手長熊に走って近づいていく。

その勢いで僕らは剣を振り下ろした。

手長熊は大きく低い悲鳴を上げると、その場に倒れて動かなくなつた。

「た、倒したのか。」

剣をしまった僕は言った。

「そうみたいね。」

手長熊に近づいて見ているサヤが言った。

「二人ともご苦労様。」

サティが僕ら二人に言う。

サティが何故ここに居るのか、なぜ弓を持って戦いに参加してきたのか。

聞きたいことは色々ある。

ひとまず、村へ戻ろう。話はそれからだ。

僕らは森を出ると待っていた村人に説明する。

すると彼らはすぐに森の中へ入っていった。

村に戻ると、サティは僕らをその中の一つの家へ招き入れた。

サティの住む家らしい。

サティと僕らが座ると、サティが口を開いた。

「あの熊を倒してくださって、ありがとうございます。」

「いや、サティさんも参加していたじゃないですか。」

僕は言う。何故あそこにサティが居たのか。

「私はね。あの森で狩りをする人間なの。だけどまだ新人。」
サティは僕らに言う。そして続ける。

「私の前に居た人が狩りをしていたときは森の入り口まであんな動物がやってくることはなかったの。だけど、その人がこの村を出て行っちゃって。だから、私がこの村に呼ばれたの。」

サティはそこで一呼吸置くと続けた。

「私が扱うのは弓。そしてほとんど素人。最初はなんとか狩ることが出来たけど。森の奥であの手長熊は倒せなかった。だからなのか、奴は森の入り口まで来て居座るようになったの。」

「それで、森から食料が取れなくなって。そして、通りかかった僕らに頼んだと。」

僕はそう言っただけで理解しようとした。

「そういうことよ。見るからに強そうな格好だったからね。」

サティは僕らを見て言う。

「そうだったんですか。」

サヤも理解したようだ。

「けど、僕らは西へ向かわなきゃならないんです。これからあなた一人で狩らなければいけない。」

僕はサティに向かって言う。サティは下を向いて言った。

「分かってるわ。何時か自分一人であの手長熊を倒せるようになって、この村を守ってみせる。」

そっぴいといふとサティは僕らを見た。そして続ける。

「そっぴいえばあなた達、西へ行くって言ったけど。具体的にどこへ向かう予定なの。」

「次の目的地は聖なる河の傍にある町なんですけど。」

僕はサティの質問に答える。

最終的な目的地を言うつより、次に向かう目的地を言ったほうがためになる。

サティは何度か頷いて言った。

「そう。それはバナナシのことかもね。村を出てしばらくすると分かれ道があるから、右へ続く道を選んで進むといいわ。そうすればバナナシへ行ける。」

「そうですか、ありがとうございます。」

僕はサティに礼を言った。

サティの家を出ると、森に居た動物を背負って村に入ってくる村人を見た。

うまく食料を調達できたらしい。

「わあ。お肉お肉。」

サヤがはしゃいでいる。

「あの。」

僕は背後からの声で、すぐに振り向く。

声の主はサティだった。そして続ける。

「よかったら、獲れた肉で作った料理を食べてみてください。手長熊を倒してくださったお礼です。」

「いや、そんなお礼なんて。」

僕はそう言うものの。

「お肉、お肉。」

サヤはそれしか言わなくなっている。

もう選択肢が決まっているようだ。

「では、お言葉に甘えて。」

僕はサティにそう言った。

僕はサティの作った料理を頂いた。

しばらく落ち着くと、僕は村を出てバナナシへ向かうことにした。

第二十一話 襲撃

第二十一話 襲撃

2237年 春の終わり 某所

薄明かりの中で、グランはぐるぐると円を描くように回っていた。グランは焦っていた。

カールから依頼を受けた後、未だに目標を見つけることが出来ていないのである。

部下の力の無さか、自分の力の無さか。それ故にグランはその場を回り続ける。

回ったからといって、何か変わるわけでもない。しかし、回らないとやっていられない。

「お頭。そんなに回ったら目を回しやすぜ。」
心配になったグランの部下が言う。

「うつゝむ。」

グランは部下の言葉で立ち止まるも。考え込んだまま。しきりに岩の天井と床を交互に見ている。

「まだ、見つからないのか。」

グランは傍にいた部下に言う。

その声は力のないものだっただ。

「お頭。も、もう少しです。もう少しで奴らの居場所が特定できやす。」

部下はグランへの励ましも含めてはつきり言った。

「そうか。」

グランの視点は定まっていなかった。

これほど見つけれないとは予想していなかったのだ。

「お頭。休んでください。」

部下の言葉に、力なく頷く。

「悪いが、後は頼む。」

「へい。」

グランの言葉に、部下は元気に答えた。

グランは自分の部屋へと戻ると、そのまま堅いベッドに倒れこんだ。

グランは目を覚ます。

どのくらい経っただろうか。

そんなことも、この部屋では分からない。

周りが岩で出来ているからである。

光は人間が持つてくるしかない場所だ。

今は時間としてどのくらいなのかを知るため。

グランはランプを持って外へと出ようとする。

寝起きの頭は正常な行動を起こすことが出来ず、体を左右に揺らし、てゆっくりと外への通路を歩く。

周りを見ても、グランの持つランプからの光しか見えない。

外へ出ると、東の空が明るくなり始めていた。朝早くようだ。

グランはランプの火を消して、アジトの入り口に置く。

岩とぶつかった金属が音を響かせる。

グランはその場で背伸びをした。

海からの風が、グランの体を優しく撫でる。

グランは入り口近くに座ると、目の前の海をただ見つめ続けた。

気が付けば、太陽が昇っていた。

「また今日が始まったか。」

グランは太陽を見て言った。

「お頭。」

グランは、声をする方を見る。

部下が走ってこちらに向かっていた。

「なんだ。」

グランはそう言いながら、海のほうを見ている。海は穏やかだ。

「奴らが見つかりました。」

部下の言葉を聞くと、グランは素早く部下のほうを向いた。

「そうか。」

グランは素早く立ちながら言った。

「すぐに準備しろ。向かうぞ。」

部下にそう言うと、自分は自分の部屋へ戻っていった。

部屋に戻ったグランは、愛用の棍棒を手取る。

この棍棒は金属で出来ており、所々におうとつがある。

準備を終えて外に出ると、外には三十人ほどの人間が集められていた。

グランが出てくると、みなはグランを見つめる。

グランは集められた全員を見ると言った。

「あの日からずっと探して来たやつらがやっと見つかったんだ。」

そこで一呼吸置いて続けた。

「とつとと終わらせるぞ。行くぞ野郎ども。」

グランの声に、集まった部下たちは声を張り上げた。

それから、彼らは船を使ってカールの言っていた敵の居る大陸へと向かった。

グランたちが行列をなして進む様子は、これから悪いことが起こるのではないかと周囲に思わせた。

大陸に渡って数日経つ。

搜索した部下の話ではカールの言っていた辺りを重点的に探したらしい。

しかし、なかなか見つからない。

目印が親子であることも搜索の難しさを上げた。

いくつかの集団を見つけたものの、それが目的の集団なのかは目印を見つけるまでは分からず。

逆に居ないという確実な証拠を得ることも困難だった。

情報が無さ過ぎた。地域が限定されていなければほぼ見つけることは不可能だろうと思えてくる。

右手に見える海を見ながらグランたちの一団は目的地へ向かった。森があれば入っていき、動物を獲て食料の足しにした。

さらに数日経つ。

目的地近くまでグランたちの一団は来た。

右を見ればロンドンのある島が見える。

グランは立ち止まってその島を見る。

今はどうなっているのだろうか。

終わったらあそこへ行ってみようか。

その気持ちでグランの中に現れる。

「お頭。どうしました。」

部下の声でふと我に返る。

「いや、なんでもない。行こう。もうすぐだ。」

グランは今すべきことを優先した。

全ては終わってからで十分なのだ。

しばらく歩くと、案内をしていた部下が久しぶりに口を開く。

「お頭。あの建物です。」

グランは部下の言う方向を見る。

「あれか。」

二階建ての建物らしい。

グランはしばし見つめていると、誰か屋上に居ることが確認できた。しかし、すぐに消える。

グランは部下たちのほうを振り向く。

「私自身が確認してくる。お前たちは建物の前で待て。」

「へい。」

部下はそれぞれ言うとグランの後ろを付いていった。
建物の扉が開けられる。

中には十数人の武装した集団が居た。

「なんだお前たちは。」

相手の一人が言った。

そして、気が付いた全員が武器を構える。

グランは反応せず、素早く目印の親子を探す。

部屋の奥のほうに、父親と娘らしき二人が居た。

「当たり前だな。」

グランは自前の棍棒を肩に乗せて言った。

それと同時に、グランの部下の何人かが建物内に入る。

「お前たちに恨みはねえが、ここで死んでもらおうか。」

グランは建物に入りながらそう言った。

第二十二話 間違い

第二十二話 間違い

2237年 春の終わり ヨーロッパ

みんなぐったりとその場に倒れていた。

私とセイジやルイスたちは、船の襲撃を試みたものの前回のようにはいかなかった。

失敗して、逆に痛手を負ってしまったのだ。

仲間が何人も死んだ。

アジトに戻っても特に何もする気が起きない。

無力感が建物内の空気を支配する。

ルイスだけは見張りで屋上に居る。

それ以外は、みんな何かに寄りかかって死んだような顔をしている。相手が強大になっていることを考えず戦いを挑んでしまった。

自らライオンの檻に入っていく牛のようだ。

「これからどうしようか。」

セイジはテーブルから頭を上げて言った。

「今の俺たちじゃあ。もう無茶だ。」

それを聞いていたレイが答える。

何もすることが起きず。ただみんなその場に居るだけである。

「何か方法があればいいんだけど。」

私はふと自分に言ってみた。

セイジがそれを聞いて、私のほうを見て強く言った。

「方法なんてあるか。」

椅子にもたれらると続ける。

「やっぱり無茶だったんだ。」

セイジの目は何を映しているのかまったく判らなかった。

「もっと仲間が多ければなあ。」

レイがぼそつと独り言のように言う。

そうだ。もっと仲間がいれば現状も変わるかもしれない。

しかし、どこに仲間が居るの。あてなんて無いよ。

大きな集団が仲間に入ってくれればいいけど、そんな人たちが協力してくれるだろうか。

このままでは、施設奪還なんて夢のまた夢。

今は休もう。頭を休めれば何か思いつくかもしれない。

誰かが階段を勢い良く降りてくる。

その音で私は目が覚めた。

「おい、よくわからない奴らがこの建物に近づいているぞ。」

ルイスの声にみんなはゆっくりと体を起こすが現状を把握しきれていない。

再度ルイスはみんなに言った。

「だから、敵が来たんだよ。」

ルイスの言葉にみんなは状況を把握できたらしく、みんなそれぞれの武器を持って扉を見た。

建物の扉が開かれた。

扉を開いたのは大男で、片手には大きな棍棒を持っている。

「なんだお前たちは。」

扉の近くに居たレイがその大男に言った。

しかし、その大男はレイの言葉を聞き流して部屋の中を見回している。

何かを探している。まさか。

彼の目が一点で留まった。

彼の視線の先を追う。その先には親子が居た。

「当たり前だ。」

大男は棍棒を肩に乗せて言った。

それと同時に大男の仲間らしい人間たちが扉から建物内に入ってきた。

「お前たちに恨みはねえが、ここで死んでもらおうか。」

大男は建物に入りながらそう言った。

「お前たちと戦う理由が何処にある。」

レイが大男に言う。

「うるさーい。」

大男が大きな声で答えた。

大男は肩から棍棒をおろす。

そして私たちに近づいてきた。

「お前たちはカールを」

大男はそういうと自前の棍棒を振り上げる。

「殺したいんだろ。」

そう言いながら大男はレイめがけて棍棒を振り下ろした。

鈍い音がする。

レイは自前の棍棒で大男の棍棒を止めた。

「うんぐつ。」

大男の力は凄いらしく、レイは押されていた。

「違う。俺たちはカールを殺したいわけじゃない。」

セイジが大男に叫ぶ。

「うー。うりゃあ。」

大男はレイを棍棒で押し切った。

レイは地面に倒れた。

大男は、すぐに歩き出す。

「じゃあ、お前たちは何が目的なんだ。」

大男はそういいながら今度はセイジに棍棒を振り下ろした。

セイジは自前の剣で大男の棍棒を止めた。

しかし、剣では長くは持たない。

「私たちはカールが占領した施設を取り戻したいだけなのよ。」

私は叫んでいた。私たちの目的はそれなんだから。

「えっ。」

大男は私のほうを見る。その顔は「何故だ。」と今にも言いそうな顔になった。

「し、施設を。あいつが施設を奪ったのか。」

大男は顔だけこちらを向いたままそう私に聞いてきた。

「そうよ。」

私がそう言った後、後ろから声が聞こえた。

「セイジから離れる。」

後ろを振り向けば、ルイスが弓を引いていた。

「離れなければ、お前の頭を撃ちぬく。」

ルイスは大男にそう言った。

大男はセイジから離れた。

すると、セイジは逆に大男に剣を振り下ろした。

大男は棍棒でセイジの剣を止める。

「セイちゃんやめて。」

大男の様子が変わってきている。

さつきとは何かが違う。

私はルイスを止めた。

セイジを止めれば彼の変化の理由がわかるはずだから。

「うっ。うりゃあ。」

大男はセイジを押し切って床に倒した。

「本当にカールが。カールがあ施設の施設を占領したのか。」

大男が、信じられないとでも言いたいらしい。

セイジが立ち上がって再び大男に剣を振り下ろそうとする。

「セイジ。やめろ。」

ルイスの声で、セイジは動きを止めた。

「本当だよ。グランくん。」

私は声のするほうを見た。ミナの父親であるウィリアムが言ったのだ。

「あれ…。あんだ。まさか。」

グランと呼ばれた男は何かを必死で思い出そうとしていた。彼がミナを見たとき。何かを思い出したようだった。

「なんで、あなた方がここに居るんですか。施設は。」

グランと呼ばれた男はウィリアムに向かって叫んでいた。

「落ち着きなさい。グランくん。」

ウィリアムは冷静に言った。

彼は何かを理解したようだった。

彼は大きく深呼吸をするとうたった。

「あなたがここに居る時点ですでおかしい。なら、やっぱりカールが。」

彼の言葉に、ウィリアムは頷いた。

「ああ、彼が軍人になったとき。いつかはこうなるんだと思ってんだよ。」

ウィリアムが彼に答えた。

彼とはカールのことだろう。

なら、ウィリアムとカールとこの男は知り合いなのか。

「彼は嘘をついていたんですね。それにまんまと騙されていた。」

グランは天井を見ながらいった。

「あなただと気が付かなかったら、今頃取り返しの出来ないことをしていました。」

「仕方が無いさ。昔の話だからな。」

ウィリアムがグランに言う。

やっぱり二人には何かあるらしい。

ウィリアムはグランの小さいころを知っているということか。

グランがウィリアムを見て言った。

「ウィリアムさん。俺も手伝います。奴から施設を取り戻しましょう。」

グランは自分の手の平を見て続けた。

「奴は。カールは俺の手で殺します。」

グランは強く拳を握る。

力が強いのか拳が震えていた。

「破ってはいけない約束を破ったんですから。」

グランはウィリアムを見て言った。

「そうだな。約束したんだったな。」

ウィリアムが遠くを見ながら言った。

「俺は一度アジトへ戻って、残りの部下全員を集めてまたここに来る。」

そう言うと、グランは扉へ向かって歩き出した。

建物内に入っていたグランの部下は一緒に外へ出た。

外では、グランが部下になにやら説明をしているところが見えた。

部下たちはそれぞれが頷いている。

グランは部下を連れて戻ってきた。

そして、私たちにこう言った。

「うちの部下を二十人ほどここに置いていく。何か手伝わせてやってくれ。」

グランはそう言うと、残りの部下とともに自分のアジトへ戻っていた。

無力感はどこかへ消えてしまった。

代わりに、私たちには希望が見えた。

第二十三話 聖なる河と

第二十三話 聖なる河と

2237年 夏の始まり 南アジア

僕らが川を越えると、バラナシが見えた。

左手に見える川をガンジス川というらしい。

そういえば、さっき川を渡っている途中に牛がこの川を流れていった。

からすも一緒に居て、肉をついばんでいた。

僕らに気が付くと、どこかへ行ってしまった。

お食事中すいませんって気持ちだ。

船の漕ぎ手はよくあることだと言っていた。

よくあることなのか。

牛が川を流れる光景が日常なのか。そうなのか。

あとは実際に行ってみたほうがいいと言われた。

この川はお世辞にも僕の考える綺麗な川には見えない。

それでもこの川には何かあるんだろう。

聖なる河と呼ばれる理由が必ずあるはずだ。

僕らはバラナシの中へ入っていった。

よくわからないけど、この町はかなり大きいことが分かった。

近くの人に聞くと、この町並みが西へずっと続いているらしい。

どこまで続いているのか凄く気になる。

大通りに出れば大量の人間が行きかっていた。

ある者は荷物を手で持ったり、肩に乗せてものを運んでいる。

またある者は車輪の付いた台を使って運んでいる。

人間が多いから騒がしいようだ。

その騒がしい中で、低く大きい音が聞こえ出した。

その方向を見ると、彼らが居た。

牛数頭が固まって道を通ってこちらに向かってくるのだ。

ひかれると困る。だから、サヤの手を引っ張って、建物側に寄った。目の前を牛が通り過ぎていく。

どこかで飼っていた牛だろうか。

「あんたら。外から来た人間みたいだね。」

振り向けば僕らは店の前に居て、その店主が僕らに話しかけてきた。元気なおばさんみたいだ。

「あ、はい。」

サヤが答える。僕もそれに合わせて頷く。

「そうかい、だったら牛は傷つけないほうがいいよ。ここは宗教上牛を聖なる動物としているからね。」

「そ、そうなんですか。」

僕はそのおばさんに答えた。

「ここでは到る所で牛に会うよ。ほらあそこにも。」

彼女が見る方向にも、牛が居た。

その牛はゆつくりと道を進んでいる。

僕らの住んでいるところでは、ちよつと無い光景だと思う。

誰かしらが、牛を連れている所しか見たことが無い。

「そういうことだよ。そうだ、ちよつとまっつてな。」

そういうと、彼女は店の中に入り、店に置いてある何かを持って戻ってきた。

「これをあげるわ。おいしいから食べてみて。」

彼女は黄緑色をした果物らしいものを僕らにひとつずつ渡した。

僕らは礼を言つとその場を離れた。

果物をもたらったものの何処で食べようか。

果物片手に町を歩く。

ふと左側を見ると、建物の間からガンジス川が見えた。

川のほうに出てみることにした。

出てみると、川までの部分が階段上になっていた。

僕らはそこに座って川を眺める。

座っても何もすることがないので、さっきおばさんからもらった果物を頂くことにした。

かじりながらふと周りを見た。

僕らの左側には老人が近くに座っていた。

しかし、生きているのか死んでいるのか分からない状態に見える。だって、全く動かないんだもの。

それから、しばらくガンジス川を眺めていた。

正直眺め続けることに飽きた。

しかし、特にすることが見つからない。

あの村の店主に言われて来たものの。何があるんだろうか。

誰か少しでいいからこの川とこの町について教えてくれれば、本当の価値が分かるのに。

もらった果物を食べ終わると、僕はサヤの手を引いて町の中を歩いた。

どこへ行くとも分からない。

日が傾いていたので、今日はここで夜をすごさなければいけないようだ。

通りに戻れば牛がのろのろと歩いている。

僕は立ち止まる。

急に止まった僕をサヤは不思議そうに見ている。

サヤが何か言っているが頭に入ってこない。

牛は聖なる存在で傷つけてはいけない…。

ということは、殺して食べちゃいけないという事か。だったら…。

「どうしたの。」

サヤの大きな声で、僕は現実に取り戻される。

「ん。どうした。」

僕はサヤの声に反応した。

「どうしたのこっちの台詞です。何考えてたの。」
むつとした顔でこちらを見てくる。

「いや、牛のことを考えていたんだ。」

僕はそう言っただけでサヤのほうを見て頷く。

「ここでは牛は宗教上聖なる動物。傷つけちゃいけない。なら、殺して食べることも無いってことだよな。牛は食卓に出ないということだな。」

「そんなこと考えてたの。傷つけちゃいけないところでそれは分かるでしょ。聖なるって言うてるんだから。」

格好つけて言ってみたものの。

サヤにそう言われてちよつとへこむ。

僕らはまた歩き出す。

外で散髪をしている店を発見する。

外なら切った毛を捨てることは楽だと思う。

しかも、道具を持っていけば何処でも出来そうな気がする。なかなか面白い。

大通りを当てもなく歩いてみる。

今日はどうしようか。どこに泊まるうか。

「ちよつとあんたたち。まだこの辺歩いてたの。」

声が聞こえたほうを見ると、昼間果物をくれたおばさんだった。

「今日はこの町で泊まるうと思ってるんですけど。泊まるころをどうしようかと考えていたところです。」

僕は素直に言った。本当なんだから仕方が無い。

「ああ。じゃあ、うちに泊まっていきな。」

「え。いいんですか。」

サヤが隣で喜んでいる。

かなりお邪魔した感たっぷりだけど、野宿よりはいい。

「ほら、二人ともこっちに。」

おばさんはお店の奥にある住居部分に案内してくれた。

今日はなんとかまともなところで眠ることが出来そうだ。
おばさんたちに感謝することにした。

第二十四話 バラナシ

第二十四話 バラナシ

2237年 夏の始まり 南アジア

僕はバラナシで、たまたま出会ったお店のおばさんの家に泊めてもらっていた。

おばさんの名前はレニーと言っらしい。

ひとまず聞いといた。

食事は野菜の炒め物と、味噌汁のような液体の入ったものとご飯を頂いた。

隣では、サヤが辛さに苦戦していた。

「あなたたち、この町になんのために来たの。」

すべての食事が終わったあと、レニーは僕らに質問してきた。

「インドに入る前に、インドを通っていくならバラナシへ行ったほうがいいと言われて。だからここへ。」

僕は素直に答えた。実際そうなのだから仕方が無い。

「へえ。ここもやっぱり知られているものなんだね。」

「なんで、このバラナシって場所が知られているんでしょうか。」

僕はレニーに聞いた。何かしらの理由があるはずだ。

「ここはね。ヒンドウ教の聖地になっているの。そして、そばを流れているガンジス川がヒンドウ教徒にとっては聖なる河なの。」

「へえ。ここがヒンドウ教っていう宗教の聖地なんですか。」

サヤがあっさりと言う。分かっているのか分かっていないのか僕には分からない。

「教徒は毎朝ガンジス川に入って身を清めるわ。」

「朝早くから川に入って寒くないんですか。」

朝から川に入って、濡れた体で風邪を引いたりとかはしないんだろ

うか。

「意外と寒いわよ。私もするから。」

レニーの言葉に、この人もヒンドウ教徒なんだなあと再確認した。

「そうだわ。明日の朝早くに朝日を見に行きましょう。ここに来たんだから見ていったほうがいいわ。他にも色々見せてあげる。」

レニーが突然言い出す。

「明日が楽しみです。ありがとうございます。」

サヤがレニーに礼を言っていた。

僕らも今日のような情報不十分な状態でこの中を歩き回るよりはいいと思った。

明日は色々と知ることが出来るだろう。

次の日の朝早くに僕らはガンジス川へ向かった。

「ちよつと待つてて。」

レニーは船の漕ぎ手のところに行って話を始めた。

「なんか寒いね。」

サヤが僕に言った。腕を擦って少しは温まろうとしている。

朝早いことと、太陽の光が無いからだと思う。

まだ辺りは薄暗い。

それぞれの物に本来の色があっても、すべてが黒く染められているかのようなのだ。

今は東からの微かな光が物に本来の色を与えようとしてくれている。

レニーは船の漕ぎ手との話を終わらせて戻ってきた。

「この船に乗りましょう。」

レニーはそう言うと、僕らは船に乗り出した。

船が岸から離れる。

まだ東の空には太陽が昇っていない。

周りを見ても岸のほうに何人か見えるだけだ。

この時間は早起きの時間になるのだらうと思った。

ゆつくりと東の空が明るくなっていく。
それによって気が付いたことがあった。

「レニーさん。東のほうには何も無いように見えるんですが。」
僕はレニーに質問してみた。そういえば実際何もなかったような気がする。

「東の土地は何も無いわ。だからここから地平線が見えるの。」
レニーが答えてくれた。対岸には何も無い。だから、朝日が出ればすぐ分かりそうだ。

さらに東の空が明るくなった。
僕らは東の空をずっと見ていた。
何も言わずにただ朝日が昇るのを待っていた。

「あつ。」
サヤが声を上げる。太陽の一部が地平線を越えてひょっこり頭を出した。

「おお。」
僕も思わず声が出してしまった。

ゆつくりと太陽が地平線から昇ってくるところを僕らは見た。
太陽が地平線を越えて昇ると全体が明るく照らされた。
しばらくそのまま見ていた。

ふと気が付くと、あたりは明るくなっていた。
周りを見れば岸から川に入っていく人々を見た。
身を清める行為を始めるようだ。

そろそろと川の中に入っていく。
服を着たまま川の中に入っていく人々もいる。

「おお。」
僕は思わず声を上げてしまった。
そういえば、この川の色は茶色いぞ。色々な意味で大丈夫なのだろうか。

傍にレニーが居るにも関わらずそんなことを考えてしまった。
「服濡れちゃうよね。」

隣でサヤがまともな事を言っている。

実際濡れるだろう。濡れたまま上がって、風邪を引かないのだろうか。

何も考えずに川に入るわけではないだろう。

本人の勝手ということか。

その隣で、洗濯をしている人たちもいる。

洗ったものを順に干していく。

「そろそろ次に行きましょうか。」

レニーの声に反応して、僕は彼女のほうを見る。

「次は何処へ行くんですか。」

レニーの言葉に僕は次の目的地について質問をする。

「次はこの岸沿いの火葬場でも見にいきましょうか。」

レニーはそう答えた。

火葬場というのだから、遺体を燃やして灰にしていく場所だろう。

船で火葬場の傍まで着くと、煙が上がっていた。

火葬場と言ってもガンジス川に開かれた所だ。

「見ようと思えば、僕らにも見えるんですか。」

僕はレニーに言った。サヤは何も言わずに火葬場の方を見ている。

「そうよ。だけど女性は入れないの。遺灰はガンジス川に流されるわ。」

レニーは答えてくれた。

「そろそろ戻りましょう。」

レニーの言葉で僕らはその場を離れて引き返すことにした。

帰りに洗濯をしている人々を見ると、洗濯物が大量に干されていた。朝早くに船に乗った場所に戻ってくる。

船を降りると、レニーはこう言った。

「ここでお別れになるわ。この町を出るところまで一緒に行つてあげたいけど。こっちは用事があるの。ごめんなさいね。」

そしてレニーは続けた。

「そこに見える道を、真っ直ぐ西に進んでいくとこの町を出ること

が出来るわ。」

「色々とありがとうございました。」

僕は礼を言った。

そして、僕はガンジス川を離れて道に出ようとする。振り向けば、レニーがガンジス川に入ろうとしていた。

僕は一度頷くと前を向いて歩き出した。

僕は歩き続ける。

やっぱりこの町は大きいと思う。

周りを見ると色々なお店がある。

その中に様々な色が見えるお店を見つけた。

近づくると布の生地を売っているらしい。

「わぁ、沢山の色の生地がある。」

サヤは喜んでいる。実際布だけ見ても綺麗だ。

人々はこの布から服を作って着ているのだろうか。

僕はそう思った。

また歩き出す。朝だからなのか元気のいい声が飛び交っている。

お店以外の建物の部分を見ていくと、象の像や壁に書かれた象の絵がある。

牛に対しての考え方と同じように、ここの人たちは象に対して何かあるのかもしれない。

僕らはこの町を抜けるために、西へと歩き続けた。

第二十五話 うらざり

第二十五話 うらざり

2237年 夏の始まり ヨーロッパ

目を開ければ天井が近くに見える。
毎日がつまらない状態になっていた。

つい先日、彼らは私とテリーの策によって見事に敗北したといえる。
このままなら、グランたちの手で簡単に始末出来るだろう。

まあ、グランが彼らを見つけていればの話だが。

施設内は一部の場所を除いては静かであった。

その静かな場所で私はしばらく横になり眠っていたのだ。

最近はずっと突然起こしにくくということもなく、ぐっすりと眠れている。

彼らさえ居なくなれば、あとはきおくを運び続けるだけなのだ。

私はしばらく天井を眺めていた。

重いからだをベッドから起こし、靴を履いて部屋の外へ出る。

光の当たらない場所だからか空気がひんやりとしている。

その中を私たちが見たこともないものが照らしている。

それは等間隔で配置されており、それぞれが同じ色の光を出している。

どのように発光しているのかなどは私にはわからない。

きおくを調べれば何かわかるかもしれないが、未だに調べてはいない。

近くにあるものほど何時でも出来るという安心感があるのかもしれない。

しばらく廊下を歩くと騒がしい部屋に出る。

この施設内で騒がしい場所と言ったらきおくのある部屋か外への階

段がある部屋のどちらかである。

まあ、前者のほうは人間の音よりも機械から発せられる音のほうが大きいと思う。

私は外への階段がある部屋に出る。

今日も騒がしく人が喋っている。

私に気がついた兵士はあいさつをする。

私はそれぞれ頷きつつ外への階段を上っていく。

外へ出れば辺りは暗くなっていた。

施設内のひんやりした空気とは違う冷たい空気が頬をかすめる。

とは言っても、外は外で静かでは無い。

毎日が、見た目変わらないように思える。

施設から取り出したきおくだけが内容を変化させていくかのようだ。しばらくここでみなを見てみよう。

「大尉、大尉。」

私は声のするほうを向いて目をあける。

施設への扉に寄りかかったまま寝ていたらしい。

そこへテリーが話しかけてきたようだ。

「んあ、なんだ。」

私は頭を掻きながら言った。

テリーの何時に無く真剣な顔に何か良くないことが起こったのかと思った。

頭を掻くのを止めて、テリーの次の言葉を待つ。

「グランという方が話があると。」

テリーはそう言いながら、ある方向をみる。

私もその方向を見ると、グランがこちらに向かって歩いてきた。

兵士たちが私のほうを見る。

大丈夫だという合図を出しておいた。

手出しされると色々と面倒だ。

私は口元が緩んでいた。

彼がここに来るということは奴らを始末したということだ。

さあ、グランよ。始末したという言葉聞かせてもらおうか。

「よお、グラン。」

私はグランに挨拶をする。

「カール。」

グランも返してくれた。

ちよつと怖い顔だけど大丈夫。

「約束のほうはどうだい。」

私はグランへあのことを聞いた。

さあ、次の言葉が期待大だ。

「それなんだがな」

グランは言い出す。そして続けた。

「お前の行動にはがっかりだよ。なぜウィリアムさんを殺させようとした。なぜお前がここに居るんだ。なぜ……」

私は一度深呼吸をした後、熱くなるグランの言葉を遮って言う。

「グラン。言いたいことは沢山あるだろう。だが気がついたのならば、お前の行動は解りきっているよ。」

私は遠くの空を見た。

失敗のようだ。まあ、グランが気が付いてしまったのだから仕方が無い。

さすがに、親しくしてもらった人を殺すことは出来ないか。

それが、何年も会っていない人だとしても。

「お前は向こう側に付くんだろうな。」

私は遠くの空を見つめたままグランに言った。

「そうだ。」

グランは私を見て言った。そして続ける。

「俺はお前を殺せない。だが、お前は俺以外の奴が必ず殺す。それだけだ。」

私はグランを見る。彼の目は真剣だった。

「じゃあな。」

グランはそう言うと言から離れていった。

私はその後姿をずっと見ていた。

「大尉、奴に尾行を。」

そばに居たテリーが私に耳打ちする。

「いや、いい。」

私はしばらくグランの歩いていった方向を見ていた。

私はテリーを連れて会議場へ行く。

正直どこでもよかったりするのだが、静かな場所ということを選んだ。

それに、屋外なので新鮮な空気が吸える。

ここは施設への扉やきおくを整理する場所から少し離れた場所である。

私とテリーは木と布で作られたテントの中に入る。

いくつかの椅子の中心にテーブルがひとつある。

その上には紙が何枚か置いてあり、文章が書かれている。

書いてある内容はこれからのこの施設ときおくの運搬の話である。

「さあ、問題だよ。テリー。」

私はテリーを見て言う。

「大尉、なぜ彼に尾行をつけなかったのですか。」

テリーが言ってくる。

テリーにとっては、尾行をつけて場所を暴こうというのだろう。

「無駄だよ。考えてみる。グランは奴らについた。ということは、尾行したら簡単に尾行した奴が殺されるぞ。意味が無い。」

私はテリーに言った。

そして、会議場の中を歩き回る。

実際のところそうなのだから仕方が無い。

「じゃあ、どうするのですか。」

テリーが私に聞いてくる。

私は立ち止まり、テリーを見て言った。

「私たちが探すんだよ。対岸一帯のどこかに居るはずだ。」

「そんな。時間がかりますよ。」

テリーは私に言う。

そうだ、グランがこれだけ時間がかかったんだ。

私たちが探してもそれなりに時間がかかるだろう。

「時間がかかってもいいさ。奴らのほうから来ない限りは、きおくの運搬に関しての悩みは無い。運び終わったら事を始めればいいんだ。」

私はそう言つと、テリーの肩を軽く叩いて頷いた。

そのまま、会議場を出ようとする。

「わかりました。お任せください。」

背後からテリーの声が聞こえる。

私たちの計画の完了か、お前たちの計画の完了か。

さあ、どちらが早いのだろうか。

気になるところだ。

第二十六話 帰還

第二十六話 帰還

2237年 夏の始まり ヨーロッパ

私は部下をウィリアムさんたちが居るアジトへ連れて行く。

その後、ケイトとともに施設へ向かった。

カールとの約束を破るために。その事を伝えるために。

行く意味があるのかと、ウィリアムさんやその他の人間が言う。

特にウィリアムさんには強く言われた。

私がカールと会えば、彼を殺しかねないと思っているらしい。

しかし、私はカールを殺せない。

一緒に居たあの頃があるから。

それでも、約束してしまったのだ。黙って裏切ることとは自分の考えに反する。

伝えに行くのだ。私たちの関係が行くところまで行ってしまったということを。

施設のある島へ着くと、辺りは暗くなっていた。

その中を施設へ向かって歩く。

「僕は隠れて見張ってます。」

ケイトはそう言う一人どこかに行ってしまった。

彼には、尾行が付いたかの確認および排除をもらうことになっている。

ルイスが、ケイトを指名した。

よくこの島で偵察を行っているからだという理由らしい。

ひとまず尾行した奴がいるのなら、ケイトが教えてくれれば自分で

手を下してもいい。

私は辺りに注意を払いながら歩いた。
案の定兵士たちに囲まれる。

「手を上げる」

兵士の一人が私にそう言った。

剣の先が私の胸のあたりにある。

「俺はカールに話があつて来たんだ。グランが来たといえはわかる。

」

私は大声で言った。

騒ぎに気がついて近づいてくる兵士の中に兵士以外の格好をした人間が居た。

「グランさんですね。」

その男はそう言った。私のことを知っているらしい。カールから聞いたのだろうか。

その男は兵士たちに剣を収めるように言う。

「失礼しました。カール大尉をお呼びしますので、少々お待ち下さい。」

その男はそう言った。カールの部下なのか。

施設のほうへ走り出す。

私はその後を歩いてついてく。

先ほど剣を向けていた兵士たちは私の後ろを歩いている。

途中で会った兵士たちは、私のことを誰なのか不思議そうに見ている。

施設に近づくにつれて辺りが明るくなり、人々の騒がしい声が飛び交うようになる。

この中に、ウィリアムさんたちが、私が守りたいものがある。

忙しそうに歩き回る兵士たちを見る。

彼らは自分たちがしていることを理解しているのだろうか。

私に気がついて立ち止まる人間も中には居た。

施設が見えてくると後ろを歩いていた兵士たちは何処かへ行っ

まった。

代わりに、施設前にはさっきの男とカールが見える。

二人は私を見ている。

さてと、裏切ってこようか。

「じゃあな。」

私ははそう言うとかールから離れていった。

後ろに注意しつつ来た道を戻っていく。

帰り道でも兵士たちが私を見ている。

そんなに来客が珍しいのか。

徐々に辺りが暗くなり、最後には月の光のみが私を照らすようになった。

来た道を見ると、遠くに施設が見える。

施設は必ず取り戻してみせる。それだけだ。

まだケイトは現れない。私は海岸へと歩きだす。

海が見えてくる。

そろそろケイトが現れてもいいんだが、どうしたのだろうか。

もしや、尾行の排除をしているのだろうか。

私は立ち止まり、来た道を見る。

そのとき、左側に何かが落ちた音がした。

素早く振り向くと、ケイトが居た。

「尾行は無し。誰も付いてきてませんよ。大丈夫です。」

ケイトは私を見て言った。

それから、私が来た道を見て続ける。

「早く戻りましょう。世が明けてしましますよ。」

私たちは船に乗って戻ることにした。

これから向かう先は光の無い世界のように感じた。

陸に着き、アジトへと向かう。

辺りは明るくなっていた。いや、もう朝なのだろう。

アジトのある建物へ着く。扉を開けて、戻ったことを告げる。

しかし、それを聞くものは居ない。

なぜなら、建物の中には誰も居ない。

私の部下もウィリアムさんも居ない。一体どこへ行ったのだろうか。

「帰ってきたのか。」

建物の影からルイスが出てきた。

私は状況を聞きだすことにする。

「ウィリアムさんや俺の部下たちはどこへ行っただ。」

「君たちが大勢で押しかけたからね。この建物が怪しまれた。だから、アジトを変更したんだよ。」

ルイスが私たちに言う。ケイトは関心して何度も頷いている。私とケイトだけが知らなかったらしい。

「悪かったな。大勢で襲撃して。」

私は怒った口調でルイスに言う。

「いや、いい機会だったんだ。人数が多くなって、この建物では収納しきれない状態になった。だから、替えたのさ。」

ルイスが私たちに言う。私の部下が加わった時点でこの建物では不十分だと理解していた。

替えるのはいいだろう。

「じゃあ、なぜ俺たちは伝えなかった。」

私はルイスへ言う。

「君たちに尾行が付いていて、そのまま新しいアジトへ来ていたら替えた意味が無いからね。」

ルイスがさらりと言う。

「お前、俺が信用できねえのか。」

私はそう言うと、ルイスに手を上げる。

「や、やめてくださいよ。」

ケイトが私とルイスの間に入って、私の行動を止めようとする。

私はしばらくケイトに力を抑えられた後、新しいアジトへと向かった。

そこは、前のアジトよりも西へ移動した場所にあった。扉を開けて入れば、仲間や私の部下が居る。

私とルイスとケイトはそこの中へ入っていった。

また、新しく始まるんだ。

第二十七話 宮廷の冠

第二十七話 宮廷の冠

2237年 夏 南アジア

僕は歩き続けている。あのバナシを離れてから、とある村でタージマハル廟へ行っておいたほうがいいと言われた。この地域で何度そのようなことを言われなければならないのか気になる。ところだ。

聞いた話だと素晴らしい建物らしい。

どう素晴らしいのかは説明してくれなかった。

そのタージマハルはアーグラと呼ばれる大きな町にあるらしい。

バナシぐらいの大きさなのだろうか。

いや、それ以上なのかもしれない。

「ほら、さつさと歩いて」

サヤは僕の後ろに回りこんで背中を押す。

背中から来る力によって、体は無理やり前に進んでいく。

考えていたためか、自然と歩みが遅くなっていたようだ。

すっかり前を向いて歩くようにした。

そういえば、僕らが昔から住んでいた場所から一年でこんな所まで来てしまった。

人を食らう魚、青白い大猿や手の長い熊。

考えて見れば大陸に渡る途中からずっと見たことの無い動物たちと争っている。

自分が死ぬか相手が死ぬかの世界。

これからもそんな動物たちが僕たちの前に現れるのだろうか。

彼らはなんのために僕らと争うのだろうか。

彼らの平和を奪ったから？彼らの居場所を奪ったから？

良くわからない。僕らは彼らとは争いたくないのに。
そういえば、ヨーロッパへはあとの位で着くのだろうか。気にな
って仕方が無い。

川沿いに進むと町が見えてきた。

町の中に入れば町である以上、この地域の人間の集まりである以上
それほど変わりは無い。

活気があることはいいことだと思う。

町中をぐるぐるとひとまず歩いてみた。

「なんか空だけが広いね。」

サヤがそう言って空を見上げる。

僕も同じように空を見上げた。

目的の建物は見れば分かると言われた。

見れば分かるとはいえ、こうも建物ばかりではどれが目的の建物が
分らない。

とは言っても、それらは全て個人の家なのだろうけど。

そう思いつつも次は大通りらしき通りに入る。

左を向けば何処までも続きそうな町中。

右を見れば何処までも続く町中……では無い。

遠いけど、開けた空間が見えた。

何かをする広場かなにかだろうか。

僕らはそこへ向かうことにした。

その空間に入っても、ここが何のためにあるのかは分からなかった。
ただ広いことだけは言えた。

「おお。」

サヤは手を広げて体ごと回転している。

来た方向を見た。先ほどの場所とは違う開けた場所だ。

反対側を見れば大きな門がある。

その門へ近づけば近づくほど驚いた。

「大きいね。」

「そうだな。」

サヤの言葉に僕は返す。

建物のことはよく分らない。

しかし、この門は大きく立派だ。

門の色は薄赤と白の二種類だけ。

太陽の光がそれらの色を強調している。

ふと門の奥を見ると、何かが見える。真っ白な建物だ。

そこで僕は気が付いた。まさか、この門は前門なのか。

僕らは門をくぐり、ちょうど門の真下の位置で真上を見上げた。

かなり高い位置に、手の届かない位置に天井は見えた。

サヤが手を空に向けて飛び跳ねている。

飛び跳ねたからといって触れるものは無いのだけど。

けど、こんなに高いと飛び跳ねなくなる気持ちは分からないでもない。

サヤが跳ねる姿を見ながら僕は考えた。

どうやってこの門は作られたのだろう。

あんな高い位置に人が上って作業をしたのだろうか。

それからゆつくりと正面へと視点を移す。

そして理解した。あれが薦められた建物。タージマハル廟なんだと。

遠くからでも存在感をもつ真っ白な建物。

両側に二本ずつ塔のようなものが立っていて、綺麗に左右対称に見える。

僕はそこから目を離せなかった。

さっきまで飛び跳ねていたサヤが僕に気が付く。そして、その先のものに気が付いた。

「あれが、言ってた建物なんだね。」

サヤはそれだけ言っと、黙って見つめていた。

ここにそのまま立っているのもどうかと思うので僕らはその建物へと歩き出した。

タージマハルに近づく間にも、凄く広い空間が僕らの周りをぐるりと囲んでいる。

「広いなあ。」

僕は自然と口から言葉が出てきた。

「そうだね。広いねえ。」

サヤもそれに答えてくれた。

水が足元を流れ真っ白な建物へと真っ直ぐに繋がっている。

涼しい気持ちになってきた。やはり、水が流れているからだと思う。水路となっている両側を道が通っている。僕らは右側を通過して目的の建物へと向かった。

タージマハルへ近づけば近づくほどその建物の大きさに驚く。

前門の衝撃など既にどこかへ行ってしまった。

近づいて分かったが、両側には同じ形をした建物がある。

それらは、なんのための建物かは分からない。

タージマハル廟というだけに人が眠っていることはわかる。

この建物はここに眠る人のために作られた。どんな想いで作られたのだろう。

前も後ろも右左も広い。そして美しい。

ただただ凄いとしか言えない。

それ以外の言葉を発することが出来ないかのような。

サヤも「おお。」とか「凄い。」といった言葉しか発していない。説明し難いのだと思う。

建物の階段を上っていく。

目の前には前門を入ったばかりの位置から見えた建物がある。

あまりに近づきすぎて全体が見えなくなってしまった。

反対側を見れば遠くに前門が見える。遠くに。

「あれ。後ろに川があるよ。」

気が付いたのはサヤだった。

この建物の後ろには川が流れている。

今度はその川のほうへ行ってみることにした。

僕らは水路の右側を通って前門へと歩いていった。

タージマハルの後ろ側へと到着する。

左を向けばタージマハルが見えた。

「ねえ。あつちは何なんだろう。」

サヤが指差す方向を僕は見る。

川を挟んだ対岸になにやら見えた。

近くに居た船の漕ぎ手に聞くと、タージマハルの対岸にはそれと同じものが出来るはずだったらしい。しかし、それは完成しなかった。今はただ、立てられる場所のみが残っているらしい。そんな話を僕は聞かされた。

タージマハルの凄さに力を使い。こちらまで力が回らなかったのだろうか。そのことを本人たちに聞くことが出来れば楽なものだろう。しかし、それは今となっては無理だ。

僕は、川を挟んだ両側を交互に見ながら思った。

そして、またタージマハルを正面から見たくなった。

あの人への想いが形として残り。

時を越えて私たちの前に存在する。

第二十八話 調達

第二十八話 調達

2237年 夏 ヨーロッパ

「そろそろお前たちだけで、森へ食料を取りに行ってきてくれ。」

ルイスは私たちに言うてきた。それも突然に。

レイやケイトたちと一緒にいったことはある。

けど私たちだけで行くことは無かった。

特に難しい仕事じゃない。森へ行って獲物を狩って持ち帰るだけ。

ただそれだけなのだ。

今回は海側にレイが何人かと一緒に行くらしい。

「僕らだけでとって来てやろう。」

セイジはそんなことを隣で言っている。

ああ、そっか。二人きりになるんだ。

久しぶりだなあ。この集団に入ってから最近までそんなことは無かった。

敢えてそうしないようにしていたわけじゃない。だけど、やっぱり

二人で居る時間も必要だよな。

この集団に入るまではずっとふたりつきりだったんだから。

身支度をすませると私とセイジは外へ出た。

二人だけで並んで歩く。私がセイジの左側を歩く。何も言わずに。

なんか懐かしくも感じる。

私たちは誓った。ずっと二人一緒だって。

今も一緒だから誓いは果たされているのかもね。

突然右手に何か触れた。私は直ぐに右手を見る。

セイジは私の手を握っていた。そして前を向いたまま何も言わない。

私も何も言わずにそのまま前を向いて歩いた。

手を握ることも最近はない。

手を握るような状況なんて無かった。何時も他に誰かが居たり、誰かと剣を交えていた。

旅に出たときは何時も手を握っていた。

その頃は二人だけの時間が凄く楽しかったんだと思う。
今はどうだろう。

森に着く。今回はレイと一緒にここへ来た。もちろんセイジも一緒だった。

あの時は丸々太った豚を狩ったことを覚えている。今日も居るといっただけ。

森の中は静かだった。凶暴な動物は森の奥のほうにいる。なぜ知っているかというと、実際に奥のほうに行ってみただけ。

そこには白い熊がいて、その時は私たちに気が付かなかったので争うことはなかった。

食べるために殺すわけでもなく。殺されそうになったから殺そうとする訳でもない。

だから、今も森の奥には居ると思う。

しばらく森の中を進むと、突然草木の葉を揺らす音がする。

私とセイジは素早く剣を構えながら音のするほうへ向く。

そこからは豚が出てきた。しかも、丸々である。うん、おいしそう。早速セイジが一撃を加える。豚は悲鳴を上げてよろめく。セイジが一度豚から離れた。

豚は血を流しながらふらふらと歩いている。

私は自分の剣で豚に止めを刺した。

「ごめんなさい。」

動かなくなった豚に私は謝った。

「謝るなよ。」

セイジがそう言って豚の傍へ行き、運ぶ支度をする。

「大切なことは、この豚の死を無駄にしないことさ。無駄死にがもつとも良くない。何もせずに死ぬのは嫌だろ。」

セイジは私に聞いてくる。

「うん。そうだね。」

私はそれだけ言つとセイジを手伝つた。

私たちは縛つた豚を引つ張つてアジトへと戻つた。

アジトへ戻るとレイたちはまだ帰ってきていなかった。

「収穫はどうだった。」

ルイスが聞いてくる。二人なのだから量は知れているだろうと思う。

「これだけです。」

セイジがそう言つて豚を差し出す。

「おお。ちゃんと獲つてきたんだな。」

ルイスは、しゃがんで捕らえた獲物を見ている。

ルイスは立ち上がると、

「じゃあさつそく料理してもらおう。」

そう言つと、アジトの奥のほうにいる人たちを見る。

彼らは、食事係の人たちだ。

少し前にグランたちが加わつたことで、一気に人数が増えた。

そのため、沢山の食事を一気に作らないといけなくなつてしまつた。

だから食事係に選ばれた人間が、獲つてきた食材を使って料理をしていくことになっている。

私たちが獲つた豚が調理場へ運ばれていく。

それを見ながら私は思った。

あんな量の肉じゃ、レイたちが獲ってくる魚の量が良くなければ足りないと思う。

なぜ私たち二人だけで行かせたのだろう。よく分からない。

「マヤ、休もう。」

セイジの言葉で私は現実に戻ってくる。

「そうね。そうしましょう。」

私はセイジにそう言っていると、身に着けていた防具や武器を置いてから井戸のある外へ出た。

新しいアジトとして使っているこの建物の傍には井戸がある。初めて見たときは本当に使えるのか凄く不安だった。だけど、枯れているわけでもなく何度か井戸水を流していたら大丈夫そうな水が出てきたので使っている。

私とセイジはその水を布にしみこませて体を拭いた。

アジトへ戻るとそのまま私たちの部屋へ戻った。

このアジトである建物は三階建ての建物である。

一階は調理場と広間に使っていて、二階以上がそれぞれの部屋になっている。

それぞれと言えど何人かが合同で一つの部屋を使っている。

その中でも、ルイスとレイ、ウィリアムさんとミナの親子、私とセイジや何時アジトに戻ってくるか分からないケイトは小さな部屋が割り当てられた。

ちなみにグランは部下と一緒にいいと初めは言っていたけど最終的にはケイトと一緒にの部屋に入ったとのこと。

私とセイジは食事時が来るまで眠ることにした。

食事時になったので一階へ行くと、私たちが獲ってきた以上の肉がそこにはあった。

レイと一緒に行った人の何人かが海ではなく陸のほうで獲物を狩ってきたらしい。

やはり私たちを二人にしようとしたのだと思った。

第二十九話 砂のはじまり

第二十九話 砂のはじまり

2237年 夏 南アジア

アーグラを出てから、しばらく西へと歩いた。目に見えて草木が少なくなっていく光景を見た。西へ歩けば歩くほど緑は消えていく。その代わりに橙色をした砂が緑を覆っていく。砂と緑が混ざり合った地域を歩いた。もう直ぐ砂だけの世界がやってくるのだろう。そう思っただけで進む以外は何も出来なかった。だって、この先に目的地はあるのだから。だから越えるしかないんだ。

遠くに緑の無い橙色をした砂の世界が見えた。あそこから先は緑が無さそうだった。砂の中から顔を出す木々を横目にそこまで歩いた。目の前は砂だけ。緑なんて無い世界が目の前に広がっていた。サヤは砂を掴むと、指の間から零れ落ちる砂を見つめた。手から砂が全て落ちると、手を握りながら言った。「とうとう緑の無いところまで来ちゃったね。」その顔は、寂しそうだった。サヤは前を向くと強く言った。「頑張っただけでヨーロッパまで行こう。」「そうだな。頑張ろう。」僕はサヤの言葉に答えた。

そうなんだ。もう行こう。ここまで来たら引き返すことは出来ない。僕は砂の世界に足を踏み入れた。

踏みしめる砂は不安定で土とは違う感触が足から伝わってきた。後ろを見れば懐かしい緑の世界。

前を見ればこんにはの橙色一色の世界。

凄く暑く感じる。なぜだろう。

「なんか暑いな。」

自然とそんな言葉が口から出た。

その言葉を言ったからといって、現状が変わるわけじゃないんだけど。

「うん。そうだね。」

サヤもそれは感じていたらしい。暑そうだ。

緑が無いことがこんなにも暑くさせるのだろうか。

緑って本当に大切だと思った。

たまに吹く風が暑さを和らげようとする。

しかし、その風さえも生暖かいような気がする。

困った。凄く困ったよ。

それでも歩く。それだけだ。

辺りが暗くなり始めると途端に涼しくなった。

「涼しくなってきたね。」

サヤは西へ沈む太陽を見ながら言った。

太陽が地平線へと沈んでいく姿を僕は見つめた。

太陽が沈み、辺りが完全に暗くなるとさらに気温が下がった。

それは、涼しいというよりは寒いというものだ。

「寒いな。」

僕はサヤを見て言った。

その声は決してうれしそうな声では無く。

力なく口から出た言葉だった。

「うん。」

サヤは目の前の砂を見ながら小さく呟いた。寒さのためか体を小さく丸めていて、小さいからだがいつそう小さく見えた。

昼間の暑さとの差が広い。夜がこんなにも寒くなるとは知らなかった。

僕とサヤは寄り添って、寒さをしのいだ。

これも砂の世界だからなのだろうか。

寝ようと思っても砂の上に直に眠ることは出来ない。砂が髪の毛に付く。口に入るかも知れない。

そのため、布を敷いて眠ることにした。

ふと起きてみると、まだ月が僕を照らしていた。

起き上がったサヤを見ると、すやすやと眠っている。

寝起きのためなのか、まだ頭が動いていない状態である。辺りを見回しても特に何も無い。

また眠るのもどうかと思ったので、近くの地面をただ見つめていた。その時、視界に何かが見えた。小さい動物だ。鼠か何かだろうか。

鼠なら近づいてこない限り面倒は無いだろう。僕はそう思った。

次の瞬間、その鼠に大きな動物が飛び掛った。

その大きな動物は猫のような体型だが、猫よりもっと大きい姿をしている。

鼠と猫らしき動物が生きているか死ぬかの争いをしている間に、念のため僕はその光景を見ながら自分の剣を取った。

両者による争いは終わり、猫らしき動物が勝利を収めた。

鼠を啜えた姿は、勝者の姿として僕には見えた。

僕らのほうを猫らしき動物は見た。

その目と僕の目は確かに合った。

こちらに襲い掛かるうというのだろうか。

一匹なので、襲い掛かれてもどうということはない。

しかし、面倒は避けたい。僕は手に持っていた剣をその場に置いて戦う意思が無いことを伝えようとする。

これで、襲い掛かってくるなら仕方が無い。

。もう一度剣を持ってあの猫らしき動物へと剣を振り下ろすことになるだろう。

しかし、それは無かった。

その動物は捕らえた獲物を口に咥えたままどこかへ行ってしまった。こんな夜でもこの世界は生死を賭けた争いをしているのかと思った。そろそろもう一度寝ようと思い横になろうとした。

しかし、先ほどの突然の争い勃発を考えると、また再び起こるのではないかと考えてしまう。それと共に、今度は自分たちに襲い掛かってくる動物が現れるのではないかと考えてしまった。

辺りを見回し、音を聴く。

何も居ない、聴こえない。

思い過ぎだと自分に言い聞かせ、そのまま眠ることにした。

次の日になり、暑さで目が覚める。

サヤはさきに起きていて出発する準備をしていた。

二度目に眠ってから、今まで何も無かったことが良かったと思えた。夜は全く安全であると言いがたい。特にこの砂の世界に何が居るのかまだよくわかっていない。

今後、気をつける必要があると思った。

足元の砂を掴んで見る。

手から砂が零れ落ちる姿を見ながら僕は思った。

この砂は人間に対してはそう甘くは無いようだ。

第三十話 消えてゆく水

第三十話 消えてゆく水

2237年 夏の終わり 南アジア

砂の世界に入って数日が経ったと思う。

未だに昼間の暑さと夜の寒さには慣れていない。

町もまだ見えていない。まさかこのままずっと無いんじゃないだろうか。

手持ちの水が少なくなってきた。

無くなる前に再びどこかで手に入れなくてはいけない。

「はぁ、はぁ。」

隣からは、そんなサヤの声が聞こえてくる。

話すことも嫌になってきた。ただただ前に進むだけだ。

「きやつ。」

サヤの声に後ろを向くと、砂の上に飛び込む形で倒れていた。

近づいて体を起こす。直ぐに体に付いた砂を落とした。

「もう嫌だよ。こんなところ。」

サヤが弱音を吐いた。今にも泣きそうだ。仕方が無いさ、こんな世界なんだもの。

「仕方ないだろ。ここを越えるしかないんだから。」

僕はそう言いながら、これから歩くだろう道を見る。

僕はサヤへこう言うしかなかった。

来た道に戻ってもどうしようもないんだ。

サヤを立たせると、再び歩き出した。

遠くに町が見えた。

だけど、油断は出来ない。暑さによる錯覚かもしれないのだから。そんな状況を何度も繰り返し返した。時には湖が見えることもあった。サヤを見ると、ふらふらした足取りで僕に付いてくる。

僕はサヤの手を取って、引き寄せた。

「がんばれ。」

僕はもうそれしか言えなかった。

「う、うん。」

サヤが力なく答える。

サヤを支えながら、前に進む。

歩けば歩くほど、目の前に見える町は暑さが見せたものじゃないことが分かった。

「もう少しだ。頑張れ。」

僕は自然とそんな言葉を口に出していた。

自分の手にかかる重さが増えていく感覚があった。

早く目の前の町に着かなくては。

ゆっくりと、しかし確実に町へと近づいていった。

僕はなんとかサヤを支えていた。町に入ればなんとかなる。それだけだった。

町の入り口で、子供が何人か遊んでいるところが見えた。

「もうす……。」

そう言いながらサヤを見た瞬間、サヤの体が僕の手を離れた。

彼女の体はそのまま砂の上に倒れこんだ。

すぐにサヤを抱き寄せる。

「サヤ。サヤ。」

僕の声にも返答が無い。頭がふらふらする。

だから、町の入り口に居た子供たちの行動に気が付かなかった。

「大丈夫ですか。」

僕らのところに駆けつけた何人かの少年。

一人の年長らしい少年が僕らの状況を見たあと直ぐに。

「医者と水だ。早くしろ。」

その少年は叫んでいた。

その声に周りの少年たちがそれぞれに走っていく。
年長らしき少年ともう一人の少年の計二人が残った。

「あなたは大丈夫ですか。」

年長らしき少年は僕へと聞いてきた。

「なんとか大丈夫だよ。」

僕はそう言った。本当は大丈夫じゃないと思う。

「早く日陰へ移動しましょう。彼女は僕らが運びます。」

年長らしき少年はそう言うのと、もう一人の少年と一緒にサヤを運ぼうとする。

しかし、やはりまだ小さな少年たち。サヤをうまく運ぶことは出来ない。

僕がサヤの胴体を持つことでなんとか運ぶことが出来た。

そのまま町の中の日陰の場所へと運ぶ。

そこへ一人の少年と医者らしき人が走ってきた。

僕らを見るなり。

「早く水を持って来い。」

医者は周りの人間に叫んでいた。

そこへほかの少年たちが、大きな器を幾つか持ってきた。

その一つを僕らの上でひっくり返す。出てきたのは大量の水だった。
水を浴びることで少し体が冷たくなったような気がした。

少年の一人が二人とも早く水を飲むようにと言って来た。

水をたくさん飲む。飲むと落ち着いてきた。

サヤにもいっぱい飲ませた。飲み終わると。

「はあ、はあ。」

サヤはそういいながら目を開いた。

医者はそれを見ると、少年たちに何か言った。

一人がどこかへ行き。直ぐに二つの小さな器を持ってきた。

「これを飲んで。」

医者が言う。医者が言うのだから飲んでおいたほうがいいだろう。

僕らはそれを飲む。なんか少ししょっぱい。塩が入っているみたいだ。

さっきよりも落ち着いてきた。

サヤも自分で水を飲めるほどに回復していた。

「だいぶ良くなってきたようだな。」

医者はサヤを見ながら言った。そして僕を見て続ける。

「この地域を甘く見ないほうがいいぞ。きちんと水分補給はするんだ。いいな。」

医者の言葉に「はい」と答えるだけだった。

「今日は二人とも安静にするんだ。無理しちゃいけないよ。」

医者は僕とサヤを交互に見て言った。

「それじゃあ。気をつけてね。」

医者はそう言うと言いついてしまった。

僕らの周りには、助けてくれた少年たちが居る。

「お兄さん。お姉さん。今度は気をつけてね。」

僕らを助けてくれた少年たちの中で、年長の少年が僕らに言った。

「ありがとう。助かったよ。」

僕は礼を言った。

「ありがとうね。」

サヤも礼を言う。元気になってきた。本当に良かった。

そして、少年たちはどこかへ行ってしまった。

僕らはしばらくその場で休むことにした。

僕らは理解した。この砂の世界では、水が命を繋ぐ本当に大切な存在だっことを。

そして、これから続くこの砂の世界の中で、もう二度と同じ状態にならないようにしなくちゃいけないと思った。

取り戻した水を体で感じながら、この地域の恐ろしさを知った。

第三十一話 砂漠の中の緑地

第三十一話 砂漠の中の緑地

2237年 秋 南アジア

今日も僕らは砂の上を歩いている。

サヤが暑さと脱水症状で倒れたときからしばらく経った。

その時のことを教訓に今も砂の世界を歩いている。

何時まで続くか分からないからこそ怖い。

しかし、歩けば次の町が近いということだけは救いである。

町が無い状態で歩き続けることにも限界がある。

水分・食料、それと少しの安全もたまには欲しい。

昼間は暑くて思考が止まりそうだ。何も考えられなくなる。

夜は逆に寒くて昼間は避ける火を求めてしまう。

緑が生い茂る世界を忘れてしまいそうになることもある。

あの湿った土がどんな感触でどんな匂いかとか。

当たり前に見えていた景色が急に懐かしくなった。

ここは風が吹くと砂が目に入る。風が吹くと反射的に後ろを向くか、

布で顔を覆うようになった。

目だけでなく口の中に砂が入ったときは、もうどうしようもない。

急いで口の中の砂を吐き出そうとする。

砂を噛むと音がして気持ちが悪い。

この砂の世界ではむやみに口を開けていないことが大切だと思った。
僕がそう思っているとサヤが突然話しかけてくる。

「ねえ、あれ町じゃない。」

サヤが指差す方向を見ると、確かに町があった。

「なんか、大きそうだな。」

砂漠の中でもこれほど大きい町がるのかと思った。いや、これまで

の町が小さすぎたためかもしれない。

「ひとまず行こう。」

僕はサヤに言うと、その町へと向かった。

僕らは町の入り口付近へ着く。

ラクダを引っ張りながら町から出てくる人たちがいた。

僕はその人たちを目で追う。ラクダには荷物が付けられている。僕らのように旅をしているのか、それとも商売のために場所を転々としているのだろうか。

「ほら、行こうよ。」

サヤの声で現実に取り戻される。

「そうだな。」

砂の世界へ入っていくラクダと人々を一度見ると、サヤを見て言った。

町の前に僕らは立つ。再度町をよく見ると、一段高くなった部分がある。高台なのだろうか。家のような建物が立っていることも分かった。行ってみれば分かるだろう。僕らは町の中へ歩いていった。十字路で立ち止まる。サヤは左右の道を見て言った。

「なんか、同じような道。」

「そうだな。見た目の違いが分からない。」

僕はサヤを見て言った。頷いて続ける。

「町の中を歩いてみよう。迷うかもしれないけど。」

「そうね。そうしよう。」

僕らはこの町を散策することにした。

どうせ今から次の町を目指して進むとしても夜は砂漠の上だ。だったら、町の中で休んでから行きたい。

どの建物も砂と同じような色を基に色づけがされていた。

これじゃあどこへ行っても同じ建物に見えてしまう。

しかし、建物を良く見ると、彫刻が施されている。住むための住居

ですら彫刻を施している。

歩けば歩くほど細い道を見つけ細い道へ入っていく。

まずは外から見えた高台へと行こうと思った。

町から見える高台には建物が建っている。

その建物は壁のように建てられている。

まるで、来るものを拒む高台。高台へ昇る場所を探すことにした。

ある道に入ると僕は少し驚いた。

「うわっ。」

そこには、牛が足を曲げて休んでいた。

その横を何も気にせず通り過ぎる人々。

この地域ではよく見られる光景でも、やはり見たときには少し驚く。僕らはその牛の横を通り、前へと進んだ。通過する途中に牛の声が聞こえてくる。一度立ち止まって牛のほうを見てしまった。僕らの住んでいるところとは違う。目に見える全てが違って見えた。

同じような道をぐるぐると歩き回りつつ高台へと近づいていった。高台の周りへと着く。近づいてわかったことだが、この高台自体が大きな建物のようなだ。

「城の壁見て何してんだい。」

僕らがこの高台にある建物を見上げていると。

後ろから男の声がした。

振り向けば現地の人らしいそれなりにひげの生やしたおっさんが居る。

「お城。」

サヤがそのおっさんに聞く。

「そうさ、かなり昔に立てられた城らしくてな。元はこの周りの建物は無くて、このお城しか無かったらしいぜ。」

おっさんはそう言いながら、僕らが来た方向を見た。

「へえ。」

僕は関心を持ってしまった。この城はなぜこんな砂漠の真ん中に建てられなければならなかったのか。

「それから回りに家が出来て今の形になったそうだ。この城も町も砂岩で造られてる。だから人はこの町をこう呼ぶんだ。」

そこでおっさんは僕らを見て続けた。

「金色の町ってな。岩が黄色い色をしているからね。そう呼ばれたらしいよ。」

「金色の町か。なんか凄いな。」

僕はそう言いながら町を見た。多分、城の上から見たほうがいいんだけど。

「そうね。」

サヤも僕と同じように目の前にある建物を見ていた。

「まあ、ここから見るより城のほうに上がって見てみな。簡単に入るから。」

おっさんの言葉をちよつと信じて行ってみようかと思った。

それに、高いところからこの町がどうなっているかを知りたいって気持ちもある。

城門への道はなぜか狭かった。

なぜにこんなに狭いのかとちよつと思った。

門前で急に広がる。門をくぐるとそのまま坂道を登ることになる。

それを越えていくつかの階段と、会う人への返答を繰り返す。

途中で会う人に、ここには宮殿や寺院があると言われた。それは降りてきてからでいいだろうと思って先に進んだ。

そして、下の町が見えるところへ出た。

金色の町だと、あのおっさんは言っていたけど。本当にそうだと思った。見渡す限りが黄色い……いや金色だ。砂漠まで同じ色をしているから凄く大きな町のように見えてしまう。

風が僕らの間を通っていく。日が高いところまで来そうだ。

僕らは降りて、ここに来るまでに見つけた場所へと向かった。

まずは寺院だろうか。行ってみた。外側もなかなか凄い建物だと思

った。そして、傍にいた人に聞くと中に入れるとのことだった。なんかいとも簡単に。

僕らは中に入った。中には、外側以上に彫刻が細かく一体どのくらいの間がどのくらいの年月をかけて造ったのか気になった。話によれば、この寺院の宗教の信者はこの地域でもあまり居ないらしい。信者がちよつとずつお金を貯めてこの寺院を造ったのかもしれない。この城自体も含めて、この寺院もこれから見るであろう宮殿も長く時を越えて僕らが見ている。この時まで残っていることがありがたいと思う。誰かが後世に残そうとしているのだと思った。

僕らは中を見た後、次へと向かうことにした。

次は宮殿だ。入れるだろうか。どうだろう。

宮殿前に居る人に聞くと普通に入れた。

中を見れば絵が所々に描かれていて、色を沢山使っているためか色鮮やかに見える。

ぐるぐると視点を変えるとそれぞれ違う絵が見えた。

光の差すほうへ向かうと外の景色が見えた。眺めは凄くいい。さすが宮殿。

屋上へと上がれるらしい。僕らは行ってみた。

「わあ。すごい。」

「凄いな。」

僕らは素直にそんな言葉を発していた。いや、少なくとも僕はそうだ。

先ほど城の端から外を見たときの眺めの良さの比じゃなかった。本当に遠くまで見渡せる。

ここで昔の人は何を見ていたのだろうか。

迫り来る敵を見ていたのか。凄く気になるが、聞けない。まあいいか。

僕らは、お互い話しながら眼前に広がる町を見ていた。

それから、僕らはちよつと変わった形の岩を見つけた。

よく見るとこの城と同じ形をしているんじゃないかと思う。
昔の人の技術がどの位なのか本当に知りたくなった。

第三十二話 緑無き丘

第三十二話 緑無き丘

2237年 秋 南アジア

金色の町を出てからしばらく経つ。目の前には川があった。しかし、その川は今にも枯れて川としての機能を果たさなくなりそうだった。渡る為の橋など近くには無く。僕らはそのまま川を渡ることにした。川に踏み込むと、体重で足が砂の中に埋まる。

水分を含んだ砂らしい。向こう岸に行くには面倒そうだ。足が砂だらけになりながらもなんとか川を渡った。

渡りきるために力を使ったためかその場に座り込んでしまった。

一緒にいるサヤも渡りきると地面に座り込んだ。

二人とも座って、今渡った川を見る。

「久しぶりの水かと思ったら、ほんの少ししかないな。」

僕は少し息が上がっていた。水を含んだ砂というのは意外と重い。無駄に体力を使ってしまった。

「砂って乾いていても水を吸っても厄介なのね。」

サヤは今渡ってきた川の道を見ながら言った。

僕らはしばらく休むと再び歩き出した。

そのまましばらく歩くと真っ直ぐに伸びた道を見つけた。しかし、この道はおかしなことに近くの道に繋がっていない。

それに、何か堅い材質で道は出来ていた。

サヤがその得体の知れない材質で出来ている道を足で踏みつけている。それを止めると地面に向かって拳を振り下ろした。

土ならどんなに固くてもそれほど痛くないはずだ。

「痛い。」

サヤは拳をさすりながら唸っている。。

本当に痛そうだ。とりあえず土じゃないことは確かだと思う。

僕らはその堅い道に沿って歩いてみることにした。

歩き続けると、道の反対側も同じように他の道とはつながって居なかった。この道はなんのために出来たのだろうか。そして、この道は何で出来ているのだろうか。

気になるが誰に聞くことも出来ないので、目の前に見える道へと歩いていった。

その途中、ふと左側を見ると、いくつかの建物が見えた。

「あれ。あれって村じゃないのか。」

僕は立ち止まってサヤに言う。

村だろうか、村なら人がいるかもしれない。

サヤも僕が見る村を見て言った。

「村かもしれないね。」

そして、僕を見て続ける。

「行ってみる。」

その言葉は疑問形で、僕へ聞いてきた。

「行ってみよう。」

僕らは方向を変えてその村へ行ってみることにした。正直村であるとは言い切れない。だけど、村だったら人がいるわけだから休めるかもしれない。

僕らは先ほどの川を渡った疲れを体を感じながら村らしき場所へと歩き出した。

道を真っ直ぐ行くことで、先ほど見た村らしき場所に着く。道の両側に住居らしき建物はあるもののそれぞれが長年使われていないように見えた。

実際に人が居るか確認したところ僕ら以外の人間は見つからなかった。

「人なんて居ないね。」

サヤが僕を見て言った。

「そうだな。」

僕はそう言いながら、村を通ってなお続く道を見た。

そして、まだ続くその道を見ながら僕はサヤに言った。

「この道をもう少し進んでみよう。何かあるかもしれない。」

僕はそう言い終えるとサヤを見た。

サヤは僕へ向かって頷いた。

「そうね。行ってみましょう。」

僕らは村を抜けてその向こうへ行くことにした。

何かあるかもしれない。そんな気持ちだった。

村を抜けてしばらく歩くと道が四本に分かれていた。正面に二本と

左右に一本ずつ道がある。

正面よりちよつと右手には何か建物らしきものが見える。僕らはそ

こへ行ってみることにした。

少し曲がった道を歩きながらその場所へと近づく。

近づけば、建物全体が小さな四角い石を積み上げて出来上がったい

た。前にもこのような小さな四角い石を組みあわせて建てられた建

物を見たような気がする。

その小さな石は見渡す建物全てに使われていて、一体どのくらいの

石が使われたのかと考えてしまう。右を向けば塔のような建物が見

える。石が高く積み上げられたものである。見える範囲の建物はみ

んな白く砂の色をしている。

そういえば、先ほどから木々が全く見当たらない。これまでそんな

地域を歩いてきた。だから、無いことが当たり前だと考えてしまっ

ているのかもしれない。川が近くにあったので、もしかしたらと少

しは思ってしまった。

今見ている建物だつてそうだ。木々が周りには見当たらない。全く

砂と石しか見えない世界だ。こんな世界で人間が生きられるのだろ

うか。そう考えてしまう。

目の前には門のような部分があり、中に入れるようだ。僕らは入っ

てみることにした。

入ると外からは見えなかった部分が沢山見えた。まるで迷路のような形に建物は作られており、どう行けばいいかよく分からない。

サヤは辺りを見回している。

中を少し歩いてみると左に階段がある。それは今居る高さよりも低い位置に繋がっていて四角い空間を作っている。

サヤは僕が見るこの空間に気が付いたようで、階段を下りてその空間の中に入っていった。

サヤはそこでぐるぐると動き回っている。僕はサヤが何をしているのかはよく分からないので気にしないことにした。

僕はこの空間をしばらく見ていたらふと思いついた。

この空間は水を大量に入れたら水浴び場にでもなりそうだと思った。いや、実際そう使われたのかもしれない。それ以外に使用するとしたら何か品物を置いておく倉庫かもしれない。とはいっても倉庫ならばもっと大きいものだと思うし、日が当たる場所にあえて作らないのではないだろうか。まあ、石で造られた部分しか僕らは見ていないので正直何に使われたかは分からない。

仮に水浴び場だとして考えてみる。その場合は周りに水の手に入るころはあるか。先ほどこちらに来るときに見えた川が考えられた。今は少ししか流れておらず。砂に水分を与えて厄介なものにしているだけだろう。しかし、昔はもっと水が流れていたのかもしれない。その水を運んできて使っていたのかもしれない。

「おい。大丈夫。」

いきなり声が聞こえてきて、一人で考えることを止めた。

「んあ。」

声が間抜けだった気がするけど気にしないことにした。

そして、すぐに聞こえた方向を見る。

まあ、この場所で話しかけてくるのは一人だけだろう。

いつの間にかサヤが隣に居た。階段を下りて下にある空間をぐるぐると歩き回ったあと、飽きたので戻ってきたらしい。

そしたら、僕の思考がどこかへ行っていたので引き戻したとの事。そんなに考えていたのだろうか、それともサヤが僕が思ったよりも早く飽きて戻ってきたのだろうか。

ひとまず残りは歩きながら考えよう。

僕らはそのまま入ってきた方向と逆の方向へと進んでみた。相変わらず目に見えるのは小さな石が積み上げられた建物ばかりである。僕は周りの建物を見ながらまた考え出した。

そういえば、ここが人が住む場所として機能していたのは何時なのだろうか。人が見当たらない今は無いだろう。しかし、このような建物があるのだから何時かは人が住んでいたのかもしれない。もし人が住む場所として一度も機能していなければなんのためにこんな建物が造られたのだろうか。気になって仕方が無い。

建物を出ると、目の前にはまた建物が見えた。

そちらは先ほどの建物よりも小さい建物であった。同じように小さな石が積み上げられて出来上がっている。

その建物を抜けるとまた他へと道が伸びていた。

そちらに行けばまた同じような建物があった。

同じような建物がこの辺一帯には複数存在するらしい。それぞれが一本から二本の道で他の建物と繋がっている。同じような建物が近くに何個もあるということは、ここは昔大きな町だったのだと思うた。なぜ今は使われなくなったのかの理由はわからない。

昔何かあったんだろう。あくまでも僕の勝手な考えだけど。

建物を見ていくと見たことのある道にでた。

左を見ると最初にみた建物が見えた。一周回って来たらしい。

太陽を見ると日が傾きだしていた。こんなところで一晚を過ごすのはどうかと思うので、今日中に行けるところまで行こうと思った。

僕らは石の積み上げられた建物に別れを告げ、次の地へと向かって歩き出した。

この地に人が居ない理由。それは何時分かったのだろうか。

第三十三話 きずあと

第三十三話 きずあと

2237年 秋 南アジア

緑なんて見ることの無かった丘を越えて僕らは歩き続けていた。あの日にみた建造物は何だったのだろうか。何時出来たのだろうか。まあ、今考えても仕方が無い。聞く相手なんて居なかったんだから。今は砂を踏みつける音はするものの砂漠と言える世界では無い地域に来た。

「あの山って凄く高そうだね。」

サヤが指指す方向を僕が見ると、僕らが進む方向の右側には高い山々が見えた。それらの山は僕らを寄せ付けたくないのか、それとも挑発しているのだろうか。その存在感を僕らに見せ付けている。

「本当だ。凄く高そうだな。」

僕はサヤが指差した方向にある山々を見ながら言った。

僕らはしばらくその山々を見ていた。

遠くからも高いと分かる山々。何故あんなにも大きな山々があるのだろうか。どうやって出来たのだろう。土を盛って作り上げたわけでは無いことは確かである。

人間が作れる程度の山じゃないことは分かった。それとともに、自然が作り出したものに恐ろしさにも似た感覚を得た。

「やっぱり高い山だけに。」

僕はそう言いながらサヤを見た。そして再び山を見る。

「頂上から下を見ると景色は良いんだろうな。」

僕は目の前にある山を見ながら、ふと僕らが住んでいた町の近くにある山を思い出す。

目の前にある山々には遠く及ばない高さの山ではあるが頂上までは

自分たちでも登ることが出来て、自分たちの町と海を見ることが出来た。

そこから見た景色がふと懐かしく思えた。周りには木々が沢山あって木の匂いがしたと思う。夏でもひんやりとした山の中。今はそんな山が恋しい。

「ちよつとカイ。大丈夫。」

ああ、またサヤに現実引き戻される。懐かしい記憶に浸っていたのに、なんてことだろう。今ここでその記憶を思い出そうとしても記憶の中だけだから実際に目、耳や手で触れる事は出来ない。

僕は両手で頬を軽く叩いて、現実を見ようとした。

「ああ、悪い。早く行かなきゃな。」

そう思つてこれから行く方向を見ると何か見えた。

「なあ。」

僕はサヤを見て言つた。そして再び前を向き、見つけたものを指差した。

「あれつて、町じゃないかな。」

サヤは僕が指差す方向を見ると僕へ言つた。

「そうみたいね。」

そして僕のほうを見て続けた。

「行つてみましょう。」

僕はサヤの言葉に頷き。その町へ向かつて歩き出した。空を見れば、日が傾きだしていた。

町に近づくにつれて僕は嫌な予感がした。遠くからでも見える一部が崩れた建物。廃墟の可能性も考えたが、これだけでは誰も居ないとは言えない。だから、かまわず町へと向かつた。

僕らは町に着く。ここから見える建物はみんな崩れかかった建物ばかりである。老朽化したためか何なのか、僕らには分からない。

「町の中へ入つてみよう」

僕の言葉にサヤは頷いてくれた。

僕らは町の中へと入っていく。

視界に入る建物全てが崩れかかっていた。

修復をしていないために今のような崩れた状態になっているのだろうか。

足元で石の擦れる音がした。

それとともに硬い感触が足に伝わる。

「えっ。」

僕は直ぐに足元を見た。

足元には色々な形の石が見える

「ん。」

サヤは僕を見ながら次の一步を踏み出す。

「わっ。」

サヤも石を踏んだようだ。直ぐに踏み出した一步を戻して足元を見ている。

「何で石が散らばっているのよ。」

サヤが僕を見て聞いてきた。

僕はしゃがんで石を見る。

そして、傍にある建物を見上げた。

その建物は壁が大きく崩れていた。この壁に使われていたものが今は足元にあるんだろう。

建物が崩れたときに出来た破片が道に散らばっているということか。

「感触が悪いけど。この上を通ろう。」

僕は立ち上がりながらサヤに言うと、そのまま石の上を歩き出した。

「ちょっと。待ってよ。」

背後からサヤの声が聞こえる。振り向けば、僕を追って石の上をゆつくりと慎重に歩いてきている。

僕はサヤが渡りきるまで待っていた。

「よし。行こう。」

サヤが渡りきると、僕はそう言ってまた歩き出した。

相変わらず周りの建物は一部が崩れていて、人影も見えない。
ただ何処からか吹く風が僕らの間を通り抜けていくだけだ。

「誰も居ないね。」

サヤはそう言いながら辺りを見回している。

「あれ。」

サヤが何かを見つけて立ち止まる。

僕も立ち止まり、サヤの見る方向を見た。

そこには緑色の布を被った何かが、少し離れた建物の入り口そばに寄りかかって居た。こちらには向いておらず、顔は見えない。

「人間かな。」

僕にはそれがうずくまった人間に見えた。

「そうかもね。」

サヤにもそう見えるらしい。

僕らは近づいてみることにした。近づいて僕は話しかけてみる。

「あの。」

布を被った何かを前から覗こうとしたとき、道に沿って風が吹いた。
その風で緑色の布がどこかへ飛ばされた。

「うお。」

僕は思わず声が出してしまった。そこに居たのは人間には間違いなかった。しかし、既に骨になった人間だった。

「いや。」

サヤも骨を見て後退る。

その骨はほとんど原型をとどめていなかったが木の棒を握む手から腕はほぼそのまま残っていた。

僕は周りを見回してみた。先ほどは全く気がつかなかったが、良く見ると所々に骨が散らばっているのが見えた。

「争いでもあったのかな。」

サヤが心配そうに僕に聞いてくる。

「そうかもしれないな。」

僕は周りに見える骨たちを見ながら言った。

今人間が僕らに襲ってくるというのなら、僕らはそれに対して対処が出来ないだろう。何時も人間以外の動物を相手にしてきたことが理由だと思う。

「建物の中に入ってみよう。」

僕はそう言つと傍にある建物に踏み入った。

「ちよつと、待ってよ。」

さつきも同じ言葉を聞いたが、今度は力なく口から出てきた。

建物の中は荒れていて、壁近くには骨の塊が幾つかあった。それらは外に居た人間の骨よりも原型をとどめていた。そして、人間の骨とはこうだと言わんばかりの存在感を持っていた。

周りを見れば石の塊が落ちている。

天井を見上げると二階部分が見える。二階部分の床が、一部抜けているようだ。それでも階段はあり、上に上れるようになっていた。

「上に上ってみよう。」

僕はサヤを連れて階段を上ってみる。

二階へ上がると一階部分が見えて恐い。

「落ちたら大変だね。」

床が抜けた部分を見たサヤが、僕を見て言った。

落ちたら怪我は確実だろうな。

窓から外を見ると下からは見えない光景が見えた。気がつかなかったが、良く見ると道のいたるところに骨が見える。やはり人間の骨だろう。

隣の建物を窓から見れば周りはそれほど崩れていないものの中は何も無い状態に見えた。

いや、建物なら家具とか机とかそういうものぐらひは置いてあるものじゃないのか。

まあ、争いで色々持って行かれたとも考えられるか。

「隣の建物も中は何も無いみたいだな。」

僕はサヤを見て言う。サヤは道側の窓から外を見ていた。

「今日はここに泊まりそうだね。」

サヤは僕を見て言った。

「え。本当か。」

そうなるのかどうなのか、僕も窓へと向かう。
窓から外を見ると、日が落ちようとしていた。

なので、今日は仕方なくこの町で夜を過ごすことになるようだ。

「泊まりで決まりみたいだな。」

僕はサヤへ言う。参ったといった気持ちだった。

さてと、食えるものが無いか辺りを探してこようかな。

僕らは今日の夜を越えられるように準備を始めた。

第三十四話 離脱

第三十四話 離脱

2237年 秋 ヨーロッパ

私やセイジ、他のみんなはレイとルイスに呼ばれてアジトの一階へと集まっていた。

みんなが何時も座るテーブルは出入り口側と奥の調理場側の二列に並べられている。

出入り口側のテーブルにはレイ、ルイスと昔から居る仲間が座っていた。

私やセイジ、ケイトを含む他のみんなは調理場側のテーブルに座る。もちろんグラン、ウィリアムさんやミナもこちら側のテーブルにっている。

全員が着席した後、沈黙が空間を支配した。

「話とはなんだね。レイ君、ルイス君。」

異常な状況であるにも関わらず、その沈黙を破ったのはウィリアムさんだった。

私はウィリアムさんを見た。彼を見ると状況を把握していないようには見えない。

椅子を引く音が聞こえる。聞こえた方向を見ると、レイが立っていた。レイの顔からは何かをこらえているように見えた。

次の瞬間、レイは両手で勢い良くテーブルを叩く。そして、私たちを見て言った。

「もうこんなことはやってられない。」

レイの声が一階に響き渡る。

「あれからもう一年経っている。しかし、何も進展は無い。」

レイの隣に座っているルイスが私たちを見て言う。

実際のところ船の襲撃をするのみで施設の奪還は行動に移されていない。敵から得た資料はあるもののそれがあつたからといって施設を取り戻せるわけでもない。私たちは縮こまって一步を踏み出せないでいるのと同じである。

実際のところは、ケイトの情報から相手の人数が多すぎる理由で手を打てないでいる。数十人が敵う人数じゃないことは分かっているでは、何故ルイスやレイは今この状況を作り出したのだろうか。

「お前らは施設を取り戻す気が無いんだろ。」

レイは私たちに向かって言い放った。

気が無いわけじゃないのに。

「ふざけるな。もしそうなら、俺は今ここに居ない。」

横を見れば、いつの間にかグランが立ち上がり、テーブルに手をついて言い返していた。

私もそうだと思う。施設を取り戻したい気持ちはある。だけど、どうやって取り戻すというんだろう。もっと人間が居れば、もっと私たちに力があれば取り戻すことも出来ると思う。

グラン自身は、元は間違いで私たちと敵対してしまった仲。グランとウィリアムさんの間には私たちの知らない深い仲があると思う。私たちは、それが無かったら今頃グランに殺されていたのかと思うと恐い。そしてグランは、カールを知っている。カールを自分の手で殺すとウィリアムさんに告げたものの昔の気持ちが邪魔をして決心がつかないと言っていた。自分以外の奴がカールを殺すなら、俺はそのためなら何でもすると言っていた。だったら、グラン自身に手を下して欲しいところだけど。それはそれで難しいということなのかもしれない。

だから、彼は施設を奪還する日までは必ず居るだろう。

「ここまでやってきた行為が無駄だったって言うのか。」

隣に居るセイジが椅子に座ったまま口を開く。

セイジの目はテーブルを見ていて、その声は相手では無く自分自身に言っているように聞こえた。

セイジの目が正面のレイやルイスを捉えると、いきなり立ち上がった。言った。

「死んだ奴らの行為も無駄だったって言うのかよ。」

普段は聞かないセイジの大きな声に、レイやルイスたちを見ていた私は反射的にセイジを見てしまった。

この一年以上の間に何人もの仲間が死んだ。船を襲撃したときに死んでいった仲間たち。その仲間たちの死は無駄だったのだろうか。

いや、違う。私は無駄では無い思う。小さいにしろ。相手の邪魔は出来た。だから、全くの無駄じゃない。これは、無駄じゃないんだ。無駄とは言っていない。しかし、このまま続ければ無駄になりかねないんだ。」

ルイスが冷静に私たちに言う。ルイスの目は鋭い目つきになっていた。

「だから、俺たちが施設を奪還してくる。」

レイがそう私たちに言う。たった十数人である島に乗り込んで、施設の奪還をしようというのだろうか。

不可能とは言わない。だけど、可能であるとも言わない。

「そんなの無駄だ。」

セイジがルイスたちに言う。言い終わると、セイジはケイトを見る。そして続けた。

「相手の数はケイトから聞いて知っているだろう。」

実際のところ相手の数が私たちをおびえさせていることは確かである。

「無駄は承知だ。だけど、もう我慢できないんだ。」

レイがセイジに言う。彼の顔から、もう我慢の限界だってことは分かった。

「お前たちは短いが、俺たちはこうしてきた期間が長いんだ。」

レイやルイス側に居る男の一人がそう言った。

私たちがこの集団に加わる前から居た人だった。だから、長くこの中に居るがゆえに早く事を成したいと思うんだと思う。

「俺たちは、これから施設を取り戻すために島へ渡る。」

レイが私たちに言う。その目は真剣だった。そして続ける。

「もし本気で施設を取り返したいと思っっている奴が居るなら一緒に来い。」

レイは私たちに言い切ると出入り口側に居るルイスや仲間たちを見て言った。

「さあ、行こうか。」

レイの言葉で出入り口側に居た人たちは立ち上がり、出入り口へと向かう。

「ちよつと、待て。考え直すんだ。」

彼らはセイジの声に全く反応せず。ただ黙って扉を開けて順に外へ出て行く。

「お前らは行くな。これは命令だ。」

グランが部下にそう言っている。頭を信頼しているのか、グランの部下はじつとしている。

「彼らを見に行ってください。」

突然、ケイトが私たちを見て言った。

「あなたは彼らと一緒に施設の奪還をする気なの。」

私はケイトへ聞いてみた。レイの言葉を聞いたこちら側の人間の中で、誰一人彼らに付いていない。

「私は彼らの行動を見てくるだけです。」

ケイトはさらつと言った。ケイトは偵察をしている人間なので、見た情報を伝えるだけということか。

「危なくなったら助けるの。」

私はもう一つケイトに聞いてみた。その辺りが重要だと私は思う。私たち二人がこの集団に加わった時、ケイトはルイス、レイや他の仲間と居た。ようははじめから居た人間なのだ。仲間だと思うなら助けると思うのだけど。どうだろうか。

「しません。私は見ているだけです。」

ケイトはそういい切った。

「なら、行つてらっしゃい。」

私はそう言つとケイトとのやり取りをやめた。

「行つて来ます。」

ケイトはそう言つと、こちら側の人間でただ一人施設のある島へと向かった。

なぜ、ケイトが昔から居る人間なのに、こちら側に居るのか。その理由は一緒の部屋になつてゐるグランが教えてくれた。レイやルイスに呼ばれて一階に向かう前に、ケイト自身がグランに言つたのだという。

ケイトは、自分が戦力になつたとしても偵察の仕事を他の人間に任せられるか不安であると言つていた。また、勝てる見込みが薄い戦いには参加したくないこと。レイとは仲が良いほうだったが、他の奴とはそんなに仲が良いわけじゃないことを言つていた。

この結末はどうなるのだろうか。私たちはただ待つしかなかった。

次の日の朝になり、私はベッドから起き上がる。隣ではセイジがぐっすり眠つてゐるようなのでほつといた。背伸びをしながら部屋を出て一階へと続く階段を下りた。

まだ、朝早いためか物音が聞こえ無い。なんとも静かな時間だと思ふ。

一階のテーブルに座つて目覚ましに水を飲みたいと思つた。調理場に行つて水が汲んであるか確認するものの容器は空のようで汲んでこないといけないようだった。

ああ、面倒だと思いながらテーブルに座つて辺りを見ると、誰か先客が居た。

自分よりも先に一階に居たことにびっくりしてちよつと声を出してしまつた。

相手はこちらに気がついたらしく。

「ああ、おはようございます。」

私にそう言ってきた。

よく見るとケイトだということが分かった。

「あれ。ケイト。」

私はそう言つと、椅子から立ち上がり直ぐに階段に向かった。そして、階段前で二、三階へ聞こえるように大声で言った。

「みんな起きて、ケイトが戻ってきた。」

私の声が聞こえたのか二階の人間は降りてきた。みんな眠そう。起こさなかったほうが良かったかな。

三階からは誰も降りてきていないようなので、私は三階まで行つて大声を出してみた。

「何、お姉ちゃん。」

ウィリアムさんと共に部屋から出てきたミナは眠そうだった。セイジもグランも起きてきた。

「ケイトが戻ったのか。」

グランが私に聞いてきた。朝なのに目が据わっていた。

「うん。一階に居る。」

グランはそれだけ聞くと一階へと降りていった。

「朝早いよ。」

グランと違つてセイジは朝が駄目だ。目を擦りながら私に話しかけてきた。

「ケイトが戻ってきたの。さつさと一階に来なさい。」

私はそれだけ言つと一階へと降りた。一階ではみんな眠い目を擦りながらそれぞれ椅子に座った。昨日と同じテーブル配置なので、ケイトだけ出入り口側に座っている。遅れてセイジが来て椅子に座った。

みんなが座ると誰から言葉を切り出すか決まらず沈黙になる。

「君だけが戻ってきたということは。」

ウィリアムさんがそうケイトに言う。そして続けようとした時。

「ええ。彼らはみんな捕まって殺されました。私の目の前です。」
ケイトはいつもより声が低いものの得られた情報をただ開示するよ

うに答えた。

「お前、見殺しにしたのかよ。」

一番眠そうだったセイジが言った。

言い終えると椅子を立ち上がり、ケイトの傍に行つてむなぐらを掴んで言った。

「なあ、そうなのかよ。」

セイジは大声で言っていた。もう彼らは居ないんだ。セイジはケイトを今にも殴るんじゃないかと思えた。

「止めてセイちゃん。」

私は叫んだ。彼の行動を止められるか分からなかったけど叫んだ。

私はそういう状態だったから、グランがケイトとセイジの間に移動していたことに気がつかなかった。

「止めるセイジ。」

グランが止めにかかる。セイジはグランの力でケイトから離された。

「私は言つたはずです。見ているだけだ。」

乱された服を元に戻しながらケイトはセイジに言った。そして続ける。

「彼らが捕まるとき、私も助けようか考えました。しかし、彼らの中に入れば私まで殺される。」

ケイトの声は低く。彼は下を向いたままになった。

「こいつも辛かったんだ。これ以上攻めるな。」

グランはケイトの肩を軽く二、三度叩きながら、セイジにそう言った。そして、再び椅子に座る。セイジとケイトもそれぞれ椅子に座った。

「一つ、手に入つた情報があります。」

ケイトは私たちを見てそう言った。

レイやルイスたちを失うことによつて得た情報。

その情報を元にまた再び始めることになりそうだ。

私は立ち上がり、みんなを見る。この人数でこれから戦っていくことが凄く不安だ。だけど、なんとかしなきゃいけない。私はみんな

の顔を見ながらそう思った。

明日は見えない。けど、頑張ってみよう。

第三十五話 侵入者

第三十五話 侵入者

2237年 秋 ヨーロッパ

私は目覚めると自室から出た。騒がしい場所を通り抜け、施設の出入り口への階段を上る。ちょうど、何十枚もの紙を持った兵士が私の後ろから来た。

「おはようございます。」

後ろから聞こえてくる兵士の挨拶に、階段を上りながらも反応する。

「ああ、おはよう。」

やはり挨拶は大切だ。自分が今ここに存在していることもわかる。

私は施設の扉を開けて外へと出た。太陽の下で、兵士たちは何時ものように建物間を行き来している。

既に太陽は高く昇っていた。少々寝すぎたらしい。ゆっくり眠れてよかったと思うことにした。

それから、何時ものように扉の傍で兵士たちを見ていた。

私は前回の船にて運ばれてきた私宛の手紙を思い出した。送り主は私の上司だ。彼が私に手紙を出すということは何時も良くないことが起こったときである。今回の内容を簡単に言えば、さつさときおくの運搬を完了させるとの事だ。彼にとっては、既に一年もの時間を使ってきおくの運搬をしているにも関わらず、まだ完了していないことが宜しくないらしい。

正直彼はここにあるきおく自体を見たことが無い。だから、そんな言葉が平気で言えるのだろう。

人の歴史は争いともにある。故に、膨大な争いに関する情報があるきおくの中には存在する。膨大がどのくらいかは私も知らないが、とにかく多いと思ったほうがいい。私も全てを見尽くしたわけでは

ない。争いに関する情報ならまだしも、きおくに含まれる全ての情報を見ようとするなら一体どのくらいの時間がかかるか分からない。全てを見尽くしたときに自分が生きているかさえもだ。

きおくの取得、整理、運搬は急ぐように言っている。しかし、あまりにもきおくの量が膨大であることは毎日施設の階段を上ってこの位置に来る私が良く知っている。

それとともに、時折船を襲撃してくる輩には本当に迷惑をしている。痛い目を見たにも関わらずなお攻撃をしてくるとはどういう考えなのか知りたくなる。攻撃を受ければ、その船に載っていた情報が相手の手に落ちることになりかねない。ようは、こっちが頑張って書き込んだきおくの一部が無駄になっていくのだ。どうしようもない気持ちになる。どうにか倒したいが、相手も強さを増しているように見える。どうにか手は打てないだろうか。

あとはテリーに聞こう。一人で考えても仕方が無い。それに、きおくの運搬状況を把握しているのは彼だ。

落ち着くと、急におなかに何も入っていないことに気がつく。食事を取って落ち着こう。

食堂にて兵士たちと食事をとる。とは言っても中途半端な時刻なので、タイミングを逃した兵士が十数人ほど、食事をしているぐらいだ。一通りの食事がのったトレーを持って席につく。この時間だと誰とも喋らず邪魔されずに食事が出る。いや、違うか。決められた食事時に食べたほうが急な用件を食事時に頼まれたりはしないだろう。あまり考えずにさっさと食べてしまおう。

食事を取ると、糖分が補給されて落ち着いてきた。

食堂を出ると、日が傾きだしていた。

まずテリーを探そう。会議場か施設内か。ひとまず行ってみようか。食堂を離れて会議場へと向かう。会議場は食堂から少し遠く、施設を中心にほぼ正反対の位置にある。施設よりも遠い位置にあるが、

居る確率が高いので行ってみよう。

行く途中にも忙しそうに兵士たちは動いている。あと三、四時間すれば、仕事はおしまい。彼らは休みに入れる。もう少し頑張ってもらおうか。

私はそう思いながら、会議場へと向かった。会議場の布を持ち上げて中を見る。誰も居ないようだ。なら、施設内に居るのか。布を持った手を離すと施設へと向かった。

施設の扉を開ける。入ると朝と同じ騒がしい状態だった。階段を下りながらテリーを探す。

ここに居なければきおくの部屋にいるのだろう。そちらへと向かった。

きおくのある部屋に入るとテリーが兵士の一人と話していた。テリーがこちらに気がつく。

「あ、大尉。」

テリーはそう言うのと、傍にいた兵士との話を終わらせてこちらに歩いてきた。

「何か御用でも。」

テリーが私に聞いてくる。それは御用があるから来たんだけどな。

「ひとまず外に出るぞ。」

こんな騒がしいところで話すことも無い。

私はそのまま出入り口へと続く階段を上り、外へと出た。

外へ出ると私たちはそのまま海岸へと向かおうとした。しかし、それは止められた。兵士たちが騒ぎ出したのだ。

騒ぐ兵士たちへと駆け寄ると、何人かが矢を受けて倒れていた。

大声とともに棍棒や剣を持った男たちが走ってくる。

まさか、奴らが来たのか。そう思った瞬間。

「兵を呼べ。早くしろ。」

テリーへ向かって叫んだ。まずい。このタイミングで襲撃してくるとは考えていなかった。

私は戸惑う兵士たちへと叫んだ。

「何をやっている。施設を守るのだ。」

私は剣を抜き。彼らへ向かって走った。飛んでくる矢を剣で払いながら敵へと近づく。

一人の男が、私へ棍棒を振り下ろす。私は左に避けると相手の右肩へと剣を振り下ろした。

「ぐあ。」

彼は叫ぶものの、再び私を見て棍棒を振り下ろそうとする。その時、彼は再び叫んだ。兵士の一人が後ろから彼を斬りつけたのだ。彼はすぐに斬りつけてきた相手のほうへ向こうとする。その兵士は、彼が方向転換を終えると続けて斬りつけた。胸の辺りを斬りつけられた彼は地面に崩れる。その兵士が彼に止めを刺そうとした。

「待て。」

その兵士の行動を制止しながら他の敵を見ると、他の兵士たちが苦戦しながらも半分近くを地面に倒していた。再びその兵士を見て言った。

「捕まえておけ。」

私はそう言うのと他の敵へと向かった。

いつの間にか矢は飛んでなくなり、兵士たちが彼らを囲んでいた。

兵士たちに全員を一行に並べるように言った。

侵入者としてここへと来た人間は十数人。いや、人数なんて数えることも無いが。

自分の剣を見ると少々血がついていた。相手が死んでいないんだ。この程度だろう。

「大尉。ご無事ですか。」

テリーが私に話しかけてくる。彼は息が荒く声が小さくなっていた。彼は剣を持っていたが、右肩あたりに攻撃を受けたらしく自らの体を赤く染めていた。

「負傷者の手当てを。お前もだ。」

私はテリーにそう言う。

「はい。しかし、私は。」

テリーがなんとか声に出して言った。いや、無理するなよ。

「負傷者を早く連れて行け。」

私は周りの兵士に叫ぶ。兵士たちはそれぞれ負傷した兵士たちを連れて行く。テリーも同じく連れて行かれた。

それを横目で見たあと、目の前の侵入者たちを見た。今は兵士に囲まれて私の前にひざまずいている状態の彼ら。多分ここに来たのだから、我々の悩みの種なのだろう。しかし、こんなにも少ないのか。「お前たちはこんな人数で我々に向かってきたのか。もっと居るんじゃないのか。」

私は侵入者らに聞いた。彼らは黙っている。人数が少ない、少なすぎる。まず、グランが居ない。ということは一部が来たということか。

いや、もう一人居るな。先ほどからこの状況を見ている奴が一人居る。こちらに攻撃をしてくるわけでもないからいいか。

「大尉。どうしますか。」

兵士の一人が聞いてくる。そうだなどうしようか。こいつらにアジトの場所を吐かせるのもいいな。だけど、吐いてくれるかな。まあ、ここで彼らを始末すれば、残りは中々手を出せないだろう。一人が見ている前ならその効果はあるはずだ。

私はしばらく考えた後、兵士を見て言った。

「そうだな。始末しといて。」

言い終えると、私はその場を離れた。後方からは侵入者らの悲鳴が聞こえてくる。邪魔するのなら始末するのみだ。

私はその足でテリーが手当てを受けているだろう場所へと向かった。

「大丈夫か。」

テリーを見つけると私は話しかけた。

「ああ、大尉。すみません。こんな状態になってしまっで。」

テリーも私に気がついて、こちらに体ごと向ける。彼の右肩には包帯が巻かれていた。

「なんとか大丈夫そうだな。」

私はテリーにそう言った。私にとって大丈夫というのは死にかけていない状態だ。

「そうだ。聞きたい事がある。きおくについてだ。」

「あ、はい。なんでしょう。」

私の答えにテリーは近くにあつた自分の手帳を取って開く。

「きおくの運搬は、予定では残りどのくらいかかりそうだ。」

私はテリーに聞いた。残りが分かればここを離れるときも分かるだろう。それに上司への返事も出来る。

「えっと。邪魔が入らなければあと四ヶ月ほどで完了する予定です。」

「テリーは手帳を見ながら私にそう言った。残り半年もしないうちに事が終わるということか。」

「そうか、あと四ヶ月で終わるか。そうか。」

先ほどよりも声を大きくして言った。そして、一度外を見る。奴が居る気配がする。大丈夫だろう。私はテリーを見て続けた。

「敵のアジトの方はどうだ。」

きおくの運搬の次に気になる内容を聞かなければならない。とは言つても、こちらはそれほど急いではいない。

「まだ、発見できていません。しかし、今日襲ってきた彼らから聞き出すことで見つかるかもしれません。」

私の質問にテリーは答えるも、今日襲ってきた彼らは既にこの世には居ない。

「奴らは始末した。」

私はテリーにそういうと、彼は驚きの顔をする。

「そんな。聞きだせるかもしれないのに。何故殺したんですか。」

「テリーの言葉も気持ちも分かった。だけど、他の方法があるんだ。」

「今回のことが相手に知られればそう簡単には攻撃してこないだろう。」

私はそう言いながら外を見る。そして、テリーを見て続けた。

「私たちの会話を聞いている奴がいる。」

小さな声でテリーに言った。

「ま、まさかそんな。」

テリーの声が一段と大きくなる。私は彼を見て一度大きく頷いた。

「だから、大丈夫だ。気にするな。」

私はそう言っと、体を回転させて帰る方向を向いた。

「じゃあな。ゆっくり休め。」

私はそう言いながらその場を離れた。

外へ出ると奴の気配は消えていた。

気配がしたほうを見て、私は一人ぼくそえんだ。

さあ、衝撃を与えてきてもらおうか。

第三十六話 砂の中の

第三十六話 砂の中の

2237年 秋 西アジア

僕らは誰も居なかった町を抜けて西へと向かっていた。そして再び砂漠の世界に入る。

そうは言うものの、ずっと砂漠の中を歩いているような感覚だ。砂だけの世界だろうが、砂で固められた建造物の世界だろうが。どちらも緑なんて無い。

変化といえば、足に伝わる砂の感触が戻ってきたことだと思う。

太陽は僕らを照らし、僕らは不安定な砂の上を歩く。

唯一の救いは、再び砂漠に入ってからというもの、点々と存在する村を発見できていることだ。それさえ無いならば、南下して海まで行きたくなる。いや、もう諦めて帰りたくなる。それだけ、この世界は気分の良いものではない。

立ち寄る村に居る人たちは、この世界に長く居る。だから、不自由の無い顔を出来るんだろう。だって、それが彼らの日常なんだから。僕らも、彼らのように慣れたら本当に楽だと思う。

今は歩こう。この砂の世界を越えるために。

外から来る風が生暖かい。太陽に熱せられた風だろう。

昨日は歩いた末に見つけたこの村に泊まった。

今は泊めてもらった家の中で、再び歩き出す準備をしていた。

「準備出来たか。」

僕はサヤに言いながら、大きな袋を背負い込む。袋には念のための食料が入っている。

食料を持たずにその場で狩りをしてもいい。しかし、効率が悪い。なにせ獲物があまり居ないのだから。

「ええ。大丈夫よ。」

僕の言葉にサヤは返事をした。彼女も背中に食料が入った袋を背負っている。

「ありがとうございました。」

僕らは家主にそう言うと言った。外では子供が遊んでいた。それを横目に僕らは村の出入り口へと向かう。

村の出入り口に立つと、目の前にある砂漠を見た。眼前の砂漠は砂だけで何も無いように見える。それでも歩く必要があるんだ。

「さあ、行こう。」

僕はサヤを見て言った。

サヤは一度大きく頷く。そして言った。

「行きましよう。」

僕らは砂の上を歩く。目の前に砂しなくても、それでも。

しばらく砂漠を歩くと、遠くに村が見えた。

「村だ。」

僕は遠くに見えるその村を見ながら言った。

「さっきの村と近いね。」

サヤが村を見ながら答える。僕らがさきほど出た村から思ったほど離れていない場所に次の村はあった。

空を見ると、太陽は昇りきったあたりだった。

あの村で今日を終わらせるかどうかは着いてから考えることにしよう。

「行ってみよう。」

僕はサヤを見てそう言った。サヤは頷く。

僕らはその村へと向かって歩き出した。

歩けば歩くほど遠くに見えた村は近づいてきた。ひとまず、見えた

村が蜃気楼じゃないことは分かった。

今は、日が暮れる頃に見つけた村へと向かっているわけじゃない。切羽詰った状態では無く、落ち着いた状態だ。僕らは急ぐことも無く村へ着いた。

そして村の中へと入る。村の中は他の村とあまり変わらない。外で遊ぶ子供の声、家の影でその光景を見る大人たち。

僕は周りの建物を順に見ていった。特に変わらないかな。

僕らは一人のお婆さんとすれ違う。

「あんたらこのまま西へ行くのかい。」

背後からの声に僕は振り返った。声の主は今すれ違ったお婆さんだった。

「ええ。そうです。」

僕は特に何も無く答えた。

「やめときな。あいつ等に食い殺されるよ。」

お婆さんは僕らに言った。

「あいつ等って。」

僕はそう言ったものの。お婆さんはそれ以上何も言わずにどこかへ行ってしまった。

「なんか、悪い予感ね。」

サヤは一度西側の村の出入り口を見たあと、僕を見て言った。

「今度は何かが居ることが分かってるだけでも良いだろう。」

僕は前を向いたままそう言う。そしてサヤを見て続けた。

「相手がどの程度なのか分からないんだ。うまくすれば、関わらずに済むかもしれない。」

僕は西側の村の出入り口を見る。

「行っって見よう。」

「うん。」

サヤは僕の言葉に返事をした。

さあ、どんな奴らがいるか見てみようじゃないか。

僕らは西側の村の出入り口へと向かう。その途中で、僕らを見る子

供たち。彼らはこの先に居る奴らを知っているのだろうか。何も言わずに僕らを見ている。そして、僕らは村の出入り口へと着く。

「どうなっても知らないよ。」

どこかから声が聞こえる。振り向くと先ほど声をかけてきたお婆さんが居た。

「あなたが言わないなら自分たちで確かめます。」

僕はお婆さんに言う。そしてサヤを見て続けた。

「行こう。」

僕らは村を出た。そして、砂漠を歩き出す。

「あいつ等って何者なんだ。」

僕はふと声に出して言ってみた。誰かが答えてくれるわけじゃないけど。

「あいつ等ってことは複数よね。」

サヤが僕の言葉に答える。そうだ、「あいつ等」というのだから相手は複数だろう。しかし、どんな奴なんだ。大猿や手長熊と来て次は。そう考えていると、僕らは村から大分離れていた。

「お婆さんの言うあいつ等は現れないな。」

僕は周りを見回しながら言った。

「もしかして、このまま現れなかったりして。」

サヤは笑いながら僕を見て言った。それならそれで良いんだけどな。じゃあ、あのお婆さんの言葉は嘘だったのか。

その時、少し地面が揺れる感覚があった。

「地震。」

サヤが誰にでもなく聞いている。僕も誰かに聞きたかった。周りを見ると、複数の位置で砂が少しずつ盛り上がっていることに気付く。次の瞬間、その中の一箇所から大きな物体が天に向かって垂直に飛び出した。そして、飛び出した位置に着地する。

「か、蟹。」

僕は着地した大きな物体を見てそう叫んだ。体長は僕らの身長を軽く越えている。

視界に入る複数の位置から次々と大きな蟹が出てきた。面倒なので大蟹と名づけよう。いや、そんな暇なんてない。

「蟹ばかりじゃないのよ。」

サヤも地面から飛び出してくる大蟹を見ながら僕へと言った。いや、そう言われてもわからないっての。気がつくと、六体の大蟹が僕らの前に揃っていた。

「く、食われてたまるもんか。」

僕は大きき蟹たちに言いつと、サヤを見て続けた。

「逃げるぞ。」

サヤは僕の言葉に頷いて、走り出す。走ってこの場所を越えようとしたが、砂の上を走るのは簡単な事ではない。暑さと砂の上を走っていることもあり走る速度は落ちていく。その間にも、大蟹たちは追いかけてくる。

大蟹たちはついに僕らの前に立ちはだかった。

「うお。」

僕はそう言いながら立ち止まる。サヤも同じく止まった。両側三匹ずつ。大蟹たちは並んでいる。

「くそ、こいつら。」

僕はそう言いながら、自分の剣を抜く。やられてたまるか。横を見ると、サヤも剣を抜いたようだ。

大蟹は大きなはさみを鳴らしながら僕らを見ている。このままじゃ食われる。

「うああああ。」

僕は大きき蟹に切りかかろうとした。

その時、目の前が真っ白な煙で覆われた。大蟹たちの叫び声であるう声が聞こえてくる。蟹って声が出るのか。いや、蟹じゃないのか。その中で、女性の声が聞こえた。

「あなたたち、早くこっちへ来なさい。」

声の主は分ならずとも、今は助かる確率の高いほうへ行こう。僕は剣を収めると、そばに居たサヤの手を取って声のする方へ走った。

煙を抜けると、正面には僕らよりも年上に見える女性が居た。右手で紐を付けた何かを横に回していた。僕らが彼女に近づくと。

「村まで走りなさい。」

そう叫びながら、右手で回していた何かを煙が消えかかって見えてきた大蟹に向けて投げる。大蟹の中の一匹に命中して、大蟹たちは再び濃い煙に覆われた。

彼女はそれを確認すると、僕らの後ろを走り出す。

「助けてくれてありがとうございます。」

僕は走りながら、後ろから来る彼女に言った。

「村に着くまでは安心できないわ。」

彼女はそう言いながら、後ろを見る。僕も後ろを見ると、煙の中には大蟹たちは居なかった。

「え。居ない。」

僕はそう言いながら、思わず走る速さを落としていた。それと同時に、サヤの手を離す。サヤが僕の前を走る形になった。

次の瞬間、何も無いところから大蟹たちが飛び出してきた。着地するとそれぞれに僕たちを追いかける。

「なにもんだ、あいつら。」

僕は再び走る速さを上げながら言った。

「知らないわよ。」

サヤが叫ぶ。

「二人とも村まで走り続けて。」

彼女はそう言くと、背中に背負っていた袋から先ほど投げた物と同じであろう玉に紐がついたものを出した。そして、玉を回し始める。前を見れば村はもうすぐだ。

「先に行つて。」

彼女はそう言くと、大蟹のほうを向いて立ち止まった。

僕は立ち止まりそうになった。それに気がついたサヤが僕の手を取る。

「走りなさい。」

命令口調で僕を無理やり走らせる。

遠くて大蟹の叫び声が聞こえる。振り向けば、彼女が後ろから走ってきていた。

「もうすぐだから。早く走って。」

彼女がそう言う。その直後に。

「ちゃんと、前向いて走りなさいよ。」

サヤが無理やり僕の顔を前に回す。

「今度後ろ向いたらひっぱたくよ。」

サヤの顔は笑っていたけど、声は低く怒りがこもっていた。これ以上怒らせないようにしないと。僕は前を向いて走る。

僕らは村の出入り口を通って、村の中に入った。僕は疲れてその場に座り込む。直ぐ後に彼女も村に入ってきた。

僕は大蟹たちを見る。村から少し離れた位置に居た。

「あれ。追いかけてこない。」

大蟹たちはその場で砂に潜って消えてしまった。

「ここには来ないわ。」

座り込んだ僕らの間に立って、そう言った。

「なぜ。」

サヤが彼女に聞く。僕も何故なのか知りたい。

彼女はある方向を見ながら言った。

「時間だからよ。」

それは太陽の沈む方向だった。今や太陽が沈みかかっている。あの
大蟹は太陽の光の下でしか活動しないとでもいうのか。

「日の暮れる時間は、砂蟹が巣に帰る時間。」

「砂蟹って。」

僕は彼女に尋ねた。

「あの生物の名前よ。砂の中の蟹。だから砂蟹。」

彼女は僕を見て言った。この時点で、大蟹は砂蟹という名称に書き換えられました。地元の間が呼ぶ呼び方に従いましょう。

「この時間でよかったわね。もう少し時間が早かったら。砂蟹たち

はここまで突入してたかも。」

彼女はなんとも軽い言い方をする。まさか、その時は最初から見てみぬふりをしているとか。時間を間違えれば、あのお婆さんの言う通りに食い殺されていたかもしれない。

そういえば彼女の名前はなんと言うのだろうか。

「あの。お名前は。あ、僕はカイって言います。」

僕は彼女に名前を聞いてみた。

「ああ、私ね。私の名前はレイラ。それとこちらのかわいい女の子は。」

レイラはサヤの顔を覗き込みながら聞いた。

「サヤです。」

それにはサヤ本人が答える。レイラは顔を戻すと、僕らに言った。

「砂蟹のいる場所を抜きたいなら夜しかないわ。」

そこで、レイラは一度頷く。そして続ける。

「それまで少し時間がある。私の家に来ない。食事をご馳走するわ。」

レイラは僕らに聞いてきた。

「いや、そんな。悪いですよ。」

僕は断ろうとする。

「いいじゃないの。行きましようよ。」

サヤが僕を見て言うてくる。まあ、お腹も空いているし、お邪魔しようかな。

「じゃあ、お言葉に甘えて。」

僕らはレイラの家へと向かうことにした。

「さあ、こっちょ。」

レイラがそう言うのと、僕は立ち上がる。そして、西の空を見た。西の空は太陽という光のもとを失ったことで、どんどん暗くなっていた。

第三十七話 砂蟹

第三十七話 砂蟹

2237年 秋 西アジア

僕とサヤはレイラのあとを付いて行く。彼女は村の中ほどにある家へと向かって歩いた。

「ただいま。」

レイラはそう言いながら家の中へと入っていった。

「おじやまします。」

僕らはその後、ゆつくりと家の中に入ろうとした。

「あ。」

サヤが何かを発見した。僕もサヤが見ている方向を見た。そこには、昼間会ったお婆さんが居た。お婆さんのほうも気がついたようだ。

「生きて戻ってきたんだね。たいしたもんだ。」

お婆さんの声は感心しているようには聞こえない。そして睨まれている。ちよつと恐い。サヤを見ると、既に目をそらしていた。

「ちよつと、お婆ちゃん。お客さんなんだから。」

奥からレイラが現れる。そうか、家族なんだ。レイラは服を着替えていた。暗がりでは気がつかなかったが、レイラは凄く綺麗な人だと思った。それは、僕個人の意見だけだ。

「ふん。私があんたに話さなかったら、こいつらは今頃あいつ等の餌だろうに。」

お婆さんはレイラを見て、そして僕たちを見ながら言った。

お婆さんがレイラに言わなかったら。時間を間違えていたら。今僕はここには居ない。

レイラは一度深呼吸をするとお婆さんに言った。

「結果良かったんだからいいでしょ。」

その声は少し怒りを含んでいた。そして、奥の部屋に向かいながら続けた。

「お婆ちゃん。夕食にするから手伝って。」

「はいはい。」

お婆さんはそう言いながら立ち上がって向かおうとする。そこで、顔だけこちらを向く。

「そこのお嬢ちゃん。あなたも手伝いなさい。」

お婆さんはそう言うのと奥の部屋に行ってしまった。

「あ、はい。」

サヤは荷物等を僕に預けるとお婆さんの後を追った。

僕だけが部屋に残された。男一人で部屋に居るのって意外と寂しい。しばらく経つと、良いにおいがしてくる。

「さあ、出来たわよ。」

レイラの声が聞こえてくる。料理を作っていた三人が、それぞれの品を持ってこちらの部屋に来た。

「さて食べようか。」

お婆さんが言い出す。全員がそれぞれの位置についた。

「いただきます。」

僕らは夕食を頂いた。

食事後しばらく休むと、レイラは僕らに言った。

「夜も暗くなってきたわ。そろそろ砂漠を渡りましょうか。」

そしてお婆さんを見て続ける。

「彼らを向こうの村まで送ってくるわ。」

お婆さんはレイラの言葉を聞いたあと、僕らを見た。そして、レイラを見て言った。

「気をつけて行ってくるんだよ。」

「うん。大丈夫だよ。」

レイラはお婆さんにそう言う。そして、僕らを見て続けた。

「出発するから準備をしといてね。」

レイラはそう言うのと奥の部屋に行ってしまった。

「あんたらは、一体どこへ向かっているんだい。」

準備を始めた僕等にお婆さんは尋ねた。

「ここからもつと西にあるヨーロッパです。」

僕はお婆さんを見て言った。

「そうかい。そこには、痛い目にあったって行く理由があるんだね。」

「はい。」

僕はお婆さんの言葉に返事をする。お婆さんはしばらく黙ったあと、僕らへ言った。

「理由は分らないけど、気を付けて行くんだよ。」

お婆さんのその声は、僕らに優しく響いた。

「ありがとうございました。」

僕らはお婆さんへ言うつと、レイラと共に家を出た。

そして、村の西側の出入り口へと向かう。空を見れば星が輝き、月が僕らを明るく照らしている。

出入り口へ着くと、レイラは僕らに言った。

「じゃあ、行きましよう。」

レイラはそのまま村を出て砂の上を歩き出した。

後ろを見ると、先ほどまで居た村が遠くなっていく。その遠さが、昼間に見た遠さに近づく。

「そろそろ砂蟹の巣を通るわ。」

レイラは立ち止まって僕等を見て言った。

僕は昼間のことを思い出す。途端に体が震えだした。もし再び現れたら、どうすればいいんだ。

サヤは僕の右手を優しく握ってきた。そして、僕の顔を見て言った。

「今度は、大丈夫だよ。」

その言葉で少し落ち着いた。根拠の無い言葉。だけど、それでも良かった。

「ここからは、静かに私の後を付いてきて。」

レイラはそう言うつと、ゆっくりと歩き出した。

僕たちもその後を歩く。一言も喋らずに。

すぐ傍には昼間会った砂蟹たちが居ると思うと心臓が飛び出しそうになる。いっそのこと、止まってほしいと思いたくなった。いや、止まったら生きていられないか。

それは凄く長く感じられて、これまでで一番体に悪い時間だった。前にいるレイラを見ると、立ち止まって大きく深呼吸をしていた。そして、僕らを見て言った。

「もう大丈夫よ。巢は越えたわ。」

レイラの言葉に、僕はその場に座り込んでしまった。そして、来た道を見る。もう村は見えない。どのくらいの距離なのだろうか。短いのか長いのか。僕には分からない。サヤを見ると、座って夜空を見上げていた。

しばらく落ち着くと、僕らは再び歩き出した。

「ねえ、なんで二人は西へ行くの。」

前を歩くレイラが後ろにいる僕らを見て言った。

「僕らは、過去の記憶を見るために旅をしているんです。」

僕は夜空を見ながら言った。

「過去の記憶って。」

レイラは僕に聞いてくる。

「レイラさんは、百年以上前に戦争があったことは知ってますか。」

僕はレイラに聞いてみた。それを知っているか知っていないかでは違う。

「それなら、お婆ちゃんから聞いたことがある。けど、凄く大きな戦争だったってことしか知らないわ。」

やっぱり戦争が起きたことしか知らないか。

「それより前のことは知ってますか。」

僕はレイラに聞く。ここで「はい」なんて言われたらどうしようかと思った。

「いいえ。戦争があったこと以外は知らないわ。」

レイラは僕にそう答えた。

「僕の知識もそのぐらいです。」

僕はレイラに言う。そして、続けた。

「だから……。」

「私たちは戦争以前に何があったのか。それを知るために旅をしているんです。」

言葉を続けたもののサヤに残りを持っていかれる。いや、持って行かないでよ。

「そう、それで過去の記憶は何処にあるの。」

レイラが僕らに聞いてくる。

「ヨーロッパ連合王国のロンドンです。」

サヤがレイラに言った。

レイラは立ち止まってこれから進む方向を見る。そして、僕らを見て言った。

「ヨーロッパまで行くのね。」

僕らは頷く。ここからは見えない未だ遠い所だ。

「そう。私も見てみたいわ。」

レイラはそう言う、前を向いて再び歩き出す。

それ以上は何も言わなかった。僕らもレイラも。

来た道を見ると、東の空が明るくなり始めていた。視線を前に戻すと村が見える。寝ずにここまで歩いて来たから眠い。早く村に着いて休みたいところだ。

僕らは村へ着いた。

「ちよつと待つて。」

レイラはそう言う、傍にある家へとそのまま入っていった。

僕らはその家の前で待った。まだ朝早いためか誰も外には居ない。しばらくすると、レイラが家から出てきた。

「ここは知り合いの家なの。二人ともこの家で少し眠っていくと良いわ。」

レイラはそう言う、再び家の中に戻っていった。

東の空を見ると、太陽が昇り始めていた。

「中に入ろうか。」

僕はサヤを見て言った。サヤは僕を見て頷く。そして、僕らはレイラの居る家へと入っていった。

第三十八話 ふたり

第三十八話 ふたり

2237年 秋の終わり ヨーロッパ

私は扉を叩く音で眼が覚めた。目を擦りながら起き上がる。隣を見れば、セイジがすやすやと眠っている。

立ち上がって、扉へと向かう。また扉を叩く音がした。

「お姉ちゃん。」

今度は扉の向こうから声が聞こえてきた。声の主はミナだろう。私は扉を開ける。

「お姉ちゃん。おはよう。」

部屋の前にはミナが居た。笑顔で私に挨拶をする。

「どうしたの。」

あくびをしながら、私はミナに言った。起きたくて起きたわけじゃないので体が言うことを利かない。

「外へ遊びに行こうよ。ねえ。」

ミナが私の体にくっついてくる。物をねだる子供のようだ。子供か、欲しいかな。

三階を見ると、何か寂しく感じられた。

「そうね。行きましようか。」

私はミナにそう言う。そして続けた。

「準備が出来るまで待っていてくれる。」

私はミナにそう言うと、ミナは頷いてくれた。彼女は自分の部屋へと戻っていく。私はそれを確認すると、外にある井戸へと向かった。外に出ると、空気は涼しい。そして、空を見れば晴れていた。

井戸から汲んだ水は冷たくて眠気を覚ますにはよかった。事を済ますと、三階へと戻る。

自分の部屋で身支度を済ませると、ミナの居る部屋へと向かった。扉を開けると、彼女は座って床の一点をじっと見ていた。ウィリアムさんは部屋の中には居なかった。

「準備できたよ。」

少し首を傾けながら、私はミナへ言った。ミナはその声に反応してこちらを見る。

「あ、お姉ちゃん。準備出来たの。」

ミナは私に言う。私は頷いた。

「じゃあ、行こうか。」

私の言葉でミナは立ち上がり、部屋を出た。

私たちはそのまま階段を下りて一階の出入り口まで向かう。途中何人かと出会い、それぞれに挨拶をしていく。朝なのかあのためか、みんな元気いっぱいというわけではない。

「ねえ、何処に行くの。」

私はミナに聞いた。何処か行くあてがあるのだろうか。

「内緒。」

ミナはうれしそうに私に言った。

外に出ると、太陽が私たちを照らす。

「私に付いてきて。」

ミナはそう言くと、勝手にどんどん歩き始めた。

「はいはい。」

私はミナにそう言くと、ミナの後ろを歩いた。

アジトから海岸へと出る。海は落ち着いていて、太陽の光を反射していた。

「海、綺麗だね。」

ミナはそう言いながらも歩みを止めない。

「そうだね。」

私はそう言いながらもミナの後ろを歩き続ける。海岸をしばらく歩くと、岩が沢山ある場所に到達する。ミナは岩と岩の間を上手に通り返けていく。私も、その後を追ってなんとか通

り抜けた。

「到着。」

ミナは私を見ながら言った。

海岸の両端を岩が囲んでいる。自分だけの海岸ともとれる場所だった。

「ここ凄いね。」

私はミナを見て言った。

「座ろうよ。」

ミナはそう言いながら、砂浜に腰を下ろす。そして、私を横に座るように促した。そこに私は座る。そして、眼前の海を見た。

「ねえ、良くこんなところ発見できたね。」

私は海を見たままミナに聞いた。

「他の人に見つからない場所を探してたら、たまたま見つけたんだよ。」

ミナは言う。ミナを見ると、同じように海を見ていた。私も海を見る。

しばらく私たちは黙ったまま海を見ていた。

「あのだ。」

私はミナを見て言う。ミナは私を見る。そして私は続けた。

「ミナはきおくのある施設にずっと居たんだよね。」

「うん。生まれたときから。」

ミナはそう言いながら海を見る。そして続けた。

「お父さんは海の向こうからあの施設に来たの。そして、この地でお母さんと出会って私が生まれた。けど……。」

ミナは一度空を見ると再び海を見て言った。

「お母さんは私が小さい頃に死んじゃった。」

私はそれを聞いたとき、何かがこらえ切れなくなつてミナを抱きしめた。何も言わずに。

「苦しいよ。お姉ちゃん。」

私はミナの言葉に、ふと我に返った。

「あ、ごめん。」

私がそう言つと前を向いて海を見た。海を見て思った。そういえば、まだ聞いていなかったことがある。

「ねえ、生まれたときから施設に居たつて事はさ。きおくも沢山見てきたんじゃないの。」

私はミナにそう言つた。小さい頃から身近にあんなものがあるのだから色々見ているだろう。

「うん。沢山つてほどでも無いよ。見るときはお父さんが後ろに居たし。」

ミナは私を見て言つた。

「え、なんでお父さんが。」

私はミナを見て尋ねる。

「お父さんが言うには、私が自分できおくの中から情報を取り出すことは良いみたい。だけど、それが良いものか悪いものかを私が判断出来ないから何時も見ているんだつて。」

ミナは海を見ながら私に言つた。

「やっぱりお父さんだね。」

私はそう言いながらミナを見た。ミナも私を見て頷く。それからしばらく、私たちは海を見ていた。

空を見ると、日が高く昇っていた。そろそろ戻らないといけない。

「そろそろ戻ろう。お腹空いたでしょ。」

私はそう言いながら立ち上がる。そして、ミナに手を差し伸べた。

「うん。」

ミナはそう言いながら、私の手を掴んで立つ。

アジトへと帰る道。高く昇りきつた太陽が私たちを照らす。

アジトに戻り、階段を上つて三階に着くと。

「お姉ちゃん。今日はありがとう。」

ミナは私を見て言つた。

「こちらこそ。ありがとうね。」

私もミナを見て言う。

そこで、ミナは何かを思い出す。そして、私の耳元でそつと囁いた。
「今日行った場所にあの人と行ってみたら。」

私はミナを見た。彼女は満面の笑みを浮かべていた。

「じゃあね。」

ミナはそう言いながら自分の部屋へと戻っていった。

私も自分の部屋へと戻ることにした。

第三十九話 争いのあいだ

第三十九話 争いのあいだ

2237年 冬の始まり ヨーロッパ

私はセイジ、マヤとウィリアムさんをアジトの一階へと来るように呼んだ。しばらくすると、三人がそれぞれ一階へ来る。

三人は私が座るテーブルへと座っていった。今や私の部下を除くと、一つのテーブルを囲めるほどの人数になってしまった。

「グラン、話ってなんだ。」

セイジが私に聞いてくる。私は一度深呼吸をする。

「これからの事さ。」

私はセイジを見て言う。そして続けた。

「正直これだけの人数で、施設奪還なんて無茶だと思う。」

私は三人に言った。

「同感だよ。レイヤルイスが居なくなっちゃったのが辛い。」

セイジはそう言いながら腕を組む。

「困ったわね。」

マヤが言う。本当に困った様子だ。

「私には、これ以上戦える知り合いは居ない。」

ウィリアムさんは、腕を組んで天井を見る。そして、続けた。

「どうしたらいいか。ううむ。」

「そこでだ。俺の知り合いを加えようと思う。」

私は三人に言った。すると三人とも驚く。

「居るんだったら、何故これまで仲間に加えなかったんだよ。」

セイジが言ってくる。セイジの言い分はもつともだ。

「セイジの言う通りだよ。」

私はセイジを見て言う。そして続けた。

「加えようとしている奴は、きおくを見たことが無いんだ。そんな奴を巻き込むのはどうかと思ったんだよ。」

「そうか、知らないなら何のために戦っているのか分からないよな。」

セイジは私に言う。

「それでも、ここまで来てしまったんだ。」

私は三人に言った。そして続ける。

「だから、今からそいつに会いに行く。そして、仲間になるように言ってみる。」

「グランくん。大丈夫なのかい。」

ウィリアムさんが私に言ってくる。

「大丈夫ですよ。必ず連れて来ます。」

私はそう言つと椅子から立つ。そしてセイジ、マヤとウィリアムさんを見る。

「それでは、行つて来ます。」

私は三人にそう言つとアジトを出た。

アジトから南下すること数日。私は彼のところへ着く。

そこは町の中にある何の変哲も無い小さな家。

扉を叩くと、彼は出てきた。

「ん、何か用か。」

家の中から顔を出す男。彼が私の求めた男だ。眠そうな顔で私に対応する。

「よお、リュシアン。元気が。」

私は彼に笑顔で挨拶をする。

彼の名はリュシアン。私の知り合いだ。彼は昔と変わらず細身の体で私の前に現れた。私の体型とは大違いだ。

「ああ、グランか。入れ。」

眠そうな顔をしたリュシアンはそう言う。

そして自分は家の奥に向かおうとした。そこでリュシアンは何かを思い出す。すぐに振り返り、私を見た。

「グラン。久しぶりじゃないか。何やってたんだ。」

リュシアンは私に言う。先ほどの眠そうな顔は何処かへ行ってしまったようだ。

「色々あつてな。ここに来ることになっちまったよ。」

私は頭をかきながら言った。

「ここに来るってことは、もう一度一つにならなきゃいけない状態になったんだな。」

リュシアンは私を見て言う。その声は落ち着いていた。

私たちは、昔行動をともにしていた。それは私があ国からこのヨーロッパへ来てからだ。その頃は全体の人数も今より少なかった。このヨーロッパで少しずつ部下を増やしていく。その中にリュシアンは居た。彼は集団の中で頭としての役割を難なくこなし、仲間からの信頼を得た。

そして、リュシアンと行動をともにするにつれて、彼を慕う仲間が増えていった。私はそれはそれでいいと思ったし、リュシアン本人は私と行動していたいと言っていた。それが出来なくなったのは集団の人数が増えすぎたためだった。あまりに増えすぎたために、全体をまとめることが難しくなった。

そこで私は決断をした。私とリュシアンをそれぞれの集団の頭として、今ある集団を二つに分割することにした。

人数的には綺麗に分割されることは無かった。

それぞれが別々の道を歩む朝。リュシアンは私に言った。どちらかが困ったときは再び一つになって行動をしよう。

その時が今なのだ。

「それで、何があつたんだ。」

リュシアンと私が椅子に座った後、彼はそう言った。

「今俺たちはロンドンに存在するある施設を奪還するために、何人かの仲間と一緒に行動をしている。」

私はリュシアンにそう言う。

「ロンドンに存在する施設って、あそこには誰も居ないし何も無いだろ。」

リュシアンは言う。やはり知らないか。

「あるんだよ。その施設はな。その中には百年以上前にあつた戦争以前のこの星の記録が全てあるんだ。」

私はリュシアンに言う。そして続けた。

「その施設を俺の知り合いの男に武力で奪われちまつたんだ。」

「なんか良く分からないが、その施設を奪い返せば良いんだな。」

リュシアンは私に言う。なんとか理解しているようだ。

「ああそうだ。そして、その男はきおくの中の情報を自分の国に持ち帰っているんだ。」

私はそこで一度深呼吸をすると続けた。

「戦争でも始めるのかもしれない。同じ国に生まれた人間として嫌になるよ。」

「同じ国って、あの国なのか。」

リュシアンはそう言う。

「ああ、だから止めなければいけないんだ。」

私はリュシアンに言う。そして続けた。

「リュシアン。一緒に施設の奪還を手伝って欲しい。頼む。」

私はリュシアンに頭を下げた。

「頭を下げるなよ。その状態だと、困るのはあんただけじゃないんだろ。手伝うよ。」

リュシアンはそう言うと言った家の外へ出た。そして、何かを叫んでいる。そして、リュシアンは家の出入り口から私に言った。

「外に出てみな。」

私はリュシアンの言葉を聞いて外に出る。

そこには昔行動をとにした部下たちが居た。人数は十数人ほどだ。

「今すぐに集まったのはこのぐらいだが、もつと居るよ。」

リュシアンは集めた部下を見ながら私に言う。そして私を見て続けた。

「お頭。あんたのもとで俺たちは戦うよ。」

「そうか、ありがとう。」

私はリュシアンたちにそう言った。いや、それしか言えなかった。

さあ、再び一つになろう。その時が来たのだ。

第四十話 死の海

第四十話 死の海

2237年 冬 西アジア

僕は今も砂の世界を歩いている。西へ歩くほど坂を上るよりも下りる感覚があった。周りを見れば陸が高く見える。

「ねえ。あれって湖じゃない。」

サヤが僕に聞いてくる。僕はサヤが指差す方向を見た。海とも思えたが、対岸が見えるので湖だと思った。湖岸に着くと、周りは砂では無く泥のようだ。

近くに男の人が居たので、この湖のことを聞いてみることにした。

「こんにちは。」

僕が挨拶をすると男はこちらを見た。僕はそのまま湖を見て続ける。

「大きな湖ですね。なんて名前の湖なんですか。」

「この湖の名前か。死海って言うんだ。名前の理由は自分で理解したほうがいいだろ。」

男は僕の質問に答えた。

彼は湖に向かって歩いて、水に触れる寸前のところまで近づいた。

「この湖の水をなめてみな。」

男は僕らを見て言った。

僕らは言われるがままに、湖に近づいて水をなめてみることにした。海水とは塩分を含むからしょっぱい。しょっぱければ海水ということとは確定する。しかし、名前の理由を理解するとはどういうことなんだろうか。

僕はそう思いながら、サヤとともに海水に触れてなめてみる。

口を含むと、今まで味わったことの無いしょっぱさが口の中を満たす。

「うわ。なんだこれ。」

僕は思わず声を出す。

「すぐく、しょっぱい。」

サヤもそう言いながら海水をすくいあげた手を見ている。その顔はあまりよろしくない。

「そうだろ。この湖の水は他の海水よりも塩分濃度が高いんだ。つまりしょっぱいんだよ。」

男は僕らを見て言った。

「けど、このしょっぱさと死海って名前は繋がらないんだけど。」

僕は男に言う。しょっぱいから死海ってどういうことだ。考えても出てこないで返答を待つことにした。

「さっきも言ったように、この湖の水は通常の海水よりも塩分を多く含むんだ。」

男はそう言うつと死海を見て続ける。

「だから、生物なんてこの湖の中には居ない。生きていられないから死の海って言うんだ。」

「生物が居ないから死の海か。」

僕はそう言いながら眼前に見える死海を見る。

この死海から流れ出る川があるのなら、その川は死の川と呼ばれるんだろうな。

男に聞けば、この死海に入る川はあっても出る川は無いらしい。終着点だからこその他の海よりも塩分が多いのかもしれない。それにしても近くに塩分を出す素でもあるのだろうか。気になるところだ。

「それとだな。塩分が多いってことで。」

男は僕らに言う。直後、彼は海に飛び込んだ。

「な、何やってるんですか。」

僕は声を出す。

「ちょ、ちよつと。」

サヤも声を上げる。

男はすぐに浮かんできた。そして仰向けになつたままこちらを向い

た。

「ごめん。説明するの面倒だったから見てもらおうと思ってさ。」

男は死海に浮かびながら言った。そして続ける。

「塩分を多く含むから浮力もある。人が浮くのさ。こんな感じにね。」

「

見たとおり男は海に浮かんでいる。塩を多く含むと人間までも浮かばせることが出来るらしい。塩って凄い。

男は陸へと戻ってくる。全身塩水まみれだ。

「大丈夫なんですか。こんなに濡れちゃって。」

サヤは男へと言う。

「まあ大丈夫さ。慣れているからね。」

男はそう言う。

「そ、そうなんですか。」

僕は男へと言った。

「まあ、そんなところだな。対岸にある町に行きたいのなら、ここから時計回りに湖岸を進めば行けるさ。」

男は僕らを見て言う。そして、死海を見て続けた。

「本当の海はこの先にある。見たいなら見とくといい。しかし、その間にごちゃごちゃした高原があるから気をつけな。」

「ごちゃごちゃしたって一体どういう意味ですか。」

僕は男に尋ねる。

「行ってみればわかるさ。俺の言った意味が。」

男は僕らを見て言った。そして続ける。

「行くなら早く行きな。日が暮れちまうぜ。」

空を見上げれば太陽が天高く昇っていた。

「ありがとうございました。」

僕らは男に礼を言つと、次の町へと歩き出した。

しかし、ゆっくりと坂を下りていく感覚はまだある。前を見れば陸を挟んで左側に小さな湖があった。

「あれ、もう一つ湖があるね。」

サヤが僕に言う。これも死海なのだろうか。僕らはその湖へと向かう。そして、こちらでも湖の水をなめてみた。すると先ほどの死海と同じだった。元は繋がっていたのだろうか。

その湖にそって進むと、湖の終わりとともに再び湖があった。こちらでも死海なのだろうか。近くに居た人に聞くと、北の死海から南に水を引いているとの事だ。しばらく歩くと、死海の水を使用して塩を作っている人たちを見つけた。濃度が高いのなら塩として取り出したほうが有効なのかもしれない。死海から塩を取り出さないと、どんどん死海の塩分濃度が高くなっていくような気がした。

それにしても、途中にあつた小さな湖は何故出来たのだろうか。そして、なぜわざわざ南に死海の水を引いてから塩を生成しているのだろうか。何故水を引かずに直接死海で塩を作らないのだろうか。分からないことだらけだと思う。

現状では考えても分からないので北にある死海へと戻る。しばらく歩くと湖岸沿いに町が見えた。西の空を見ると日が落ちようとしていた。今日はこの町で休むことになりそうだ。

今後は左に見える高原を越えて海沿いに北へ進もうか。僕はそう考えながら町へと向かった。

第四十一話 終わりの無い戦

第四十一話 終わりの無い戦

2237年 冬 西アジア

僕は坂を上る。死海を越えて海を見るために。

上る途中は町など無かった。けれど、上れば上るほど住居が増える。坂にそって建てられた住居。それを見ながら僕は上り続けた。

上ってきた道を見ればこの場所が凄く高い所にあることは理解出来た。死海からどのくらいの高さに居るのだろうか。もうよくわからない。それでもまだ上る必要がある。

歩きながら、死海で会った男の言った言葉を思い出した。死海と海の間にある高原はごちゃごちゃしていると。その意味を知るためにも、高原を越えて海を見るためにも上り続けなきゃいけない。

気が付くと見渡す限り建物だらけになっていた。さらに坂を上っていく。

すると、高い壁を見つける。その壁に沿って道を歩くと壁の反対側へと続く入り口を見つけた。反対側に建物があることからこの壁は城壁のようだ。

中に入ると、建物が気持ち悪いほど密集している。壁の外側にある建物とは大違いだ。

良くわからないので中をうろつくと歩き回る。

しばらく歩くと開けた場所に出た。そこには大きな白い壁がある。

外から見えた壁かと思えたが形が違う。その壁の下を見ると、何人もの人たちが壁の傍で何かしている。

「何をしているんだろっ。」

僕は誰に言うでもなく言った。

「祈りを捧げているのさ。」

僕らの背後から声が聞こえる。振り向くと、頭に白髪が混じったおじいさんが居た。

「祈りつて。」

サヤがおじいさんに聞く。

「あの壁がユダヤ教にとつての聖地だよ。」

おじいさんは白く大きな壁を見ながら言った。そして、続ける。

「何故壁なのかということは、私にも分からないがね。」

おじいさんはそう言う。そして、僕たちを見て続けた。

「この地には他にキリスト教とイスラム教の聖地があるんだ。」

「三つの聖地が一箇所にあるってこと。」

僕はおじいさんに聞き返した。そして、僕はバラナシを思い出す。

聖地とは一箇所に一宗教ではないのか。

「そうさ。ここにはそれぞれの聖地があるんだ。」

おじいさんは再び壁を見て続けた。

「なぜ一箇所に集まったのか。私も知りたいところだよ。」

一箇所に複数の宗教の聖地があることもあるものなのだと理解した。あの男が言ったとおりだ。本当にごちゃごちゃしている。しかし、気をつけるとはどういうことなんだろう。三つの宗教に移りすることに気をつけると言っただけではないだろう。何か他に気をつけるべきものがあるはずだ。

「お話ありがとうございます。」

僕らはおじいさんに礼を言つとその場を離れた。他の聖地に行くことも出来たが、行ったところで何も無いので行かなかった。僕らは三つのどれでも無いのだから。

僕らは城壁をくぐって歩き出す。このまま気をつけることも無く海まで到達できれば良いのだけだ。

そんなことを思うことしか僕らには出来なかった。

西へしばらく町の中を歩く。相変わらず建物が沢山ある。

「ぎゃあ。」

悲鳴が聞こえる。

聞こえた方向を見れば、男が近くに居た女性を刺していた。

「な、何やってるんだよ。」

刺した男は僕の言葉に反応してこちらに近づこうとする。しかし、その男は背後から来た数人の男たちに捕らえられる。

刺した男は言葉にならない叫び声を上げている。

僕らは刺された女性に近づく。

何箇所も刺されたようで、それぞれの場所を赤く染めていた。

「大丈夫ですか。」

僕は刺された女性を見ながら言った。そして、周りを見て続ける。

「医者、医者は居ないんですか。」

僕は精一杯叫ぶ。

刺した男を捕まえた一人が僕らに近づく。

刺された女性の状態を見ると何処かへ走って行ってしまった。

「ごふつ。」

せきとともに女性の口から血が出てくる。

「大丈夫ですか。」

サヤは女性の顔を覗き込む。

「あ、あなたたち外の人間だね。」

女性は僕らを交互に見て言った。

「喋らないで。」

サヤは女性に言う。

「こ、これがここの日常。二つが一つを求めて争っているの。」

女性は空を見ながらそう言う。そして一度深呼吸をすると、僕らを見て続けた。

「早く、早くここから逃げて。」

直後、女性は一度せきをした後、動かなくなった。

「大丈夫ですか、ちょっと。」

僕は女性へ叫ぶ。足音に気が付いて周りを見れば、先ほど消えた男が医者らしき男を連れてきた。

「おい、大丈夫か。」

医者は女性へと叫ぶも反応は無い。腕を持ったとき、気が付いたようだった。

「脈が無い。死んでるよ。」

医者は女性の腕を下ろすと僕らにそう言った。

「そ、そんな。」

僕はそう言った。さっきまで生きていた人が目の前で死んだ。目の前で。

なんで人間同士で争うんだよ。なんでなんだよ。なんで。

僕は立ち上がって歩き出す。刺した男へ向かって。

「カイ。何処へ行くの。」

背後からサヤの声が聞こえる。けれど、気にしなかった。

僕は太剣に手をかける。刺した男は僕を見て後退しようとする。しかし、両側で捕まえる男たちがそれを拒む。そして捕まえている男たちが何か言っているようだが、何言っているか聞こえない。

「人殺しの。」

僕はそう言いながら剣を抜く。

「人殺しのために持つてるんじゃないんだよ。」

僕はそう言いながら、刺した男に太剣を振り下ろそうとする。

「止めて。」

サヤの叫び声に僕の手は止まり、太剣は刺した男の真上で止まった。サヤが近づいてくる。

「カイが今この人を殺したら、この人と同じになるんだよ。」

サヤは僕へ言った。それでも、僕は止められなかった。再び振り下ろそうとする。

「カイ。止めなさい。」

サヤの声に再び手が止まる。サヤは僕に近づいて、びんたをした。

「馬鹿なことは止めるの。いいわね。」

サヤのびんたと言葉に、僕は落ち着きを取り戻す。大剣を収めると、僕は刺した男へと言った。

「事の重さ。分かってるよね。」

僕はそれだけ言つと、サヤとともにその場を離れた。

気をつける。それはこういうことなのだろう。

何故争っているのかは分からない。だけど、過去に何かを間違つたということとは確かだった。

過去に何があつたのだろう。それはきおくを見れば分かるのだろうか。

僕らはそのまま海へ出ると、北へと向かった。

第四十二話　美しい馬の地

第四十二話　美しい馬の地

2237年　冬　西アジア

「ごちゃごちゃした高原を抜けて海に出た。それから、僕らは北へ向かった。」

そして、やっと砂の世界の終わりが見えた。

久しぶりの緑に感激する。そして、青々とした草木に触れた。緑の匂いがする。これからは安心して進めそうだ。途中で会う人に聞くと、もう少しでヨーロッパだと言われた。

もう少しだ。もう少しで。僕らはそう思いながら北へ向かった。

僕らは北に向かうということしか考えていなかったためか、本当に真っ直ぐ北に向かった。

行き着いた先は緑のほとんど無い岩ばかりの土地だった。これならば、海沿いに歩いたほうが良かったと思う。それでも、こちらに来てしまったのだから仕方が無い。

それに、目に見えるすべての岩は奇妙な形をしていて、僕らが見たことの無い形をしていた。どのように出来たのか気になる。僕はそう思いながらサヤとともに歩く。

歩くといつても足場が悪いところも多々ある。僕らは土、砂と来て岩の上を歩く。砂のような不安定さや土のような優しさに似た感触は無い。ただ、蹴れば足に激痛が走るだけ。

しばらく歩くと、遠くに町を発見する。

「あれって、町じゃないかな。」

サヤは僕を見て言う。

人が居るかどうかは分からないが、行ってみる価値はあると思う。

「そうだな。」

僕は遠くに見える町を見ながら言った。そして、サヤを見て続ける。

「行ってみよう。誰か居るかもしれない。」

僕らは見つけた町へと歩き出す。土色の建物が少しずつ近づいてくる。それと同時に、誰も居ないと思えてきた。人が動く姿など見えない。僕らの足音と通り抜ける風の音だけが音として認識されるだけだった。

町に着く。歩き回っても誰も居ない。ずっと昔に廃墟になったのだろうか。僕は建物の壁に触れる。

「ねえ。あの岩山も建物になっているみたいだよ。」

サヤの言葉に、僕はサヤの見る方向を見る。そこには岩山の形をした建物があった。岩山を掘って造ったのかもしれない。

「行ってみようよ。」

サヤは僕を見て言った。

「そうだな。」

僕は岩山を見た後、サヤを見て続けた。

「行ってみよう。高いところから一帯を見ることが出来るかも知れない。」

僕らは、少し離れた岩山に向かって歩き出した。

近づけばその大きさに驚く。

「わあ。大きいね。」

サヤが僕を見て言ったとき。その間を何かが通り抜けた。

僕は一瞬のことに何が起きたのか分からなかった。直後、すぐ傍で鈍い音がする。

音のした方をみると、地面に矢が刺さっていた。僕らの間を通り抜けたのは矢だったのだ。

「なんで矢が。」

僕は矢を見ながら言った。そして、すぐに岩山を見る。すると、誰かが窓から覗いていることがわかった。

このまま動かずに立っていると、矢で射抜かれるかもしれない。
「逃げるぞ。」

僕はサヤの手をとると、走り出した。走る間にも、岩山にいる人間は矢を降らせてくる。

「何で狙われるのよ。」

サヤはそう言いながら、僕から手を離す。何時もへこむ瞬間だと思う。今はそんなことを考えている場合じゃないか。

岩山からある程度はなれると、ぱたりと矢の攻撃は無くなった。岩山を見ると、そこから数人の男たちが出てきた。矢の攻撃の次は追っ手のようです。

「俺たちが何したよ。」

僕は走りながら言った。岩と岩の間を上手く走りながら、逃げる。

「待ちやがれ。」

背後から声が聞こえてくる。待ったら良いことないだろ。

次の瞬間、僕は岩に足をとられて転ぶ。

「大丈夫。」

僕を立たせるサヤ。なおも僕らを追いかける男たち。

再び立って走ろうにも、足を痛めてしまったようだ。上手く走れない。追っ手が僕らに近づく。

そして、僕らはついに追いつかれてしまう。この土地を知る人たちには敵わないということか。

「お前たちは、俺たちを見ちまったんだ。」

男たちの中から一人が出てきてそう言った。多分、頭なんだろうな。そして、続ける。

「死んでもらおうか。」

その声と同時に、他の男たちが僕らに剣を向ける。周囲を剣で囲まれるのは良い気分じゃない。

「何を見たっていうんだ。あの岩山に人が居ることか。」

僕はそう言った。そんなに見られたくない理由があるのか。

「そうだ。俺たちの住処が他に知られちゃ困るんだよ。」

頭は僕らにそう言った。

「私たちがあなたたちの住処を見ても誰かに話すとは限らないですよ。」

サヤは男たちに言う。そして、僕はサヤの言葉に続けた。

「それに僕らがあなたの方の住処に攻撃をしたならともかく、ただ住処の前に立ってただけで攻撃される筋合いは無いね。」

「それでも、見たんだから消えてもらうか。」

頭は僕らにそう言った。

足の痛みは引いていた。また、走れそうだ。

「サヤ。相手の合図で、しゃがんで離れる。」

僕は小さくつぶやく。サヤは小さく頷いた。

「やれ。」

頭の声とともに剣が中心に迫ってくる。

それと同時に僕らはしゃがんで、中心から離れる。

「なっ。」

頭のをよそに、人と人の中から素早く出て離れる。

「来るなら来いや。」

僕はそう叫びながら大剣を抜く。サヤも剣を抜いて構えた。

「ふざけおつて。早く殺せ。」

頭は他の男たちに叫ぶ。男たちは僕らに近づいてきた。

「この剣も、人間の血に染まることになるんだな。」

僕は自らの大剣を見て言った。そして、正面を見て続ける。

「サヤ。やろう。」

「うん。」

サヤは答えてくれた。もうやるしかないんだ。

「うおお。」

僕は太剣を円を描くように水平に振り回した。ぶつかった何人かの手から剣が落ちる。

一人は剣を振り上げて、襲ってきた。いや、隙を考えようよ。

空いた胴体に大剣を突き刺した。引き抜くと血が噴出すとともに男は倒れる。サヤも、剣を失った男たちを始末したらしい。返り血を浴びていた。

残り三人と様子を見ていた頭が剣を抜いて襲ってくる。相手が剣で刺してこようとする。しかし、こちらの剣のほうが長いために相手の剣は届かずにこちらの剣が相手に刺さる。

剣を引き抜いたとき、頭が剣を振り下ろしてきた。あわてて、大剣で止める。周りを見ると、サヤが相手の剣をはじき返した後、急所に攻撃を加えていた。立っているのは目の前の頭だけらしい。「おのれ。よくも。」

頭はそう言いながら、剣を横に振ってくる。

僕は一步下がって体勢を立て直した。彼も、サヤを見て距離を取った。

二対一になった状況で、さてどうするか。

「くそおお。」

頭は、サヤへ剣を振り下ろした。なんとか剣を受け止めたサヤも辛そうだ。僕は男に近づいていく。

「遊びじゃ。」

僕はそう言いながら大剣を振り上げた。男が一度こちらを見る。

「遊びじゃないんだよ。」

僕はそう叫びながら、彼の首めがけて大剣を水平に振った。

剣は刺さって止まることなく移動し続ける。そして、首を越えてしまった。

「あ。」

僕はやつちやったという気持ちとともに声を上げた。

男の首は地面に落ちる。それとともに、サヤが悲鳴とともに男から離れた。首の無い体が地面に倒れる。

「刺さると思ったら、ぶった切っちゃった。」

僕は切れた男の首を見ながら言った。まだ口や目が、微かに動いている。

サヤが僕の傍に駆け寄ってくる。

「お、終わったね。」

サヤは僕に言う。お互い血を浴びていた。しかも、人間の血だ。僕は人殺しだ。

殺されそうになったから殺した。僕はそう思うことにした。何もなかったら、ここで旅が終わっていたかもしれない。正直、こんな場所で終わらせたくは無い。

僕は血の匂いが漂うその場を後にして、旅を続けた。

第四十三話 海と海の間

第四十三話 海と海の間

2237年 冬 西アジア

僕らはあれから北へ歩き続けた。すると、僕らは海に出ることが出来た。その海を右手に海岸を歩く。海を見ているためか安心感がある。水分がそこにあるからだろうか。とは言っても、飲めるかどうかという問題になると、無理だと思う。

海岸を歩き続けると、大陸の端に到着した。

大陸の両側を海が挟み、大陸間に海峡がある。このことは地元の人に聞いた。町が海峡を挟んだ両側にあり、移動が面倒だと聞く。昔は二つの大陸を結ぶ二本の大きな橋が架かっていたが、二つとも壊れてしまい。今は船で渡る方法しかないらしい。

眼前に見える海峡を見ると、橋を架けるには長すぎるんじゃないかと思う距離である。

僕らは反対側の陸へ渡る船を探して歩き出した。

海岸沿いに歩くと一部が浸水している建物がいくつかあった。浸水するような建物を建ててほしくないものである。しかし、昔からの建物のようなので、海の水位が上がったということなんだろう。ならば、水位が上がっただけ陸地を飲み込んでいるということになる。

僕は反対側の陸を見た。昔はもっと陸と陸の距離が短かったのかもしれない。だから、橋を掛けることが出来たのだと思う。どこまでも、僕の勝手な推測だけど。

そんなことを考えていると、船着場を発見する。僕らはそこへ向かった。

「すみません。」

僕は、船に乗って何やら作業をしている男へと声を掛けた。

「なんだ。何か用か。」

船から僕らに向けたその顔を見ると、あまり機嫌の良い状態じゃないことは理解できた。それでも、頼まなきゃ向こう岸には渡れない。

「あの、お願いがあるんです。」

サヤが男に言った。そして、続ける。

「船で向こう岸に連れて行って欲しいんです。」

「なんで、お前らを連れて行かなきゃいけないんだ。嫌だね。」

男は不機嫌そうに答える。そして、男は作業に戻った。

「そこをなんとか。お願いします。」

僕はそう言いながら、サヤと一緒にお願いした。

「ふん。まあ、いいだろう。」

男は僕らを見て言った。そして、男は続ける。

「乗せてやる代わりに、お前らも船を漕ぐんだ。しないなら乗せねえぞ。」

良かった。連れて行ってもらえるようだ。漕がなきゃいけないのは辛いけど、乗せてもらうんだから仕方がない。

「漕ぎます。乗せてください。」

僕は男へ言った。

「じゃあねえな。もうちょっと待ってな。」

男はそう言うのと、船に視線を戻して作業を再開した。何か故障でもしたのだろうか。僕らは良くわからないので、その場に立つっていた。

「終わったぜ。これで向こう岸に行けるぞ。」

男は額を流れる汗を右腕で拭いながら、僕らのところにくる。

そして、続けた。

「約束どおり。お前らにも漕いでもらうからな。」

男の言葉に僕らは頷く。それから、僕らは船に乗って陸を離れた。

船を漕ぐことを止めて、海水を触れてみた。海水は冷たくて気持ちいい。

「おいそこ。しっかり漕げや。」

男の声で、僕は再び漕ぎ始める。

「しっかりしなさいよね。漕がないと着かないわよ。」

サヤが僕に強く言う。ちよつと怒っているのかな。

「おい、兄ちゃん。女を怒らせないほうがいいぜ。」

男は僕を見て言う。その顔は笑っている。

反対側の陸が見える程度の距離のために、漕いでも漕いでも着きませんよということは無かった。漕いだけ進んで、もうすぐ向こう岸に着く。

そして、僕らは反対側の陸に着いた。疲れたためか、陸に上がると座り込んでしまった。

「お疲れさん。漕いでくれてありがとうよ。」

男は僕らにそう言いながら、船に乗っている僕らの荷物を陸に下ろしてくれた。

「あ、すみません。そんなことまで。」

僕がそう言いながら船に近づくと、男は僕らの荷物以外の荷物も陸に下ろしていった。男は僕らと一緒に荷物を運んだらしい。機嫌の悪いときに乗せてもらえただけでもいいと思うことにしよう。

僕らは男に礼を言つと、その場を離れた。空を見ると、太陽が傾きだしていた。

この町にはいろいろな建物がある。しかし、これまで見た建物の形とは違うようだ。日本からここまで来ることによって、地域によって建物の形が違うことがわかった。それはその場所特有の何かが影響を与えていたり、文化や昔起きたことが影響しているのだろう。昔起きたことと言っても何が起きたかなんてわからないんだけどね。それも、きおくを見れば解るかもしれない。

海沿いに大きな建物を発見する。傍に居た男性に話を聞くと、この建物は宮殿らしい。今では水位が上がって浸水してしまってい

る。

「きや、冷たい。」

サヤの足が海水に触れたようだ。足をすぐに引っ込めた。

昔は地面の高さよりも水位は低かったようだ。浸水した地面に触ると、肘の少し手前まで水に浸かってしまった。

僕は、陸地を見る。浸水してしまった建物には住めない。だから、人々は陸へと移動していったようだ。

南にある旧市街には、他にも建造物があると聞いた。ひとまず浸水していない建物が見たいので行ってみることにした。

僕は、男性にお礼を言うと南へと向かった。

南に向かうと、橋が架かっていた。こちらには橋があるようだ。渡っている間に崩れ落ちたらとちょっと思ったが、難なく渡りきることが出来た。橋を渡りきった場所が男性の言っていた旧市街のようだ。

僕はぐるぐるとあたりを歩いてみた。すると、大きな建物を見つける。それを見たとき、何かに似ていると思った。ああ、思い出した。何時か見たタージマハル廟に何処と無く似ている。それは、屋根が半球になっていた四本の柱が立っているからである。

また歩くと、同じような建物を見つけた。こちらは赤く色づけされた壁が目を引く。

他にも建物があったが、それぞれの建物は何か根本的な部分で共通しているように思えた。

そして、僕は目にした。良くわからない建物を。それは大きな灰色の壁のようにも見えた。聞けば、水道橋というらしい。どこをどう水が流れているか、気になるところだ。何人かがその水道橋で作業をしている。大分昔に使われなくなったようだ。が、補修工事をする事で再び利用出来るようになったと言う。昔の人の技術も、こうやって再び人々のために利用されるのは悪いことじゃないと思う。先人の知恵に感謝しつつ僕はその後にした。

これから、再び西へ向かって歩くことになる。ヨーロッパはも

うすぐだ。そして、目指す地もあと少しだ。

僕は西を見てそう思った。太陽が西へと沈みかかっていた。

第四十四話 二人きりの記録

第四十四話 二人きりの記録

2237年 冬の終わり ヨーロッパ

私は目覚めた。今日は特にすることも無い。壁に寄りかかって、焦点を定めずに部屋の一点を見つめた。少しずつ頭が起きてくる。隣を見れば、セイジは何時もの事ながらぐっすり眠っているようだ。

立ち上がって窓の外を見れば、太陽がひよっこり顔を出した頃だった。座って、再び壁に寄りかかる。

そのとき、ミナの声がどこからか聞こえた。「今日行った場所にあの人と行ってみたら」

今日、あの日行った場所に行ってみようか。セイジと。

私は、隣でぐっすり眠っているセイジを見る。まずは、起こさなければいけない。セイジに近づき体をゆする。

「セイちゃん。起きて。」

私は、唸るセイジに優しく言った。何回か繰り返したけど、起きない。やっぱり、アレですか。

私は右手を高く上げて、セイジの顔面に振り下ろした。直後、鈍い音が聞こえる。セイジは悲鳴を上げながら起き上がる。そして、打たれた頬をさすっている。

「痛いっての。人の寝込みを襲うな。」

セイジの声はやはり怒りを含んで聞こえた。さすがにちょっと力を込めすぎたかな。

「だって、起きてくれないから。」

私は拗ねた顔をして言ってみた。

セイジは起き上がり、窓の外を見る。

「まだ、朝っぱらだろが。こんな時間に起こすなよ。」

セイジは私を見て言った。

「セイちゃん。散歩しよ。」

私はセイジの顔に近づいて言った。言い終わると、満面の笑みを浮かべてみる。

「仕方が無いな。行くか。」

セイジは一度ため息をつくと言った。そして、立ち上がって支度を始める。二人で井戸へと向かって顔を洗う。事を済ませた後、一階の調理場へと戻る。そこで、食べられそうな物を持って自分たちの部屋に戻るために階段を上がった。

その時、ミナが起きてきた。

「あ、お姉ちゃん。おはよう。」

ミナはまだ完全には起きていないようで、少しふらふらとしながら階段を下りてきた。

「おはよう。セイジと二人で出かけてくるから、朝食はいいって言っ
つといてもらえる。」

私はミナを見て言った。すると、ミナの頭が起きてきたのか、私とセイジを交互に見ている。

「行つてらっしゃい。」

ミナは私たちに笑顔で言った。ミナは自分の言ったことを思い出したのかもしれない。

ミナと別れると、私たちは自分の部屋へ戻った。取ってきた食べ物を持って、私たちはアジトを出た。

「何処に行くんだよ。」

セイジはそう私に聞いてきた。

「ないしよ。」

私はセイジを見て言った。あの場所は、見てからのお楽しみにしよう。

私は、ミナと一緒に行ったときの道順を辿っていく。アジトから海岸に出た。

「海が綺麗だな。ここに座らないか。」

セイジが私にそう言うものの。

「駄目。この先にもっといいところがあるから。」

私はそう言つて、セイジを引っ張った。

そして、あの場所に着く。

「ここ凄いな。どうやって見つけたの。」

セイジは、この空間に驚いているようだ。私だって驚いた人間の一人である。

「私じゃなくて、ミナが見つけたの。」

私はセイジに言つた。ここで私が見つけたと言つたら、ミナに悪いし良くない。

「そっか、よく見つけたな。」

セイジは砂浜に座り込んで、眼前の海を見た。私はセイジの隣に座つて、同じく海を見た。

「朝食抜きで来たからお腹空いたでしょ。」

私はそう言いながら、調理場で頂いてきたものを出した。とはいつても、果物ぐらいである。

「ありがと。」

セイジは私から果物をもらつとかじり始めた。私も手に持った果物を食べ始めた。

食べ終わると、私たちは何も言わずに目の前の海を見た。

それからしばらく経つた後、私は口を開いた。

「ねえ、私たち。ここに来るまで色々あつたね。」

私は眼前の海を見ながら言つた。

「今頃なんだよ。」

セイジは私を見て言つた。横目でセイジを見ていた私は顔をセイジのほうに向けた。

「今じゃなきゃいけない気がしたんだ。」

私はセイジに言つた。そして、続ける。

「だって、もうすぐ春だよ。」

「春か。結局何も出来ずにここまで来ちまったんだな。」

セイジは空を見上げて言う。そして、続ける。

「グランの知り合いの奴らが仲間に加わったよな。それでも、あいつ等に敵う数じゃないんだ。」

セイジはそのまま砂浜に寝そべる。

「それじゃ、恐がつてるだけよね。」

私はセイジを見て言った。

「そうかもな。けど、俺たちが消えたら誰が止めるんだ。」

セイジは私を見上げて聞いた。

「なんとか、この国の王に頼んで……。」

私はセイジを見て言う。もう、こうなったら強い力に頼るしかないのかもしれない。

「無茶だろ。」

セイジは空を見たまま言った。簡単に否定される気持ちは良いものではない。

「でも。」

私は再度セイジを見て言った。私には他に方法が見つからないんだもの。

「存在しない国王に何が出来る。」

セイジは勢い良く起き上がると私を見て怒りながら言った。そして、続ける。

「国王の代わりの奴らにだって、知られたらどうなるか。」

「なんで信用出来ないのよ。」

私はセイジを見て言う。声が大きくなってきていることは自分でも分かった。

「これまで沢山の人間の愚行を見てきたのに、まだそんな考えで居られるのかよ。」

セイジは叫んでいた。セイジの言い分は分かる。施設できおくを見てきた私たちには、次の人たちに大切なことが伝わらないことがどんなに悪いことを理解できる。

「僕らのしている事だつて、愚行なのかもしれない。」

セイジは私を見て言った。そして、続ける。

「それでも、次に繋げなきゃいけないんだ。次に。」

私はセイジに頷いた。

「わかったわ。もうこの話はやめましょう。」

私はセイジにそう言つて、海を見た。今は落ち着こう。熱くなりすぎた状態で事をするとうるくなことが無い。

それから、しばらくどちらも話さなかった。私は、座つて海を眺めていた。セイジを見ると、再び寝そべつて空を見ている。

「太陽が昇つてきたな。」

セイジはそう言いながら、砂浜から起き上がる。そして、私を見て続けた。

「そろそろ戻るか。」

このままでは歸つてしまう。そう思った私はセイジに近づいて、彼の唇にそつとくちづけをした。

「え。」

私がセイジから離れると同時に、彼は言った。

私は満面の笑みでセイジを見る。そして、彼を抱きしめた。

第四十五話 水の中の町

第四十五話 水の中の町

2238年 春の始まり ヨーロッパ

僕らは海峡を越えた後、西へと向かった。歩き続けると海に出ることが出来た。そこから、海沿いに北へ向かった。

北上すればするほど、これまで見た他の地域とは違う建物を多く目にするようになった。

もうすぐヨーロッパ連合王国に入る。そうすれば、あとは真っ直ぐロンドンを目指すだけだ。あと少しだ。

しばらく歩くと、港町に着いた。建物の屋根はみんな赤い色で統一されている。その中を少し歩くと、建物がぎっしり建てられ場所を発見した。そこは壁で囲まれていて、中に入るためには入り口を探さないといけないようだ。僕らは壁沿いに入り口を探した。

すると、門を見つける。僕らはそこから中に入った。中は外から見える以上に建物がぎっしり建てられていて、道が迷路を作り出していた。僕らは複雑に組み合わされた道や坂を歩いた。角を曲がったとき、足に冷たい感触を感じた。すぐに足を引っ込める。

「か、海水。」

僕は水浸しになった地面を見ながら言った。そして、浸った道の先を見ながら続けた。

「ここから先は浸水していて進めなさそうだな。」

「それにしても。人が居ないね。」

サヤはそう言った。門を抜けて、ここに入ってきてから誰にも会っていない。何故だろう。

「当たり前よ。」

背後からの声に僕らは振り向いた。そこには一人の女性が居た。

そして、彼女は続けた。

「ここが浸水してきたから、みんな高いところに移住したの。だから、ここには誰も居ないわ。」

僕はしゃがみ込んで、両手で水をすくう。

「浸水は食い止められなかったんですか。」

僕は彼女に言った。こうなる前に何か対策が取れたはずだ。

「一度は、海とこの地域の間に壁を作ってみたわ。けど、水の力つて恐ろしいわね。壊されて、失敗したわ。」

彼女は僕らに言った。そして、続ける。

「私たちは諦めた。そして、高い土地へと移住したの。」

僕は再度浸水した地面を見る。何故、ここまで水位が上がったんだろうか。しゃがみ込んで触れる海水は冷たい。その手に波が当たった。浸水した先を見ると、小さな波がこちらに近づいてくる。

「ここに居ても、これ以上良いことは何もないわ。」

彼女は僕らに言った。そして、高く仕切られた壁を見て続ける。「この地域の大部分が浸水してる。いろんな建造物があるけど、今は城壁から見るだけよ。」

「僕らは近づけないんですか。」

「無理かも。最近、変な魚がこのあたりをうろついているの。」
彼女は僕の即答する。そして、続けた。

「人に噛み付く魚らしくて、浸水しているところには行かないように言われているのよ。」

噛み付く魚。どこかで見たことがあるような。僕は浸水した道を見る。そして、僕は思い出した。

「僕らがこっちに渡るときに襲われた魚じゃないかな。」

僕はサヤに言った。

「けど、同じとは限らないでしょ。あそこからここまで凄く離れているのよ。」

「あなたたちも、変な魚を見たことがあるの。」

彼女はサヤの言葉を聞いて、僕らに言った。

「僕らが見たのは人間や馬を食う魚だけだね。こっちに来るときに襲われたんだ。それで、何人が死んだよ。」

「そう。こっちの魚は噛み付くけど。今のところ死んだ人は居ないわ。」

彼女は僕の言葉にこたえた。

二年近く前に会った魚たちを今頃思い出すとは思っても見なかった。こちらに居る魚は、僕らにとってそれほど恐怖を覚える対象ではないのかもしれない。見たことがないので、これ以上考えるのはやめよう。あとは、自分の目で確かめようか。

「どんな奴なのか。自分たちで見てください。」

僕は彼女に言った。そして、サヤを見て続ける。

「サヤ、行こう。」

「ちよつと待って。危ないわよ。行かないほうがいいわ。」

彼女が心配そうに僕らを見て言った。

「大丈夫ですよ。すぐに戻ってきます。」

僕は彼女にそう言うのと、サヤを見た。サヤは頷いてくれた。僕らは浸水した道を歩き出す。

水の中は思ったよりも冷たくて動きづらい。体力を使いそうだと思った。

深いところへ向かって歩いていると、高い塔を見つけた。そこには鐘が付いている。浸水する前は、あの鐘の音がこの地域に響き渡っていたのだろう。

海水に逆らって足を動かすと聞こえる音。今はそれしか存在しないのが何か寂しかった。

そして、海に出た。つまり、浸水した元船着場に到着したようだ。ここまで、変な魚の攻撃には受けなかった。今日はお休みなかな。

「変な魚なんて会わなかったな。」

僕はそう言って一度深呼吸をすると、サヤを見て続けた。

「戻るか。」

サヤは僕の言葉に頷く。僕は来た道を戻ることにした。が、すぐに道が分からなくなった。あたりを歩き回ることによって、体力は奪われてきた。このままだと、まずい。僕は叫んでみた。彼女に聞こえたら返事をしてくれるはずだ。

「こつちよ。」

女性の声がした。僕はそちらへ向かって歩き出した。角を曲がると、彼女が見えた。

「よかった。助かった。」

僕は安堵の気持ちでいっぱいだった。けど、彼女の顔は一瞬で変わる。

「早く陸へ来て。変な魚がいる。」

彼女の言葉に後ろを見ると、奴らがいた。

「うお。」

僕はサヤの手を掴むと、陸へ向かって走った。走ったと言っても、水の中なので遅い。その間にも魚たちは近づいてくる。

僕らは間一髪、陸へと上がった。しかし、追ってきた一匹が飛び跳ねて陸まで追ってきた。

僕らがそれを避けると、魚は地面に落ちて跳ねた。人の手サイズの大きさの魚だった。口にはとがった牙が何本もある。こいつが変な魚らしい。

「こいつがそうか。小さいな。」

僕が魚を見ながら言うと、サヤは剣を抜いて魚に刺した。勢いよく跳ねていた魚の動きが鈍くなり、ついには動かなくなった。

相手にとって有利な場所。自分にとって有利な場所。相手の有利な場所に誘い込まれたらこんなふうになるのかもしれない。

サヤが魚に刺した剣を引き抜く。

「ここを離れましょ。城壁の上からの景色は良いわよ。」

彼女は僕らに言った。僕らは城壁の上へと向かった。

城壁から見える景色は綺麗だ。先ほどまで歩き回った町を見下ろすと、歩き回ったことが懐かしく思える。

僕は彼女に礼を言うと、その場を離れて北へ歩き出した。

そういえば、彼女の名前を聞いていなかった。その事をサヤに言ったら。

「聞かなくていいの。」

彼女はそれしか言わなかった。

第四十六話 発覚

第四十六話 発覚

2238年 春の始まり ヨーロッパ

今日は何か様子が違うことがすぐに分かった。自室を出てから、外に出るまでの間誰とも会わなかった。きおくのある部屋を見ても誰もいない。外へと続く階段がある部屋にも誰もいなかった。

外へ出ると、施設の中とは違って騒がしかった。とは言っても、侵入者や事故の類の騒ぎでは無いことはすぐにわかった。つまり、何時もの騒がしさだ。

私はそれを横目に会議場に向かうことにした。テリーが居ると思うからだ。

そして会議場に着く。布を上げて中を見ると、テリーが一人資料を読んでいた。一人で居るためか寂しそうに見えた。

「おはよう。」

「あ、大尉。おはようございます。」

私のあいさつにテリーはこたえる。

私はテリーのそばに座った。そして、一呼吸する。

「施設の中に誰も居なかったな。何かあったのか。」

私はテリーを見て言った。何時も騒がしい施設内が急に静かになると何か不安になる。

「ああ、そのことですか。」

テリーは私に言う。そして、続けた。

「すべてのきおくの書き留め、整理及び運搬が完了しました。なので、施設内の兵士全員を撤収させました。」

テリーの言葉に安心した。やはり、何時も見える光景が急に変化した時は心配になるものだ。

「そうか、完了したか。敵のアジトのほうはどうなってる。」

私はテリーに聞いた。もし見つかっていないなら、このまま帰国してもいいだろう。

「大尉。見つかりましたよ。発見できました。」

「そうか、やっと見つけたか。」

私は大きく深呼吸をした。そして、続ける。

「さてと、どうやって事を始めようかね。」

相手をこちらに誘い込もうか。しかし、それには誘い込めるものがないとな。

「テリー。敵さんをこちらにおびき寄せようと思うんだが。何か良い方法は無いか。」

私はテリーに聞いた。彼なら何か良い案を出してくれると思うたからだ。

テリーは私の言葉を聞くと、私に近づいて耳元で囁いた。

その案は、私たちにとつて都合が良く。彼らにとつては、私たちと戦わなくてはならない理由を作り出すものだった。

「よし。その案にしよう。決まりだ。」

私はテリーにそう言った。そして、続ける。

「それと、一部の兵士たちを帰国させるんだ。敵をおびき寄せやすくなる。」

「分かりました。では、少しずつ帰国させます。」

私はテリーに頷いた。これで、向こうに帰る前に邪魔者が消せるんだ。気分のいいもんだ。

私は会議場を出ようとしたとき、言い忘れたことを思い出した。「計画実行時まで。奴らには何もするな。それと、実行した夜にこの島から船を一隻出してくれ。以上だ。」

私はテリーを見て言った。そして、会議場の出口を向く。

「分かりました。」

背後から、テリーの声が聞こえた。

私は布を上げて、会議場を出る。空を見れば太陽が天高く昇っ

ていた。

私は施設内のきおくのある部屋へ向かう。階段を下りて、部屋へ着く。誰も居ない部屋の中をぐるりと見回した。誰も居ないと、ちよつと寂しく感じる。来たばかりの頃のような。

私は手形のマークが付いた台に手を置いて、適当な情報を画面に映した。それとは別に違うことを考え始めた。

この施設は永久機関と呼ばれるもので出来ている。なら、何故世界はあの戦争を始めるに至ったのだろうか。

永久に動き続けることが出来るのなら。燃料を必要としないのなら。燃料が無いことによって起きる戦争なんて無いはずなのに。「利益にならないからだよ。」

老人の声が聞こえてくる。素早く周りを見ても、誰も居ない。画面に目を戻すと、人が映っていた。

「な、なんだこれは。」

気が付かないうちに、画面が変わっていたようだ。画面には老人が映っている。画面の中に本当に人間が居るように思えた。

「あんた誰だ。」

私は声に出して、画面に向かって言っていた。

「私はこのシステムに搭載されている人工知能だよ。基本的には、君たちが情報を見るときに裏で操作するのが私だ。」

画面の中の老人は私にそう答えた。

「じゃあ、何故出てくるんだ。」

私は画面の中の老人へと言った。裏方ならば、勝手に表に出てきてほしくないところである。

「私がこのように表に出てくるのは、操作する人間がこの施設に関する情報を得たいときだけだ。」

画面の中の老人はきっぱりと言いつた。

「話は戻るが、何故利益にならないんだ。」

私は画面の中の老人へと問う。

「この施設は、後世を生きる人間たちへ過去を伝える目的で出来た

ものだ。つまり、金銭的な利益など考えずに造られている。」

画面の中の老人は私に言った。そして、続ける。

「しかし、この世の人間は創った物に値する利益を得ることによって生きている。つまり、基本的に利益にならないもの、利益を得られないものは創らなかったのだよ。だから、この施設が作られたんだ。悲しいことだよ。」

老人はそれだけ言うつと画面から消えた。私が興味を持たなくなったからかもしれない。台から手を離すと画面は自動的に消えた。

私はきおくの部屋を出て自室へと向かった。

利益にならない事をする意味があるのか。

第四十七話 水の都

第四十七話 水の都

2238年 春 ヨーロッパ

僕らは海岸沿いを北へと向かい、遂にヨーロッパ連合王国内に入った。そこから西へ歩く。

すると、町を発見した。その町は海の上に存在するように見えた。その町から大陸へと伸びた橋が無ければ、孤島というべきかもしれない。

僕らはその町へと向かうことにした。

「うわ。長い橋だね。」

サヤが遠くに見える町を見ながら言った。正直なんでこんなに橋が長いのか。元は、本当に孤島だったのかもしれない。

橋の両側を海に囲まれている。落ちたら面倒なことが起こることということは理解できた。後ろを見れば、大陸が少しずつ遠ざかっていく。そして、目の前の町が近づいてきた。

町に着くと、まるで前に訪れた港町のようにぎっしりと建物が建てられていて、屋根は赤い。まるで町全体が巨大な迷路のようになっている、すぐに迷いそうだ。その中に大きな川や小さな川が流れていて、小さな橋を渡ること移動できる。

川を見れば、船が行き来している。船には荷物が積まれている。道が狭いためか船を使って荷物を運ぶことが日常なのだろう。

大きな川を二度、小さな川を何度か渡ると、大きな広場に出た。「急に広いところに出たな。」

僕はそう言いながら周りを見渡す。広場には寺院らしき大きな建物があるのみである。

「ほんと、広いね。」

サヤも広場を見渡す。

そして、海岸へと向かうと船着場らしき場所があるが、船は一隻も見当たらない。

僕は町を海岸沿いに歩いた。すると長い橋を見つけた。陸と陸を繋ぐ橋らしい。

「島同士が橋で繋がっているのかな。」

サヤの考え通りに島なのかどうかは分からないが、そこに陸があるのだから行ってみることにしよう。

僕はその橋をわたって次の島へと向かった。

その島に着いた後、島の反対側へと向かうとそこには大量の船がつけられていた。先ほどの町の中には無かったのに何故だろうか。僕は海に入って水を舐めてみた。サヤが止めようとしたが、却下した。

もし、海水ならしよっぱいはずである。結果はしよっぱかった。つまり、海水であり、ここは海なのだ。

僕は、一度戻って町が見える場所の水を舐めてみた。再度、サヤにお腹壊すとか脅された。本当に壊すかもしれないから恐い。しかし、聞く相手が居ない今はこれしか知る方法が無い。

町が海の上に浮かんでいるのなら、ここも海水のはずである。しかし、舐めてみるとあまりしよっぱくは無い。海水を水で薄めたような。海水のようで海水では無かった。

ここで分かったことは、町は海ではなく湖の上に存在するということだ。そして、海水ではないということとは、海と繋がっていないことを表す。つまり、先ほど海水を飲んだ島は、本当は島では無くこの町を囲む陸の一部なのだろうと思われる。しかし、しよっぱさはあったため、元は同じ海だったのかもしれない。どちらも本当の海ならば同じしよっぱさのはずである。

船が海側に付けられていて、町の中には無かった理由が理解できた。サヤも理解してくれたようだ。

実際に陸が続いているのか、海岸沿いに少し歩いて見ることに

した。所々に陸が細くなっている場所があったが、歩いてても歩いても陸しか無かった。

僕らが町に戻ろうとしたとき、サヤが何かを発見した。

「船がこっちに来る。」

サヤの声に、僕はサヤの見る方向を見た。

すると、海の間こうから何隻かの船がこちらに向かってきていた。

「魚でも獲ってきたのかな。」

僕らはその船が止まるだろう船着場に向かって歩き出した。漁師なら獲れた魚ぐらいいは見せてくれるだろう。

しかし、それらの船はみな船着場にへ向かわず、それぞれが何も無い陸へと向かった。

「なんか変だぞ。」

僕らはそれらの中の一隻に向かって走り出した。陸へと着いた船からは何人かの人間が降りてきて陸の上で何かしている。

次の瞬間、破裂音とともに陸の土が飛び散った。

「な、何を始めたんだ。」

状況がよく分からない。しかし、すぐに分かった。

その直後から、水の流れる音がし始めたのだ。見れば、海から湖に海水が流れ込んでいる。湖に海水つてまずいだろ。

遠くから、微かに破裂音が聞こえてくる。他の船が同じことを始めたのか。

「あんたら、何やってるんだ。」

僕は叫びながら船に近づいた。男たちは何か大きな木箱をひっくり返している。木箱の中から魚が出てきて湖を泳ぎ始めた。

「あ。」

僕はその場で固まった。放たれた魚は、僕らが日本から大陸へ渡るときに襲われた魚だった。何故ここに居るんだ。何故だ。

「あれって、まさか。」

サヤも同じく思い出したようだ。僕らを襲った魚。僕らの馬を

食いつぶした魚。人を食った魚。

「止める。」

僕は動いていた。大剣を抜いて突っ込む。

「へへへっ。」

男たちは木箱を湖に捨て、船に乗って陸を離れた。

最後に開けられた木箱は、流れ込む海水によってそのまま湖に沈んでいった。

「お前ら、自分がしたこと理解してんのか。」

僕は船に乗る男たちに叫んだ。どうしても叫ばないとやっていられなかった。

男たちは何も悪いことはしていないといった顔をしてこちらを見ている。無性に腹が立った。できる事ならば、彼らが運んできた魚の中に放り込んでやりたいくらいだ。

僕は怒りで船に近づく「何か」に気がつかなかった。気がついたのはサヤだった。

「な、何あれ。」

サヤが指差す方向を見れば、大きな「何か」が船へと近づいていた。船と接触する直前、「何か」は姿を現した。

正体は魚だった。しかし、ただの魚では無い。その姿は先ほど見た魚とは比べ物にならないほどの大きさだ。先ほど湖に放たれた魚が巨大というのならば、この魚は超巨大としか言い表せない。

この魚を巨大な怪魚として、先ほど湖に放たれた魚を怪魚としよう。今思えば怪魚はそれほど大きくなく。当初巨大と思っていたのは井の中の蛙と同等だ。

怪魚は僕の身長半分ぐらい。巨大な怪魚は中くらいの船一隻分ぐらいの大きさを持つ。

その魚が船へと突っ込む。船は体勢を崩してひっくり返った。船に乗っていた男たちが海に投げ出される。巨大な怪魚は投げ出された男たちを、まるでお椀ですくいあげるように口に入れていく。ひとり、またひとりと巨大な怪魚に食われていく。

巨大な怪魚は海に投げ出された獲物を捕りきると、頭を海から上げて僕らのほうを見た。怪魚の目と僕の目が合う。怪魚は僕らに突進してきた。しかし、僕らは陸の上だ。怪魚からは届かない。

僕らは巨大な怪魚の恐怖に後ずさる。気がつくとも湖と海が繋がった場所まで移動していた。

巨大な怪魚は、再び僕らに突進してきた。その体は、僕らに触れることなく。巨大な怪魚は海と湖が繋がった場所を通って、湖へと侵入した。

「あはははは。」

僕は笑うしかなかった。あいつが町の中を泳ぎ回るんだ。そして、見つけた人間を食らうだろう。今あの町は、これまで訪れたどの町よりも危険になった。

僕は、剣を収めた。今なら、見なかったことにして、次の町に行けるだろう。しかし、それで本当にいいのか。それじゃ、あの日と同じじゃないか。僕は、逃げたくない。

「サヤ。」

僕はサヤを見て言った。そして、続ける。

「行こう。あの日の仕返しのために。ぼくらが生き残るために。」
サヤは僕の言葉に頷いてくれた。僕らは、町に向かって走り出した。

僕は背中に背負った大剣に触れる。この武器は何のためにある。人を殺すためか。いや、違う。

これは、ぼくらが生き残るためにあるんだ。

第四十八話　ひとつになること

第四十八話　ひとつになること

2238年　春　ヨーロッパ

僕らは町へ続く橋を渡る。湖の水位が上げられていることはすぐにわかった。僕らは橋を渡りきり、湖岸沿いに走った。すでに地面が浸水していて足を地面に付ける毎に水が跳ねる。途中、すれ違う人たちを何人も見た。その都度、この町から避難するように言った。

広場に着くと、沢山の人が居た。中には武装した人たちも居る。僕がその中でも偉そうな人に話しかけると。

「一般人は早く避難しなさい。」

さらっと言われた。僕たち一般人だけど、一般人じゃない。

「僕らも戦います。」

僕は彼に言った。彼は僕らを良く見た。そして一度大きく頷いた。

「そうか。私はアルベルトだ。よろしく頼む。」

アルベルトは僕らにそれぞれ握手をして挨拶した。

「市民の避難はどうなんですか。」

サヤはアルベルトに聞く。

市民の避難を早急にしなければ、湖が血に染まりかねない。

「市民の避難は順調だ。もうすぐ完了する。」

「なら、大丈夫ですね。放たれた魚のことを知ってますか。」

僕はアルベルトらに聞いた。みな首を横に振る。僕は一度頷くと口を開いた。

「あの魚は人を食い殺す恐ろしい魚です。僕は怪魚と呼んでいます。僕たちも昔襲われました。数はわかりませんが、巨大な怪魚が一匹混ざってます。戦う場合は死を覚悟しといたほうがいいと思います。」

「僕はアルベルトらに説明する。みんなの目がさらに真剣になった。そして、僕は続ける。」

「それと、水位上昇は止められないんでしょうか。」

僕の言葉にアルベルトは首を横に振る。浸水しきってからじゃないと無理みたいだ。

「僕からは以上です。サヤは。」

僕はそう言いながらサヤを見た。

「みなさん。気をつけてください。」

サヤはみんなにそれだけ言った。

「よし、みんなそれぞれ散らばってやつらを迎え撃て。行くぞ。」

アルベルトの声にみんなそれぞれに散らばった。僕は湖を見る。そして、剣に触れた。

さて、怪魚狩りといきますか。

僕らは広場で怪魚を迎え撃つことにした。

水位はどんどん上昇して、少しずつ行動しづらくなっていく。

僕らはお互いの背中をつけて、別々の方向を見た。怪魚はどこから現れるか分からない。

凄く静かだ。静か過ぎて恐い。

「ぎゃあ。」

近くから悲鳴が聞こえた。怪魚が食らい付いたか。

「来た。」

サヤの言葉に、彼女の見る方向を見た。

怪魚が二匹が僕らに向かってきた。僕はサヤから離れて一匹を引き寄せる。

飛び出すかそのままか。飛び出さずに足に食らい付いてくるなら、上から突き刺すのみだ。

怪魚は水中から飛び跳ねて僕に襲い掛かってきた。

「うりゃあ。」

僕は太剣を怪魚めがけて横に振る。僕らはあの時とは違った。怪魚は大きな口の真ん中から綺麗に真っ二つに切れた。剣を振り切ると、二つになった怪魚は水中に落ちた。すぐに赤い血が湖の水を染めていく。サヤを見れば、もう一匹のほうも倒したようだ。よかった。

「大丈夫か。」

僕の声にサヤは頷いた。僕らは再び怪魚を探し始めた。すると、怪魚一匹が近づいてくる。僕は構えた。怪魚は飛び跳ねて来ることは無い。

怪魚が足元に近づいたところを太剣を振り下ろした。しかし、寸前で逃げられる。そして、足に噛み付いた。

「ぐあ。」

足に痛みが走る。サヤの声が聞こえたがそんなのかまっていられない。痛みをこらえて足に付いた怪魚へ太剣を振り下ろす。今度は怪魚に突き刺さる。太剣が刺さった怪魚を引き離した。

噛み付いた力が強かったために、怪魚を引き剥がすときにいくらか肉を裂いた。水にしみて痛い。しかも、海水になってきているために、なお痛い。

僕はひざに手を置いた。この状況でまた来られたら今度は殺されるだろうな。

「大丈夫。」

サヤが周りを見ながら近づいてくる。僕の足の状況を見て続けた。

「まあ、大丈夫そうね。」

サヤはそう言っ行ってしまった。いや、そんな大丈夫なんて軽く言われても困るんですけど。足持ってたかたわけじゃないんだから大丈夫といえば大丈夫なのかな。

サヤは新しく見つけた怪魚へ攻撃を始めていた。

痛がっていたって、今はどうしようもない。僕は我慢して怪魚

を探し始めた。

すると、向こうからアルベルトが現れた。

「大丈夫か。」

彼は叫びながらこっちにくる。

「大丈夫です。」

サヤは怪魚を始末した後、アルベルトを見て言った。

「二人とも凄いな。」

アルベルトは僕らが始末した怪魚たちを見て言った。そして、続けた。

「こちらも見つけた怪魚は全て始末した。あとは大きい奴だけだろ
う。」

あとは、あの巨大な怪魚だけか。しかし、この水位ではどうだろうか。既に、水位は身長を越えていた。

「これじゃ。うまく動くことは出来ないな。」

僕は水の中を移動しながら言った。

「このまま水中に居るのは危険だ。建物の上に移動しよう。」

アルベルトの提案で僕は建物の上へと上る。危険は回避できているが。根本的な解決には至っていない。この状態でどうやって巨大な怪魚を叩くんだ。

「ここからどうする気なんですか。」

僕はアルベルトに聞いた。

「おい。大丈夫か。」

少し遠くから声が聞こえる。赤い屋根を伝ってこちらに来るのはアルベルトの仲間たちのようだ。最初に居た四分の一ぐらいの人間が今ここに集まった。残りはそれぞれだ。

「巨大なやつがこっちに来るぞ。」

仲間の一人が言うには、町を流れる大きな川を巨大な怪魚が移動しているとのこと。

「行ってみよう。」

僕はサヤを見て言った。サヤは頷く。そして、僕はアルベルト

らを見て続けた。

「待っててください。怪魚を連れてきます。」

僕らは川へ向かって赤い屋根を伝って移動した。屋根から落ちて川に落ちなきゃ大丈夫だ。

川に着くと、向こうから巨大な怪魚が泳いできた。

「あいつだ。」

僕は巨大な怪魚を見ながら言った。相手も止まって、水面から頭を上げてこちらを見た。

相手は先ほど獲り損ねた獲物を再び見つけたようだ。僕らが移動すると、相手も移動する。

僕らは広場まで巨大な怪魚を誘導することにした。巨大な怪魚を連れて再び広場へ戻った。

アルベルトたちが居るところに戻る。巨大な怪魚はずっと僕らを狙っている。

「大きい奴を連れてきましたよ。」

僕はアルベルトたちに言いながら巨大な怪魚を見た。そして、続ける。

「相手は僕ら二人を狙ってます。僕らがおとりになりますから、他の皆さんは奴の背後をとって下さい。」

アルベルトたちは、屋根から巨大な怪魚を見る。

「ここから飛び降りろってことかよ。」

仲間の一人が言い出す。そりゃ、他に方法あるのかよ。

「他に方法は無いだろ。この二人が先に行ったらそのまま奴の胃の中に納まるかもしれない。」

アルベルトは仲間にそう言った。そして、巨大な怪魚と浸水した広場を見て続ける。

「飛び降りる場所が屋根である必要は無い。二階からなら大丈夫だ。」

飛び降りる場所は限られるが、失敗したときでも生きていられるだろう。

「よし、みんなやるぞ。」

仲間たちはそれぞれ二階へと移動した。

アルベルトらが二階へ行ったのを確認すると、僕はサヤを見た。
「サヤ。ここに居るんだ。」

僕はサヤに言った。そして、二階へと向かう。

「ちよつと。」

サヤの声が背後から聞こえる。

サヤも狙われているのなら、ここに居る限り相手は狙ってくるだろう。

ならば、僕もアルベルトたちといっしょに飛ぶだけさ。

サヤはおとりで我慢だ。危険すぎる。

僕は、屋根から屋内に入って、二階に着いた。

壁に背をつけて外を見た。巨大な怪魚は僕が消えたことで、広場内を移動し始めた。やはり僕はサヤと居たほうが良かったのか。

掛け声とともに一人が巨大な怪魚の上に飛び乗り剣を突き立てる。すぐに振り落とされるが、仲間たちは次々に巨大な怪魚に飛び乗っていった。しかし、このままだと全員が振り落とされた後に食われる。

「どけ。」

僕は叫びながら、二階から広場に向かって跳んだ。

巨大な怪魚は体に付いた仲間全員を振り落とす。そして、僕に向かって大きな口を開けた。

巨大な怪魚の口に入る直前。僕は手に持った大剣を縦に振り下ろした。巨大な怪魚は僕を飲み込む。

僕は怪魚の中に入ると同時に、人間でいう上唇部分から真つ二つに裂いていった。怪魚が暴れだす。剣の勢いが止まると、裂いた部分から外へ出た。すぐに怪魚の体に剣を突き立てる。海水と化した湖の水が巨大な怪魚の血で赤く染まりだす。

怪魚は僕を振り落とそうと必死に暴れる。既に刺さっていた剣に体がぶつかりそうになった。まともに刃にぶつかったら、自分が

真つ二つも考えられる。僕は危なそうな剣を引き抜いて水に浮かぶ仲間たちに投げた。

僕は、怪魚が力を加える方向とは逆の方向へ向かって大剣を振り切ろうとした。

怪魚が暴れるところによつてすこしずつ剣が肉を裂く。

アルベルトたちは水中から怪魚に剣を突き刺していく。

「うおお。」

僕は太剣に精一杯の力を込めて振り切ろうとした。その時、巨大な怪魚が反対方向に力を加えたために太剣は怪魚の肉を裂ききつた。

僕は水中に突つ込む。水中から顔を出すと。巨大な怪魚の体は、もう少しで魚の開きになりそうだ。巨大な怪魚の動きが鈍くなり、やがて動かなくなった。

「やったぞ。」

アルベルトはみんなに言う。しかし、すぐに彼は悲鳴を上げる。見れば怪魚が噛み付いていた。まだ居たのか。そばに居た仲間が怪魚に剣を突き刺して引き剥がした。

「カイ。大丈夫なの。」

サヤも屋根から下りてきたようだ。こちらに近づいてくる。

やっと、終わった。これで終わりだ。

「ひとまず、建物の上に戻ろう。まだ怪魚が居たら大変だ。」

アルベルトが言う。本人が言うと言得力がある。

僕は建物の上に戻った。さてと、これからどうしようか。橋は浸水していて通れるかどうか怪しい。

そういえば、先ほどから水位が変わっていない。多分、今の水位が最高なのだろう。

僕は、その後助けに来てくれた船に乗って陸へと移動した。

陸に到着すると、当初の仲間の人数の半分ほどしか居なかった。他の仲間を探すために船は再び町へと向かう。

何人かは怪魚に襲われたらしく無残な姿になって発見された。

それでも当初の人数には足りなかった。

あとは、巨大な怪魚に食われたとか。だとしたら、奴を切り裂くときに中に居た人間まで切り裂いていたのかもしれない。今この状況では分からないのでいいだろう。

僕は噛まれた足を手当してもらった。終わった途端に痛くなつたのは、痛みを忘れていただけらしい。

「お疲れ。お前ら良い腕持つてるな。」

休んでいる僕らにアルベルトが話しかけてきた。彼も体に包帯を巻いている。

「ありがとうございます。」

僕はそれぞれ言った。その後、アルベルトや戦った仲間たちと話した。

その日はその場に泊めて貰い。次の日、出発した。

アルベルトらが僕らを見送ってくれた。一日だけだったけど、戦友になれたと思う。

僕は手を振って、その場をあとにした。

僕らはそれから西へ向かい。北へと進路を変えた。この地域には畑が沢山あった。所々にある町を通って北へ向かって歩く。

あるとき、林に囲まれた空間に到達した。中を進んでいくと、これまで見た建物とは何か違う建物に囲まれた場所に着いた。

「ねえ、これって何かな。」

サヤが僕に聞いてきた。サヤが見るものを僕も見た。

それは、地面に書かれた地図だった。線だけで書かれている。

「それは、この国の周辺を含んだ地図だよ。色分けされているだろ。それぞれが元は一つの国だったんだ。」

老人の声がする。振り向けば、元気そうな老人が僕らに向かって歩いてきた。

「元の国。」

僕はそう言いながら地図を見る。そして、僕は思い出した。

「そうか、これは連合時代の地図なんだ。」

僕は地図を見ながら言った。そして、続ける。

「一つの国になる前ってこうなってたのか。知らなかった。」

「そうは言ってもだな。一つの国になるとき、拒否した国もあるんだよ。ほれここ。」

老人が指差す国は何かで大きくバツがついていた。今の国には含まれて居ないということを表すのだろう。

連合はしていたいけど、同じ一つの国になりたくない。もしくは何かあったのな。僕は地図を見ながらしばらく考えた。考えても、ここでは結論は出ないだろう。ならば、早くロンドンへ着くことだ。

老人に聞けば、ロンドンはまだもうすぐらしい。

僕らは老人に礼を言くと、その場を後にした。

第四十九話 狂いだした齒車

第四十九話 狂いだした齒車

2238年 春の終わり ヨーロッパ

私とセイジは再び二人で森に行くことになった。つまりは、食料調達の番が回ってきたのだ。

正確には回ってきたというよりも、グランが突発的に言い出したというほうが正しい。

しかも、今回は肉ではなく果物を採ってきてほしいとのこと。最近リユシアンを含めグランの部下が増えたために、彼らだけで食料調達をこなす日々が続いていた。

食料調達と言いながら再び二人にすると、まさかグランは気がついてるのだろうか。

私がそのことについてグランに聞いても、「いつて来いよ」と言うだけだった。

アジトを出る前、グランはセイジに何やら言っていた。私が近くとグランはセイジの肩を軽く叩き、セイジの体を私のほうに向けた。そして、背中を押す。セイジは態勢を立て直すと私を見た。

「それじゃ。行くか。」

セイジの言葉に私は頷く。私たちはアジトを出て森へと向かった。

しばらく歩いた後。

「ねえ、なんで果物を私たちに採りに行かせるんだろっね。」

私はセイジに聞いてみた。

「知るか。他のやつらが肉や魚を獲りに行くからじゃないのか。」
セイジは私を見て言う。そして、前を向いて続けた。

「果物なんて、腹の足しにならないだろっに。」

「いいじゃないの。私はたまには食べたほうがいいと思うけどね。」

私は前を向いたまま言った。

「そんなもんかね。」

「そんなものです。」

私はセイジの言葉に応える。

グランが肉や魚では無く果物を採ってくるように言う時点で、彼にちよつとの優しさが見えた。セイジがそこから私の状況を理解できるかという謎。だから、こんな状況が作り出されたんだね。

私は前を向いたままセイジの左手を握った。セイジよりもちよつと遅れて歩くことで、セイジがこちらを見ていることが理解できた。だけど、私は前を向いたまま。セイジも前を向いたままになる。私たちはそれ以降一言もしゃべらずに森に着いた。

森に入ると、果物を探し始める。しかし、そんなに簡単に見つかるのだろうか。果物の木があることを先に知っていれば楽なものを、情報がまったく無い。前回来たときは、そんなことを考えてなかった。

辺りを探しているものの見つからない。それは、セイジも同じだった。

「見つからないな。」

グランは本当に言ったのかもしれない。

二人だけの状況。今が良い時なのだろう。私は一度深呼吸をする。

「ねえ。」

私はセイジを見て言った。何時もより声が大きくなっている気がする。なんか、緊張してきた。

「ん。なんだ。食べられそうなものでも見つけたのか。」

セイジは私は見る。直後、彼は目を見開いた。

「お前ら何者だ。」

セイジはそう言いながら、剣に手をかける。

え。セイジの言葉に、私は後ろを振り向こうとした。しかし、

その前に背後から強い力が加わって、体の回転を拒まれる。

「きやつ。」

私は誰かに背後から捕まったようだ。そして、剣をのどに向けられた。

「ふざけんな。放しやがれ。」

セイジは私を捕まえる男に叫んだ。自分の背後の状況に気がつかずに。

「セイちゃん危ない。」

「えっ。」

セイジが自分の背後を振り向く始めた直後、彼の後頭部に棍棒が叩き込まれる。

「がは。」

それだけ言うと、その場に倒れこんだ。

「セイちゃん。セイちゃん。」

私はセイジに向かって叫んだ。近づこうとしたけど、捕まえる人間の力は強くて無理だった。

「おい。殺してないだろうな。」

私を捕まえている男が、セイジを殴った男に聞いている。そして、続けた。

「誰も殺すなどの命令だ。急所は外しとけよ。」

「おのれ、貴様らぁ。」

地面に倒れていたセイジが起き上がろうとする。そこへ容赦無く棍棒が振り下ろされる。

「いやあ、止めて。」

私は叫んだ。セイジが、セイジが死んじゃう。

「馬鹿野郎。殺すなと言ってんだろ。お前殺されたいのか。」

私を捕まえる男は言った。

「大丈夫ですよ。二回目は軽くしときました。」

セイジを殴った男は言う。

私が今自由の身ならば、この場でこの二人を殺す。殺してやり

たい。

「行くぞ。」

私を捕まえる男は言った。

「ぐふう。」

セイジは唸りながら男たちを見ている。

「この女を助けたきや。島に来るんだな。」

殴った男は、セイジの頭を棍棒で押さえつけながら言った。

「セイちゃん。セイちゃん。」

私の声は、セイジには届かない。

私は男たちに連れられてその場を離れた。

私は両手を体の前で、鎖によって繋がれる。その状態で施設のある島に連れて行かれた。そして、偉そうな男の前にひざまずかされる。周りには兵士たちが囲んでいた。

「お嬢さん。こんにちは。ふふふ。」

なんか嫌な男だ。気持ち悪い。

「あなたは彼らを誘い込むための餌です。」

参謀らしき男が嫌な男のそばに来て、私に言う。そして、続けた。

「私たちは邪魔をするあなた方が目障りでした。だから、あなたを使つて彼らを殲滅することにしました。」

私は餌なのね。私は目の前にいる二人を睨んだ。

「まあ、やつ等がここに来るまで時間がある。」

嫌な男はそう言いながら私を見る。そして、続けた。

「楽しもうかね。」

その顔に私は立ち上がって後退する。

参謀らしき男は嫌な男へ必死に抗議しているように見えた。直後、参謀らしき男は嫌な男に殴り飛ばされる。参謀らしき男は地面へと倒れた。

私を囲む兵士たちの手が私に伸びてくる。

「い、いやあ。」

私の叫び声は空に広がった。

私と参謀らしき男は牢屋らしき場所に並んでひざまずいている。苦痛だった。ずっと、ずっと。どうして、私がこんなことに。そこで私は首を横に振る。ここまでの過程なんてもう思い出したくも無い。

ただ、尋常じゃないほどの憎しみが増えただけだ。私はここに連れてきた男たちを見た。

「あんたら殺す。殺してやる。」

私の言葉に、私たちを連れてきた二人の兵士は笑う。その笑いひとつでさらに憎しみが増えた。私は狂っているのかもしれない。落ち着けなんて言葉はもはや通用しないだろう。

「すべては私が悪いんです。予想出来たことなのに。」

隣で、参謀らしき男が消え入りそうな声で私に言った。

「もういいわ。あんたはこうなって欲しくなかったんでしょ。」

私は地面を見ながら言った。

「さてと、お二人さん。そろそろお別れだ。」

一人の兵士がそう言うのと、二人は剣を抜いた。

二人はそれぞれ私と、参謀らしき男のそばに立つ。

私たちはもう用済みなんだ。

その瞬間、これまでのことが思い出された。この地に来るまでのこと。仲間との日々。セイジとのこと。

私は両手でお腹を触った。そして、目をつぶる。

ごめんね。セイちゃ…。

第五十話 失うもの

第五十話 失うもの

2238年 春の終わり ヨーロッパ

殴られた頭を触りながら、僕は起きた。

「マヤ。」

言っても、返事など返ってこない。

マヤがさらわれた。僕が居ながらなんてことだ。

僕はすぐに森を出て、アジトへ向かって力いっぱい走った。勢いよくアジトの扉を開ける。

一階に居たリュシアンたちがこちらを見る。

「あ、セイジさん。果物取れました。」

リュシアンはのんきに僕に聞いてきた。

「マ、マヤがさらわれた。」

頭がぐらぐらする。僕はその場に倒れこんだ。

「大丈夫ですか。セイジさん。」

グランの部下たちが僕の周りに来る。

「お頭。お頭。」

リュシアンの声が聞こえる。グランを呼びに行ったのだろう。

大きな音を立てながら誰かが階段を下りてくる。多分グランだろう。

「セイジ。大丈夫か。おい。」

グランが僕を起こしながら言った。

「マヤが、さらわれたんだ。島に、施設に行かないと。」

僕はなんとか声に出して言った。

そのとき、外から声が聞こえた。

「ただいま。」

声を聞けばケイトのようだ。そして、続ける。

「どうしたんですか。」

ケイトも何か様子が違うことが理解出来たようだ。僕のそばに駆け寄る。

「マヤがさらわれたんだ。」

グランが俺の代わりに言った。

「すまない。」

僕はそれしか言えなかった。本当に情けない。

ケイトを見ると、彼も僕を見ていた。

「島に居る兵士の数が減っていました。まさか、このためだったとは。」

ケイトはグランを見て言った。

「このためって。」

僕がケイトを見て言う。

「マヤさんを誘拐された私たちを施設に向かわせるためです。兵士の数が減れば攻めやすくなりますから。」

ケイトは僕を見て言った。

「助けに行かないとでも思っているのかよ。」

「念のためですよ。」

ケイトは僕の言葉に応える。

「行くしかないな。」

グランが僕らに言う。そうだ、もう僕らにはそれしかない。

「けど。」

僕は床を見ながら言った。そして、グランを見て続ける。

「けど、どうやって島に行くんだよ。全員が乗れるほどの船なんてない。」

「その辺りも相手は計算済みなんでしょうね。」

ケイトは僕を見て言う。そして、グランを見て続けた。

「施設のある島に船が泊まっています。その船とすでにある船を使えば全員が向かえるでしょう。」

「まずは、船の奪取か。」

グランはケイトを見て言った。そして立ち上がり、リュシアンたちを見て大声を上げた。

「野郎ども、今の話の通りだ。俺たちは今から施設に攻め込む。全員準備を始めろ。」

リュシアンたちは一度大きな声を上げると、それぞれ散っていった。

僕は立ち上がって、おぼつかない足取りで歩き出した。

グランの声も聞こえたが、何を言っていたのか聞き取れなかった。

僕は階段を上って自分の部屋に入った。マヤが居ないことで、部屋の中は寂しさと満たされていた。

「ねえ。お姉ちゃんは。」

振り返れば、ミナが居た。そして、続ける。

「ねえ。お姉ちゃんは。お姉ちゃんは。」

ミナは僕にしがみ付いて何度も言った。

「ミナ。待ってろ。取り戻してきてやる。」

僕は、ミナの頭を軽く叩きながら言った。そして、続ける。

「部屋に居るんだ。いいね。」

僕の言葉にミナは頷く。そして、自分の部屋へと戻っていった。

早く取り戻さなければいけない。

準備を終えて一階へ向かって階段を下りると、二階には誰も居なかった。一階にはほぼ全員が集まっていた。一階に全員が入れるわけも無いので、残りは外にでも居るのだろう。

「セイジ。行くぞ。」

グランが僕へ言う。みんな真剣な顔で僕を見ている。

「行こう。」

僕はみんなの中に入っていくた。

施設のある島から船が出る。それに合わせて、僕らは小さな船で敵の船へと近づいていった。

乗っているのは、僕、グランとリュシアンたちだ。残りは陸で待機している。

少しずつ敵の船に近づいていく。船の上に見張りが居た。見張りが僕らに気がつく。

「見つかったか。」

グランが見張りを見ながら言う。ルイスが居れば、見つかる前に矢で射抜けただろうに。

敵の船に自分たちの船を付けると、リュシアンが縄を相手の船に投げた。

「僕の後には順に上ってきてください。」

リュシアンはそう言うと、相手の船に引つ掛けた縄を器用に上っていく。船の上には数人が居て、一人が引つ掛けた縄を切ろうとしている。なんと厳しい状況だろう。

リュシアンの後をグランと僕は上る。その後にグランの部下たちが順に上るようになった。

リュシアンが縄を必死に切っている敵に近づくと、すぐに相手からの攻撃が来る。その攻撃を自前の剣で対応しながら少しずつ上る。上りきると、僕の視界外へ入った。直後、悲鳴が聞こえる。

グランも上りきって視界外に消えた。グランがリュシアンについて何も言っていないようなので、今の悲鳴は相手方のものだろう。僕も船の上に入る。グランとリュシアンだけで、既に三人ほど倒していた。船の上に居る敵の人数はざっと二十人ほどだろう。これまでも少ない。

「セイジ早く来い。」

グランは敵の攻撃を受け止めながら言う。

僕は敵陣の中に突っ込んでいった。

敵の攻撃を自らの剣で止め、跳ね返す。今度はこちらから斬りかかった。胴を斬られた相手は片手で斬られた部分おさえながら倒

れる。

僕はすぐに周りを見て、斬りかかってくる相手に対応した。隙を見て、相手の首に剣を突き刺す。引き抜くと生暖かい血が噴出して、僕の顔を赤く染めた。僕は新たな目標を捕らえ、斬りかかった

船に乗っていた敵を全滅させると、そのまま待機していた仲間のところまで二つの船を移動させた。

「早く乗るんだ。」

グランは敵の船を降りて言った。グランの部下たちの大部分が敵の船に乗り込む。残りは僕とグランと共に小さな船に乗った。ケイトについては、僕らと同じ船に乗っている。島を知る人間として、グランが一緒に船に乗せたようだ。

「よし、島に向かって出発するぞ。」

グランは大声を上げた。それに伴って部下たちが大声を上げる。僕らは島へと向かった。海の上、グランはリュシアンを呼んだ。「俺たちが先に乗り込んで道を作る。そこへお前らが突入しろ。」

グランはリュシアンへ大声でいった。

リュシアンはこちらの船のこぎ手を見て頷いた。僕とグラン、ケイト以外のこぎ手はみんな頷き先ほどよりも力強くこぎ始めた。船がリュシアンたちが乗る船から少しずつ離れていくのがわかる。

「お頭。命令を無視することをお許してください。」

リュシアンは大声でグランへ言う。

「な、何言ってやがるんだ。」

グランは大声でリュシアンに向かって言う。そして、自分が乗っている船のほかのこぎ手を見て続けた。

「リュシアンたちから離れるな。戻れ。」

「お頭たちは直接施設へ向かってください。僕らが、おとりになります。」

リュシアンは僕らに大声で言った。

「ふざけるな。」

グランはリュシアンに叫んだ。そして、共に船を漕いでいる部下たちを見て続けた。

「お前らとつと戻りやがれ。」

「お頭。リュシアンさんの命令を聞き入れてください。」

漕ぎ手の一人が言う。グランの居ないところで、既に決まっていたのかもしれない。

グランはリュシアンたちが乗る船のほうを向いて大きく息を吸い込んだ。

「この、馬鹿野郎。」

リュシアンにこれまでに無いほどの大声で叫んだ。それを最後に、グランは何も言わずに船を漕いだ。

島までもうすぐだ。マヤ、待ってるよ。

第五十一話 鎮魂歌

第五十一話 鎮魂歌

2238年 春の終わり ヨーロッパ

リュシアンたちの船から離れて、僕らの船は海岸に着いた。ここからでは、リュシアンたちの船は見えない。向こうはどうなっているのだろうか。

陸を見れば、人影は見えない。敵が隠れているかも知れないが、だからといってここで引き返すことも出来ない。進むだけだ。

僕らはそれぞれ船から降りた。

「いやに静かだな。」

グランが周りを見ながら小さな声で言った。僕も周りを見る。

船がたどり着いた場所は、僕がこの島に来たときに着いた場所では無いためにまるで遠い別の場所のようにも見えた。そして、異様に静かだ。

「ここからは僕が案内します。付いてきてください。」

ケイトが僕らを見て言った。ケイトなら島のことはわかるだろう。任せようか。

「よし、行くぞ。」

グランの声で全員が走り出した。目指すは施設だ。

ケイトのあとを走る。彼なりに施設への最短経路を選んで進んでいるのかも知れない。しかし、すぐに敵に遭遇する。

「来たな。かかれ。」

剣を持った兵士たちが僕らに襲い掛かってくる。

相手もこちらの侵入を既に知っている。待ってましたということか。

僕らは剣を抜いて対応した。相手の振り下ろした剣を止める。

剣と剣がぶつかり金属音が発生する。そして、押し切ろうとする力がこちらに伝わってきた。相手の剣を跳ね返すと、隙が出来た胴を斬りつける。敵は悲鳴を上げながら倒れた。

すぐに周りを見てみると、立っているのは仲間だけのようだった。ここで初めて知ったのは、ケイトの武器が小さな剣だったということ。その刃は真つ赤に染まり、持った手まで赤く染めていた。「先を急ぎましょう。」

ケイトの言葉に僕は頷く。そして、再び走り出した。

しばらくすると、再び敵にであつた。同じように襲ってくるものの、その中に一人反対方向を向いて逃げていく兵士が居た。援軍を呼びに行くのかもしれない。援軍が来たら面倒だ。

「僕に任せてください。」

ケイトはそう言うとその兵士へと走って近づいた。自分に近づいてきた兵士を倒した後、ケイトを見ると追っていた兵士は地面に倒れていた。阻止したようだ。

ケイトは周りを見ると、こちらに戻ってきた。僕らは残る敵を倒すと、再び走り出した。

しばらく走ると、騒がしい声が聞こえてくる。

「みなさん隠れてください。」

ケイトは敵を発見したらしく、僕らはすばやく敵の死角に移動した。

「あそこが施設周辺への入り口です。」

ケイトが敵のいる方向を見ながら言った。やはり、出入り口には見張りは付き物か。

「相手はこちらには気がついていないようです。」

ケイトは僕らに言う。そして、続けた。

「僕が仕留めてきます。皆さんはここに居てください。」

ケイトは敵に向かっていった。敵はケイトに気がつくものの、次の瞬間にはケイトの剣がのどに刺さったために声は聞こえなかった。

ケイトはこちらを向くと手招きした。敵から剣を引き抜いたときに浴びたのか、ケイトの体には新たな血が付いていた。

僕らはケイトに近づき、全員が施設周辺へと入った。さらに、聞こえてくる人の声は大きくなる。

目の前に小さな布で覆われた小さな家のようなものがある。

「いつの間にこんなものが出来たんだ。」

グランはその建物を見て言った。

僕はそのそばまで行って、中を確認した。しかし、中には誰も居ない。

外にでようとしたとき、ケイトの声が聞こえた。

「誰か来ました。隠れてください。」

その指示に、僕はその場に隠れた。この中に入ってくるのなら、入った瞬間に剣を突き刺してやる。

しかし、こちらには来なかった。その上、予想以上に悪い展開へとむかってしまった。

先ほど倒したケイトの兵士を他の兵士に発見されてしまったのだ。

「おい、大丈夫か。」

兵士の声が聞こえる。しかし、すぐにその声は悲鳴を發した。外にいる仲間の誰かが殺したのだろう。

「セイジさん。行きますよ。」

ケイトが建物の中をのぞいて言った。すぐに建物の外にでる。しかし、施設があるだろう方向を見ると、敵がこちらに向かってくるのが見えた。

剣を抜いて向かおうとした。その横をグランたちが駆け抜ける。グランは向かってきた敵に棍棒を振った。直接当たった敵は、後ろに居る敵を巻き込んで倒れる。僕もその中へ突っ込んだ。グランが倒れた敵にとどめを刺す一方で、僕らは新たに現れた敵に対処した。さっきよりも人数が多い。やはり施設に近づいたためだろうか。

全滅させた後、僕らは再び施設へ向かって走った。少し走ると

高い建物を見つける。その建物の右側から先に進むと、目の前に施設への入り口が見えた。

すぐに周りを見る。絶対周りで敵が見えていると思ったからだ。しかし、誰も見えない。

こちらが取り返したいのは目の前にある施設。親玉は多分施設内に居るだろう。

僕は周りに注意しながら施設への扉を開けた。

僕を先頭に施設内へと入った。階段下には敵が何人も居た。それぞれが階段を上ってこちらに向かってくる。相手からの攻撃を受け止めた上であいた部分に蹴りを入れる。相手がよろけた隙を狙って剣を突き刺した。すぐに相手から剣を引き抜く、それとともに蹴飛ばした。相手は階段を上ってきたほかの兵士を巻き込んで倒れていく。僕らはその上を踏みつけながら下に到着した。奥の部屋から来る兵士と、先ほど踏みつけた兵士たちが同時に襲ってくる。勢い任せで進んだために挟み撃ちにあってしまったようだ。

僕が相手の剣を受け止めたとき、ケイトがその相手の首を剣で切る。相手は悲鳴とともに勢いよく血が噴出して、正面にいる僕は血まみれになった。意外とケイトは強いかもしれない。

奥から来た敵をすべて殺し終えると、床は血の色で染まっていた。何人かの仲間も同時に失った。さすがにはさまれる状況になったのはまずかったか。しかし、今はそれさえもかまっていられない。「行こう。」

僕を先頭に、みんなは奥に存在するきおくのある部屋へ向かった。いくつかの部屋を抜けて、その部屋へと到達する。

部屋の中は真っ暗だった。しかし、すぐに明かりがついて、誰が居るのかわかった。十数人の兵士と親玉らしき人間だ。

「カール。」

グランが親玉らしき男を見て言う。こいつがカールか。「ようこそ。」

カールは僕らに挨拶する。その態度が僕を怒らせた。

「おいこら。マヤはどこだ。返しやがれ。」

僕は怒りを込めた声で言った。

「ああ、あの女のことか。」

カールは軽い声で言い出す。そして、兵士たちを見て続けた。

「おい。連れて来い。」

何人かの兵士がその場を離れる。そして、すぐに戻ってきた。

マヤを連れて。

しかし、マヤは二人に足と手を持って運ばれてきた。兵士たちはマヤを乱暴に床に落とす。マヤは一言もしゃべらない。

僕は、すごく嫌な予感がした。

「おい、まさか。」

僕はそういいながら近づく。マヤのそばに到達する前に理解した。僕は立ち止まる。

「し、死んでる。」

僕は後退しながら言った。口では言ったものの、脳が理解したがない。現状を理解したくないようだ。

「なっ、マヤ。」

グランは動かないマヤに言う。そして、カールを見て続けた。

「カール。」

グランはカールへ叫んでいた。声から怒りがこもっていることはすぐにわかった。

カールはマヤに近づいていった。そして、マヤを足で軽く蹴る。

僕の中で怒りが増した。

「くつくつく。いい女だったぜ。」

カールはマヤを見ながら言った。そして、続ける。

「最高だったよグラン。お前にも味あわせてやりたかったぜ。くふふ、ははは……。」

カールの笑い声が部屋の中に広がっていく。

僕は何も考えたくなかった。ただひとつ言える事は、カールが僕が一番大切なものを奪ったということだ。

「カール。」

グランは今まで聴いたことの無いような大声を発した。そして続ける。

「お前の愚行を表現する言葉なんぞな。この世には存在しないんだよ。」

そのとき、僕の中で切れてはいけない何か切れた。

「うおおおおお。」

僕は天井を見て叫んだ。叫ぶしかなかった。

そして、カールを見て続ける。

「お前。殺す。」

僕は剣を抜く。今、僕に刃向かう者が居るのなら、たとえ神でも殺してやる。

「野郎ども。行くぞ。」

グランの声で、僕以外の仲間は敵の兵士へ突っ込んでいった。

僕は、その間をカールへ向かってゆっくり歩いていく。

一人の兵士が僕に向かって剣を振り下ろしてきた。僕はその男の喉元へ剣を突き刺す。

「邪魔だ。」

僕はそう言いながら、兵士を右へ倒しつつ刺さった剣を引き抜く。引き抜いたときに血が顔に付いたが気にしなかった。

カールに到達するまで何人かが攻撃してきたが、異常なほど弱く感じられた。

そして、カールの前に到達する。

「くつくつく。よくここまで来たな。褒めてやるよ。」

僕はカールに剣を振り下ろす。しかし、カールは僕の剣を受け止める。剣越しに見えたカールの顔はどうしようもないほど憎らしい。

カールから一度離れて、再び切りつける。しかし、うまく当たらない。何度か剣を振り下ろした後、カールの剣が僕の体に刺さった。

「ぐふっ。」

僕は激痛に顔をゆがめた。

「くつくつくつ。お前もあいつと一緒に行かせてやるよ。」

カールは笑いながら言った。

「ふふふ、はっはは。」

僕はもう笑うしかない。剣が刺さった場所はよろしくない場所だということとはすぐに理解できた。

僕は笑いながら、カールの剣が体に刺さった状態のままで自分の剣をカールの体めがけて突いた。剣は見事に刺さる。

「ぐあつ。」

カールは僕に刺さった剣を引き抜いた。それとともに、僕がカールの体から剣を引き抜く。

「うらあ。」

カールは剣で突いてきた。僕もカールの体めがけて剣を突く。お互いの剣が交差した直後、カールの剣は僕の左肩の肉を切り僕の剣はカールの左肩に刺さった。

カールから剣を引き抜くと、彼は床に倒れこんだ。

左肩を見ると切れた部分は痛かったが、肉が切り取られたわけではないようだ。

すぐに倒れたカールへ剣を振り上げた。

カールは腰が抜けたのか、僕を見たまま両手両足を使って後ろに後退していった。

「や、やめてくれ。」

彼はそう言いながらなお後退していく。

僕は剣を下ろし、ゆっくりと彼に近づく。カールが壁に到達すると、少しずつ僕との距離が縮まっていく。

僕はカールの前で剣を振り上げた。

「やつ、やめて。助けて。」

カールが必死に懇願する。僕は勢い良く右手で剣を振った。

「ふはははははは。」

僕はカールを見ながら笑った。笑うしかなかった。そして、カールを睨みながら続けた。

「わかってないよ。あんた。」

「ひ、ひい。」

カールは必死に後退しようとするが、壁際であるためにもう後退する場所などない。僕は、カールめがけて剣を振り上げた。

「さあ、聴かせてもらおうか。俺たちの鎮魂歌^{レクイエム}を。」

僕はそう言うと、カールに剣を振り下ろした。

気がつくと、目の前には役目を終えた楽器が存在するだけ。もう、終わったんだ。

「あ、あああ。うああああ。」

僕はマヤのことを思い出し、彼女のところに行こうとした。彼女のそばへ行きたい。しかし、僕はその場に崩れ落ちた。

「マ、マヤ。」

薄れ行く意識の中で僕は言った。

「セイちゃん。セイちゃん。」

聞きなれた声に目を開ける。顔を上げると、目の前にマヤが立っていた。

「マ、マヤ。」

マヤのことを久しぶりに見たようだ気がする。

「セイちゃん。」

マヤは僕に優しく手を差し伸べてきた。

「マヤ。」

僕はそう言いながら右手を動かす。

さいごの力を振り絞り、その手を掴んだ。

最終話 境界線の消滅

最終話 境界線の消滅

2238年 夏の始まり ヨーロッパ

僕はあれからさらに北へと進み、海に出た。

僕は立ち止まり、海を見る。

「この海の方こうにある島にきおくがあるんだな。」

僕は独り言のように言った。陸続きでは無くひとつの島にロンドンはあるらしい。人に聞くものの、聞く人は口をそろえて「行っても何も無いよ」と言うだけだった。

本当に何も無かった場合は、ここまで来た意味が消えてしまうだけでなくじっちゃんが嘘を言ったことになる。必ずあると思って進むしかない。

「やっとここまで来たね。」

サヤも海を見て言った。そして、僕を見て続ける。

「早く行こうよ。」

僕は海岸沿いを船着場を探して歩いた。船が無ければ島には渡ることが出来ない。

しばらく歩くと、小さな船着場を発見する。小さいと言っても船が一つしかないほどだ。男が一人棧橋に座り、海に足を入れている。

「あの、すみません。」

僕は男に近づいて声をかけた。近くで見た男はほっそりとしているものの筋肉はあるようだ。

「なんだい。何か用かい。」

男は僕らを見て言う。

「海を挟んだ向こう側の島へ行きたいんです。連れて行ってくれま

せんか。」

僕は男へ言った。この人が無理だったら、また探さなければいけない。それはそれで面倒だ。

男は右手で頭をかくと、僕らを見た。

「船を移動手段として求めるんなら、仕方が無いよな。連れてつてあげるよ。」

男は僕らにそう言う。そして、海を見ながら続けた。

「それにしてもあの島に行きたいだなんて、久しぶりに聞いたよ。」

「前にも誰かあの島に行きたいって言ったんですか。」

サヤが男に聞く。誰かとは誰なんだろうか。まさか、姉さんたちなのか。

「ああ居たよ。そうだな、確かあんたらのように男女二人組だったと思うよ。」

男は僕らに言った。男女二人組か。姉さんと義兄さんである確証は無いけど、可能性は高そうだ。

「そうですか。ありがとうございます。」

僕は情報を提供してくれた男に礼を言った。姉さんたちでは無かったとしても、島へ向かう人が居るということ。多分僕らと同じ考えの人間が居ることはわかった。

「よし。ちょっと待ってな。」

男はそう言う。船に載せてある荷物を陸に上げていく。

「道具があると、人間乗せられないからね。」

そう言いながら、船に載せてあった道具類を僕らのところに置く。そして、僕らを見て続けた。

「さてと、行こうか。」

僕らは男の船で陸を離れ、島へと向かった。

僕らは島へ着き、船から下りた。空を見れば、太陽が西に傾きだしていた。

「本当に、こんな島になんの用があるんだい。」

男が僕らに言う。

「色々あるんです。」

僕は男にそれだけ言った。

「ありがとうございます。」

僕らは礼を言つと、船を離れた。

「ちょ、ちよつと。」

背後から男の声が聞こえてくる。僕らは振り向いた。

「私は帰りますからね。」

男は僕らに言った。

僕は空を見上げる。このまま居たら夜になるだろう。そこまでかまっていられないか。

「どうぞ。あとは僕らでなんとかします。」

僕は男へ言う。この先に僕らが求めたものが必ずある。それさえ手に入れば、あとは自力で帰ってきてもいいだろう。それに、何時戻れるかもわからないんだから。

「知りませんからね。」

男はそう言いながら陸を離れていった。

僕らは陸を見る。この先に僕らが求めた場所があるんだ。もうすぐだ。

この島のロンドンという町の中にあるんだろう。しかし、そこは何処なんだ。

町の中にあるとしかわからない。

「あれ。」

サヤがある方向を見ながら僕に言った。そして、僕を見て続けた。

「女の子。」

「誰か居るのか。」

僕も、サヤと同じ方向を見た。すると、半壊した建物の傍に女の子が見えた。

彼女は、僕らが気づいたことを確認するとどこかへ走っていった。

「追いかけてみようよ。」

サヤはそう言いながら走り始めていた。

「ちよつと、待てよ。」

僕もサヤと一緒に女の子を追いかけ始めた。

女の子は所々で立ち止まり、僕らが付いて来ていることを確認する。彼女が何度かその行為を繰り返すと、目の前に大きな二つの建物が現れる。彼女はその間を走り抜けて、小さな扉の向こうに消えていった。

「なんだ。この建物は。」

僕は立ち止まり両側に立てられた建物を見る。どちらも急いで造られたのか綺麗な形はしていなかった。これまで色々な建物を見てきた上で見ると、造りの悪さが目に付く。

「ひとまず、あの扉の向こうへ行ってみようよ。」

サヤは僕を見て言った。女の子が消えた扉の先。そこは、僕らが求めた地なのかもしれない。

「そうだな。行こう。」

僕はサヤを見て言った。

僕らは扉へ向かって歩き出す。そして、扉を開けた。

扉を開けると下へと続く階段があった。階段が行き着く先を見ると、そこには先ほど追いかけた女の子と年老いた男性が居た。年齢差からして二人は親子なのかもしれない。

「いらつしやい。」

僕らが階段を下り始めると、女の子はそう言った。階段を下りきると僕らは二人に挨拶した。

「よく来てくれたね。君たちも、きおくを見に来たんだろう。」

年老いた男性が僕らを見て言う。そして、続けた。

「ああ、自己紹介がまだだったね。私はウィリアム。そして、娘のミナだ。」

「どうぞよろしくね。」

ミナと紹介された女の子は僕らに挨拶する。

「僕はカイです。こっちはサヤ。」

僕は自分と隣に居るサヤを紹介した。

「君たちは東洋人かい。」

ウィリアムさんは僕らを交互に見ながら聞いた。東洋人な面してますか。

「はい。そうです。日本から来ました。」

僕はウィリアムさんに言った。

「日本か。遠かっただろう。まだ日本から来た人間は君たちを除いて二人しかいないよ。」

ウィリアムさんは僕らに言う。僕らの前に二人、ふたりってまさか。

「まあ、立ち話もなんだからこちらに来て休みなさい。疲れただろう。」

ウィリアムさんは僕らを奥の部屋へ通そうとする。その前に、確認しておきたかった。

「二人って、どんな人たちだったんですか。」

僕はウィリアムさんに聞いた。

「男女二人組だったよ。名前はセイジさんとマヤさんだったな。」

「姉さんたちかもしれない。」

僕はサヤを見て言った。姉さんたちもきおくを見るために旅をしていたんだ。名前が同じなら可能性は高いだろう。

「なんだ。その二人と知り合いなのかい。」

ウィリアムさんは僕らに聞く。

「姉と義兄がここを目指して旅をしまして、その二人の名前と同じなんです。」

僕はウィリアムさんに言う。

すると、ミナは僕に近づいてきて顔をじろじろ見た。

「確かに、お姉ちゃんに似てるような気がする。」

ミナは僕を見ながら言う。そして、ウィリアムさんを見て続けた。

「だとしたら、あそこに連れて行かなきゃ。」

あそこって何処なんだろうか。

そのとき、扉が開く音がする。誰かが階段を下りてきた。

「ウィリアムさん。さっき施設に入っていくやつらを見たんだが。」

声のするほうを向けば、大男が居た。

「ああ、グランくん。それはこの子達のことじゃないかね。」

ウィリアムさんはグランと呼ばれた大男に言う。そして、続けた。

「日本から来たようだよ。」

「男女の二人組か、しかも日本からとはあいつらみたいだな。」

グランは僕らを交互に見て言う。あいつらってやつぱり姉さんたちなのかな。

「話を聞いていると、カイって人がお姉ちゃんの弟さんみたいなの。

何処と無くお姉ちゃんに似てるし。」

ミナがグランを見て言う。

「ほお。」

グランは僕に近づいてじつと見る。

「確かに何処と無く似てるかな。」

グランは僕から顔を離しながら言った。

「でしょ。この人が言ったお姉さんお義兄さんの名前とお姉ちゃんたちの名前が同じなの。それに、同じようにこの施設を目指しているらしいから。」

ミナがグランを見て言う。

「そこまで同じならあいつらの弟なんだろうな。」

グランはミナを見て言う。そして、続けた。

「それで、二人のことは言ったのか。」

ミナは首を横に振る。

「そうか、だったらマヤとセイジのところにこいつらを連れていてやるう。」

グランは僕らを見ながら言った。姉さんたちに会えるのだろうか。会えるのならきおくなんて後回しだ。

「あんたらの名前は。」

グランは僕らにそう聞いた。

「僕はカイ。彼女はサヤです。」

僕は自分とサヤの名前を言った。

「そうか。じゃあ、カイくんサヤさん。付いて来てくれ。」

グランはそう言うと、出入り口への階段を上り始めた。

外へ出ると、グランは大きな建物を通り抜けて歩く。すると、来るときには大きな建物に両側を囲まれて見えなかったが裏に低い建物が建てられていた。それに他にも何人か人間がいる。建物に隠れて見えなかったのかもしれない。

「お頭。そいつらなんなんですか。」

建物の前に居た男の一人がグランを見て言う。この人は「お頭」と呼ばれているのか。

「あとで話す。とっとと飯作ってる。」

グランはその男に言った。そして、僕らを見て続ける。

「私の部下たちだ。」

そして、僕らは再び歩き出した。

しばらく歩くと、海が見えてきた。グランはそのまま歩き続けて、海が見える崖の上に到達した。目の前には沢山の墓が見える。まさか、まさかな。

グランは墓の間を通って歩く。そして、ある墓の前に立ち止まった。

「マヤとセイジだ。」

グランは二つの墓を見て言った。

「え。」

僕はそれしか言えなかった。お墓の中を歩き出した時点でこうなる予感はしていた。しかし、実際言われてみるとやっぱり衝撃だ。「これが、姉さんと義兄さんの。」

僕はしゃがみこんで二つの墓を見た。そうか、死んでしまったのか。しかし、何故なんだ。

「なぜ死んだんですか。何があったんですか。」
声が大きくなっていることは自分でもわかった。何かが起こったんだ。それに姉さんたちが巻き込まれた。そうじゃなきゃ納得出来ない。

グランは一度深呼吸をする。

「さっき君たちが行った場所はきおくがある施設だ。それはわかるよな。」

グランの言葉に僕らは頷く。それがどうしたのだ。グランは僕らを見て続けた。

「二年ほど前に、あの施設が米国の軍に勝手に占領されてな。俺たちは取り戻すためにそいつらと戦ったんだ。その中にセイジとマヤも居たよ。そして、施設を取り戻した。しかし、多くのものを失った。」

グランは二人の墓を見て続けた。

「二人は、最後まで俺たちと戦った。けど、施設奪還と共に死んじまったんだ。この二人が居なかったら、俺たちは今ここには居られない。二人が、戦いを終わらせたんだ。」

グランの話を聞くと、姉さんたちは命がけであの施設に僕らが来れるようにしていったんだ。姉さんたちは無駄に死んだわけじゃない。

けど、姉さんや義兄さんが殺されたことに変わりはない。

「軍のやつらは施設を占領して、きおくの中の争いに関する情報を国に持ち帰っていった。」

グランは立ち上がりながら言う。そして、海の方こうを見ながら続けた。

「あいつらは戦争を始めるんだろう。どこかへな。俺たちはあいつらを止めなきゃいけないんだ。それを目指して死んでいった多くの仲間たちのためにもな。」

グランは僕らを見て続ける。

「君たちにも手伝って欲しいが、急に言ってもわからないよな。まずはきおくを見てからゆっくり考えて欲しい。あの施設の、きおくの存在する意味を。」

グランは一度深呼吸をすると続けた。

「一気に色々言い過ぎたな。さあ、戻ろう。君たちが求めたものがお待ちかねだ。」

僕らは施設へと戻る道を歩き出した。

歩きながら僕は考えた。姉さんたちが望んだことを。

姉さんたちは施設を取り戻そうとした。そして、あいつらを止めようとした。

それをするだけの価値がきおくにはあるのだろうか。見てみればわかるだろう。さあ、見せてもらおうか。彼らが守ったものを。僕らは施設に戻ると、ウィリアムさんとミナが待っていた。

「お姉ちゃんたちのお墓、見てきたんだね。」

ミナの言葉に僕は頷く。

「早くきおくが見たいんです。案内してもらえますか。」

僕はウィリアムさんに言った。どうしても早く見たかった。

「急いでも逃げていくことは無いが、早く見たいというのなら。こっちだ。」

ウィリアムさんはそう言うと、僕らをきおくのある部屋へ案内した。

部屋の中は真っ暗だったが、ウィリアムさんが壁の近くで何かした直後、明かりが付いた。

部屋の壁一面には巨大な四角い何かが貼り付けられていて、その下には台がある。その台には手の形をした印がある。手形に合わせて手を置けというのだろうか。

「ここがきおくの部屋だよ。台に両手どちらかの手を置いて、知りたいことを心の中で思えば目の前の画面に映し出される。」

ウィリアムさんは僕らを見て言った。まったく理解しがたい方法

だが、この部屋を見ると信じたくもなる。この部屋だけ他の部屋とはまったく違うように見えたからだ。

「ああ、二人だから手を繋いだ状態で台に手を触れるといいよ。」

「え、何故ですか。一人でも操作できるんでしょ。」

僕はウィリアムさんの言葉に応えた。

「手を繋いだ人は操作は出来ないけど、知りたい情報は共有できるんだよ。説明より実際にやってみたほうがいい。」

ウィリアムさんは僕らに言った。

僕はサヤと手を繋いだ状態で台に触れた。すると、目の前の画面がゆつくりと白く光りだす。それとともに音が聴こえてきた。僕は周りを見る。どこから聴こえてくるのだろうか。サヤも同じように出所を探しているようだ。

「君たちに直接音が届いているんだよ。台に手を触れていない人は、台に触れている人から手を離すと聞こえなくなるから気をつけてね。」

ウィリアムさんは僕らを見て言った。ということは、ウィリアムさんたちには聞こえていないってことか。

完全に白い画面になると画面には音とともに沢山の単語が並べて表示されるが、すぐにその中のひとつだけが残り他は消えてしまった。残った単語が音とともに消えると、画面に大きく「調べたいことを思い浮かべてください」と表示される。

調べたいことと言っても色々あってどれから調べればいいんだろうか。

僕はサヤを見た。操作の出来ないサヤは引き出された情報を見るだけだ。

「好きに見ればいいよ。私はそれと一緒に見るから。」

サヤは僕を見ながら言う。そして、画面を見た。

「そうか、それじゃあまず。」

僕はそう言うと、心の中でずっと知っていたことを思う。この旅で知りたくても知ることの出来なった数多くのことを。

僕が思えば情報が画面に表示されていく。

「元の画面に戻りたい場合は、画面下の検索っていう印を押すように心の中で思うんだ。」

ウィリアムさんが背後から僕らに声をかける。戻り方がわからないと面倒そうだ。

さてと、次は何を見ようか。

僕らは幾つもの情報を引き出して見た。人々を幸せにする發明の中に潜む人間の底知れない悪も。

けど、どの情報よりもっとも知りたかったことがひとつある。僕は検索の印を押して、最初の画面に戻った。

そして、僕は思った。

この施設が作られた意味は何なんだ。

僕がそう思った直後、サヤがこちらを見たことが確認できた。すると、画面内に人が現れた。それは、まるで画面の向こうに人が居るように感じられた。

「この施設はあくまで我々人類のきおくの退避場所に過ぎないのだよ。」

画面の中の老人は僕らに言った。

あんた誰だ。僕は画面に向かってそう思った。これまでは文章や絵といったものしか表示されなかった。しかし、今は画面に男が表示されていて、すべての情報が音声で伝達されている。

「私はこの装置に搭載されている人工知能だよ。基本的には、君たちが情報を見るときに裏で操作するのが私だ。」

画面の中の男は僕らにそう言う。僕が思ったことを理解している。なんなんだこいつは。

ならば、何故前に出てくる。裏方なら前に出てくる必要も無いだろう。

「この施設に関することは私が答えるようになっていく。」

画面の中の老人が言う。施設について全部知っているんだろう。ならば、聞こうか。

この施設が退避場所とはどういう意味なんだ。

「この施設は、これから起こる戦争によって人類のこれまでのきおくが後世の人間に伝えられずに消えていくことがないように造られたものだ。そのために、きおくは誰でも思った通りに操作できる装置を使って取り出せなければならぬ。だから、既に玩具の一部に使用されるほど広まった装置を使用することにしたんだ。」

画面の中の老人は僕らに言う。

戦争というのはあの戦争のことなんだろうか。思った通りに操作できる装置とは今自分が触れている台のことだろう。いや、正確には台に使われている装置だろう。

「この施設はこれから起こる戦争の前に造られたものだ。故にその戦争についての情報は存在しない。しかし、その戦争が終わった後この中にあるすべてのきおくを世界に公開してほしい。それが、私たちの願いだ。」

僕は台から手を離れた。すると、老人は消えて最初の画面に戻りゆっくり暗くなっていった。

「もう、いいの。」

手を繋いでいるサヤが僕を見て聞いた。

「うん。もう、いいんだ。」

僕はサヤを見て言う。そして、画面を見て続けた。

「この施設を造った人たちが望んだことは、これまでの人類のきおくが後世の人たちに伝えられること。昔の過ちを繰り返してほしくないことなんだと思う。」

僕らがこのきおくを見た上でしなきゃいけないことは。

「サヤ。僕も姉さんたちが守ったものを守りたいんだ。だから、一緒に居てくれないかな。」

僕はサヤに言った。ここでサヤが嫌だと言うならばもう帰ればいいことだ。

「しょうがないわね。居てあげるわよ。」

サヤは笑顔で言ってくれた。よかったと思う。

きおくのある部屋を見れば、ウィリアムさんやミナは居なかった。あまりに時間が長かったために二人は何処かへ行ってしまったのだろうか。部屋を離れるなら一言言ってくれればいいのに。それとも僕らが気がつかなかったただけなのか。

施設の出入り口へと続く階段がある部屋へと戻った。すると、ウィリアムさんとミナが横の部屋から出てくる。

「見終わったのかい。それとも見飽きたかな。今日はもう遅いから泊まっていくといい。」

ウィリアムさんは僕らにそう言った。

「え、いいんですか。ありがとうございます。」

僕はウィリアムさんに言う。このまま泊まってもいいけど、まだすることがあった。

「外の人たちと話して、また戻ってきます。」

僕はそれだけ言うとう出入り口への階段を上り始めた。

「じゃあ、ちよつと行って来ます。」

背後からサヤの声が聞こえてくる。かまわず階段を上り、扉を開けて外へ出た。

外は既に暗くなっていた。空を見上げれば雲ひとつ無く沢山の星が見えた。

この世界もこの星空のように澄んでいればいいのに。

境界線 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4382e/>

境界線

2011年10月5日00時30分発行